

2024 年度 教師海外研修報告書

目 次

写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った2枚』

I. 教師海外研修の概要	1
1. 目的・ミッション	
2. 訪問国と訪問先	
5. 研修の受講者	
6. 研修全体のスケジュール	
II. 出発前後の国内研修・説明会	7
7. 事前研修	
10. 出発前説明会	
11. 事後研修①	
III. 現地研修の様子と受講者の学び	14
14. ① JICA ネパール事務所ブリーフィング	
14. ② パンシュパティナート寺院、ボダナート寺院	
15. ③ JICA 海外協力隊（経営管理）活動地	
15. ④ ラブグリーンネパール事業地（モデル圃場・農家）	
16. ⑤ ホームステイ（2泊3日）	
18. ⑥ ホームステイ組合による歓迎会（葉の皿作り／カルチャープログラム）	
19. ⑦ Kalidevi Secondary School（授業見学、模擬授業・交流など）	
19. ⑧ ACP（Association for Craft Producers）Nepal 工房、直営店「Dhukuti」	
20. ⑨ Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center+⑩防災クラブ活動	
21. ⑩ Bhassara Secondary School（授業見学、模擬授業・交流など）	
21. ⑪ e-Education（映像教育）Arunodaya Secondary School	
22. ⑫ CWIN（Child Workers in Nepal）	
22. ⑬ 日本語学校 Universal Training Center（授業見学、交流）	
23. ⑭ Gate College 日本語クラス（授業見学、交流）	
24. ⑮ ナグドゥンガ・トンネル建設事業 工事現場	
24. ⑯ アサン地区・タメル地区	
25. ⑰ JICA ネパール事務所関係者との懇親会	

IV. 帰国後の報告 ----- 26

- 26 ● 現地研修報告書
- 26 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度
- 28 2. ネパールから学んだこと①「ネパールに肯定的に出会う」観点から
- 30 3. ネパールから学んだこと②「日本とネパールとのつながりや同一性を理解する」観点から
- 32 4. ネパールから学んだこと③「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から
- 34 ● 開発教育指導者研修（実践編）第3回における報告
- 34 ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2025 に向けた準備
- 34 ● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2025 での報告

V. 実践報告書 ----- 36

- 36 ● 実践報告書の内容一覧
- 37 ● 市原 健：せかいの子どもたちとなかよくなろう！
- 43 ● 掛井 遥奈：みんなの地球、みんなの東部小、みんなの3の2♡
- 50 ● 坂田 英香：世界の Well-being 自分の Well-being
- 57 ● 長澤 佑亮：世界の架け橋プロジェクト ～共に生き、共に乗り越える～
- 65 ● 中島 浩平：New Encounter : Promoting Acceptance & Learning
- 73 ● 道野 大和：ネパールから世界を知る
- 81 ● 山田 拓弥：SDGs×キャリア教育 ～「より良い未来」をみんなで作ろう～

VI. 研修全体のふりかえり・評価 ----- 89

- 89 ● 研修受講者アンケート結果から
- 89 1. 研修の満足度について
- 89 2. 開発教育・国際理解教育の実践について
- 90 3. 学習者のより良い変化について
- 91 4. 研修内容への評価
- 93 5. 教師海外研修と開発教育指導者研修（実践編）の両方を受講することの効果
- 95 ● 実践内容の評価
- 96 1. 「学習者の学びの3つの柱」についての実践度
- 96 2. 「学習者主体の参加型、収集教材の活用」についての実践度

写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った2枚』 1/4

※ 出発前説明会で決めた『気持ちよく豊かに学びあうための私たちの約束 8 カ条』

● 池田美輝



① 想いを伝える ♡ 想いを聴く ♡ ※



スポーツと夢

ホームステイ先の中学校三年生の子に、サッカーボールをプレゼントした。途上国の子どもたちを支援する取り組みが進み、次世代を生きる子どもたちが、自分の夢に向かって歩める未来になってほしい。



楽しい学校

授業で、視覚支援をすると、子どもたちから素敵な反応が返ってきた。絵や言葉、非言語コミュニケーション等で、子どもたちに一度に内容を伝えることができた。教師の支援は、他国でも通用することに気づき、自信となった。

● 市原健



② 五感で感じたことを、きちんと具体的に言語化しよう



ネパール式のおもてなしに感激！

ホームステイ先に車で到着してすぐ、音楽や踊り、花飾りなどで盛大な歓迎を受けた。ネパールの人々の真心がこもったおもてなしに心が温まるとともに、「ネパール大好き!」という思いが芽生えた瞬間。



日本語を熱心に学ぶ皆さん

日本語学校で交流した学生さん達との記念撮影。日本で介護や料理に関わる事がしたいということだった。上手な日本語を話すことから、熱心に勉強をしてきたことが分かる。ぜひ、日本で夢を叶えてほしい。

写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った2枚』 2/4

● 掛井遥奈



③ メリハリを持って、楽しむところは楽しみ、学ぶところはトコトン学ぼう



伝統衣装体験会！

ホームステイ先で「浴衣」を紹介した。ホストファミリーのおばあちゃんとママに「着てみる？」と聞くと恥ずかしそうにしながらも挑戦してくれた。近所の人もどんどん集まってきて、プチ着付け体験になった。



夢をのせた紙飛行機

学校の子どもたちと一緒に折り紙に自分の夢や大切なものを書いて紙飛行機にして飛ばした。それぞれの夢をのせて空に飛ぶ紙飛行機とそれを見上げてはしゃぐ子どもたち。子どもたちの笑顔がこれからも輝くことを願って。

● 坂田英香



④ 笑顔で過ごすために、ちょっとでもおかしいと思ったら、伝えよう



あっ！ 私だ・・・。

草刈中、自分のお土産の個包装を見つけたときの衝撃が忘れられない。この地域にゴミを持ちこんだのは私である。「途上国」に訪問するということ、人に寄り添うということが分かっていなかったと自覚した瞬間。



「幸せとは」「豊かさとは」

ホームステイ先のお父さんと「子どもたちの未来に対する願いや想い」を話しながら、彼が仲間とつくった寺院に向かって歩いた道からの景色。「幸せとは。豊かさとは。」ここで自問し続けた想いを大切にすると誓って。

写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った2枚』 3/4

● 長澤佑亮



⑤ 頼ろう、助け合おう



万国共通の宝

Kalidevi Secondary School で授業をした際に見た、子どもの笑顔。国や民族が異なっても、子どもの笑顔はどこに行っても世界の宝物。そんなことを思わせる一枚。



偉大なる母

ホームステイ先のママと別れ際に撮った一枚。まるで実母を思わせるくらい温かく私たちを迎えてくれた。「プギョ」と伝えた時の悲しい顔も、「ミトチャ」と伝えた時の嬉しそうな顔も、生涯忘れることはないだろう。

● 中島浩平



⑥ いい意味で、いい加減で♡



明るい未来のために

CWIN (Child Workers in Nepal: 児童労働・子どもの権利分野の活動団体) の敷地内の壁に描かれていたもの。これを見た時、言葉では言い表せられない想いが込み上げてきた。



新たなランドマーク完成！

ネパール初のトンネル、ナグドウンガ・トンネル建設現場での技術者との一枚。ネパールの特異な地質と戦い、貫通した現場を見学できて、感動が止まりませんでした。

写真集『受講者が選んだネパールで印象に残った2枚』 4/4

● 道野大和



⑦ すべてに対して、感謝の気持ちを持ち続けよう



絶景！目の前に広がるネパールの山々

ホームステイ先に向かう途中、延々と山道をバンで移動していると突如壮大な景色が現れた。急遽、車を路肩に止めて景色を眺めた。遠くに見える首都カトマンズの空気の汚染にも驚いた。



給食おいしい！ハイ、チーズ！

Kalidevi Secondary School での一コマ。日本と同じく給食が出る。パンとおかずだけといったシンプルのものだったが子どもたちは笑顔で食べていた。その笑顔は日本の子どもたちと同じであり、思わぬところで日本とネパールの共通点を感じた。

● 山田拓弥



⑧ 肯定的に相手を受け容れよう♡



孫を思う気持ちは万国共通

ホームステイ先のパパとママが孫とスマートフォンで会話をしている場面。離れて暮らす娘家族とテレビ電話で会話をし、孫に語りかけているときの表情は万国共通だなと感じた。



スポーツは共通言語

ホームステイをした村でサッカーを通じて仲良くなった少年たち。改めてスポーツは国籍や話す言語を超えて仲良くなるきっかけを与えてくれると実感した。

I. 教師海外研修の概要

● 目的・ミッション

(1) 目的

「持続可能な社会の創り手の育成」への貢献をねらいとし、次の2点を本研修の目的とした。

- ① 開発教育・国際理解教育の実践と裾野拡大に貢献する意欲のある教員が、開発途上国訪問や事前・事後の研修を通じ、開発途上国の現状・課題、日本との関係、国際協力の現場、さらには開発教育・国際理解教育の意義について理解を深めること
- ② 研修受講者が、研修成果を活かした学校での授業実践を通じ、「持続可能な社会の創り手」としての児童・生徒の育成を行うこと、また、汎用性のある学習指導案の作成などの取り組みを通じて他の教員等と共に開発教育・国際理解教育の普及に寄与すること

(2) 受講者が設定した「わたしたちのミッション」

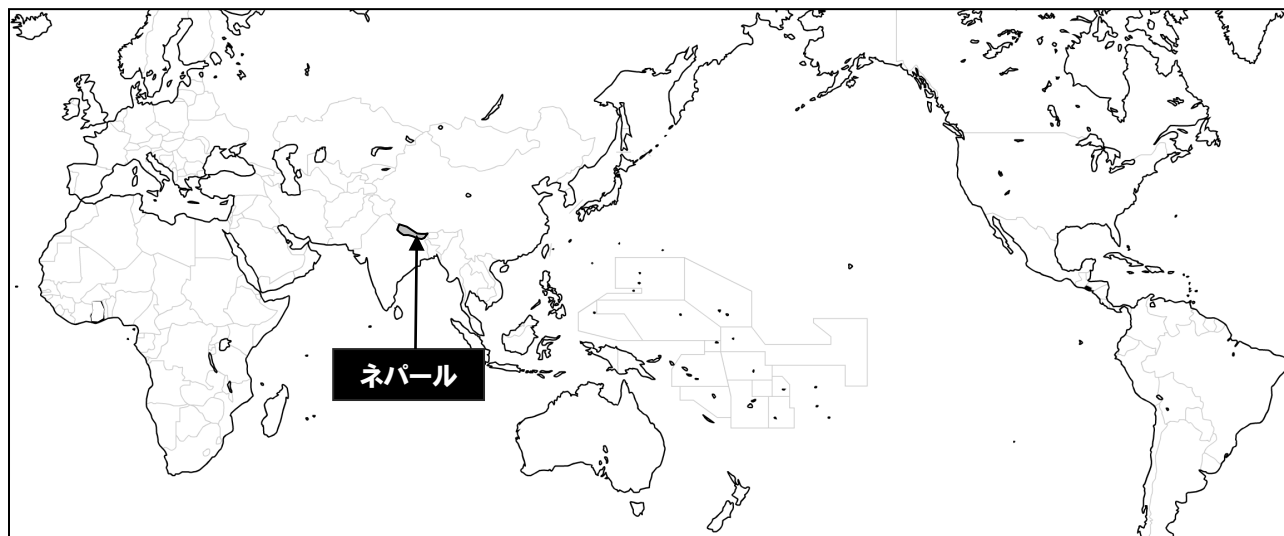
本研修の上記の目的を踏まえ、海外研修の全体のミッションを、受講者同士で次のとおり設定した。

- ＜現地＞
 1. ネパールと肯定的に出会う
 2. ネパールを楽しみ、ファンになる♡
 3. ネパールをもっと知る（日本とのつながりを発見する）
 4. 材料（教材）を集める
 5. ネパールの人の思いを持って帰ってくる
- ＜教育＞
 6. おもしろく、肯定的に伝えるための方法を作り出す（参加型）
 7. オリジナルの教材をつくり、子どもたちに還元する
 8. 子どもたちの視野を広げる
 9. 参加型のワークショップを通じ、地域や周りの職員に広げる
- ＜私たち＞
 10. 無事に帰国する！
 11. ネパールと仲間と末永くつながる
 12. 上記の教育を共に進める仲間を増やす
 13. 継続するのだ！！ずっと

● 訪問国と訪問先

(1) 訪問国

訪問国はネパールである。



(2) 現地研修における訪問先

訪問先は、JICA 中部と NIED・国際理解教育センター（運営委託先）が、①～③の点を踏まえて行程案を検討し、JICA ネパール事務所と調整の上で決定した。

- ① 現地研修の学びの視点を満たす主要テーマを設定する。
- ② ネパールの概要、過年度の研修の訪問実績および現在の JICA 事業を踏まえる。
- ③ 「教材化にあたっての子どもたちの学びの柱」を下表のとおりとする。

教材化にあたっての子どもたちの学びの柱

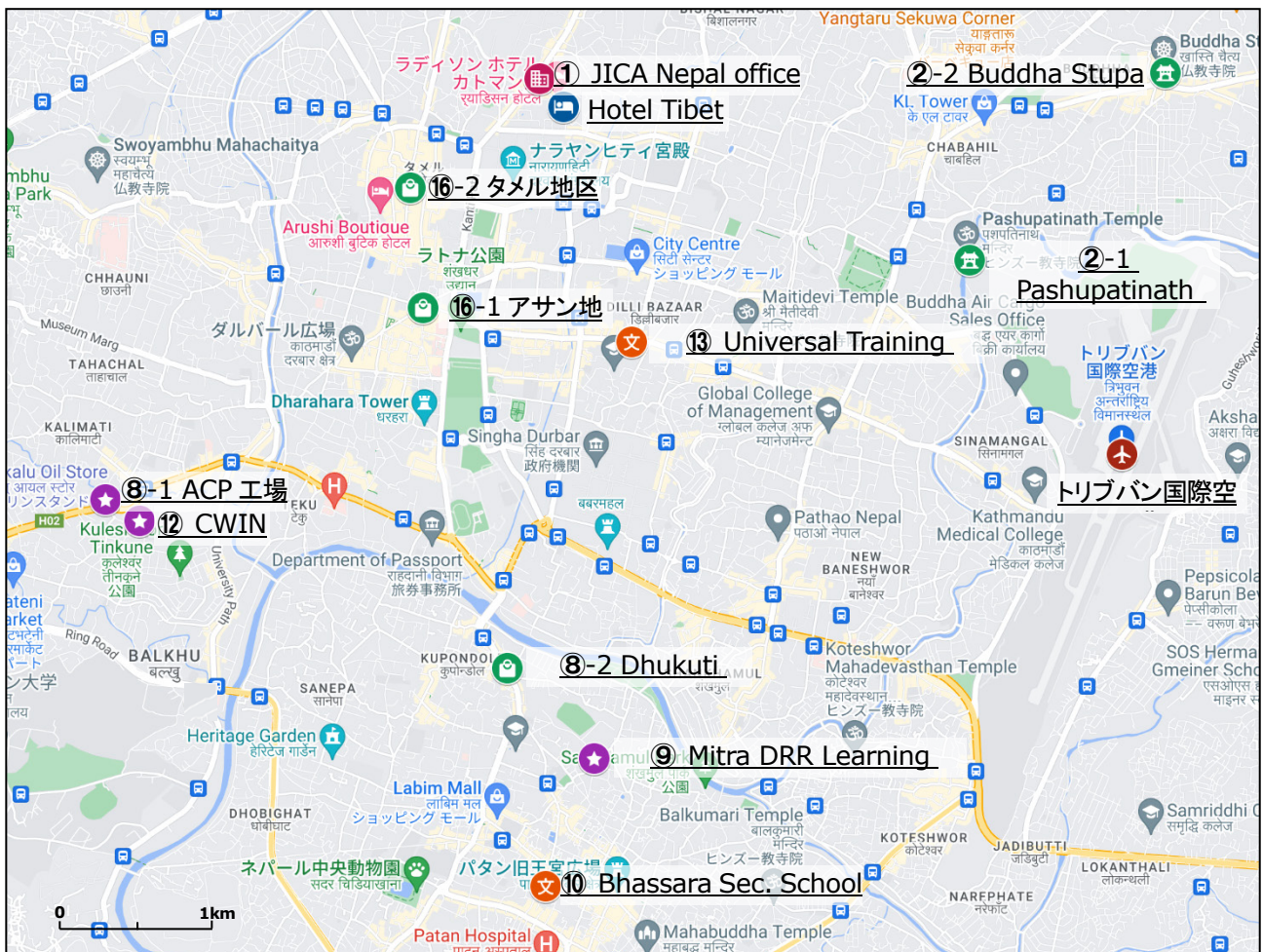
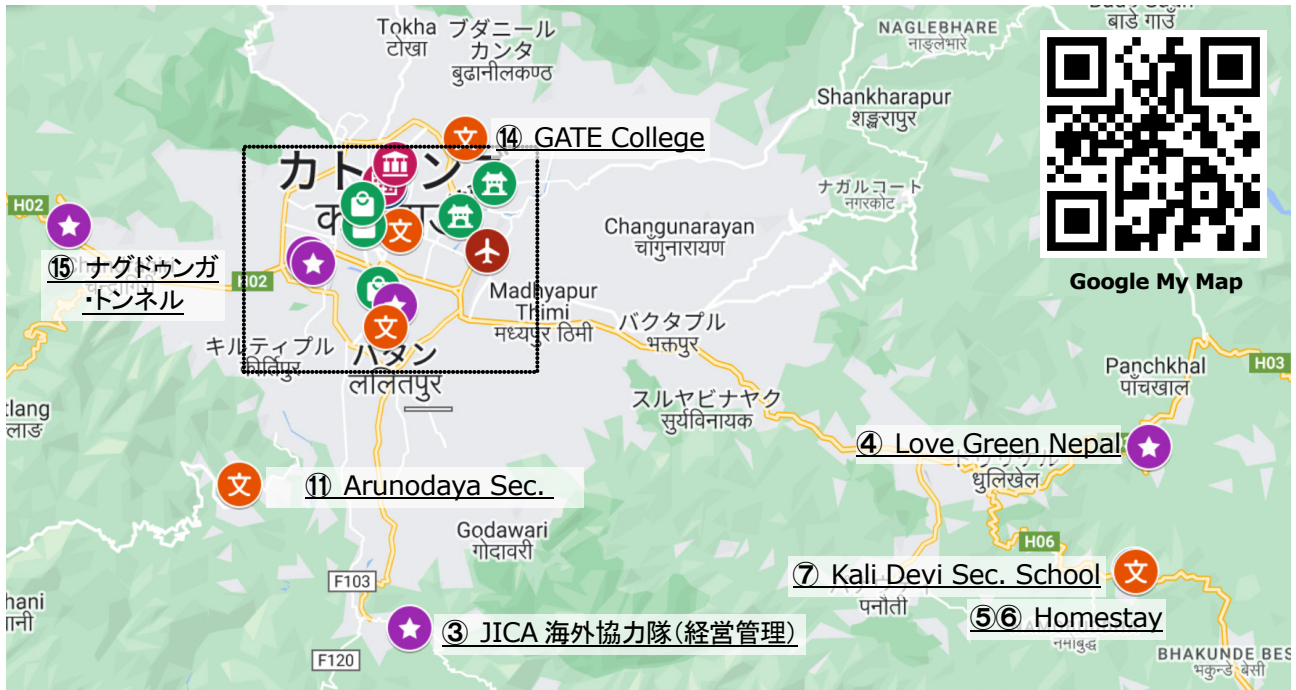
学びの柱	内容・視点
1. ネパールに肯定的に出会う	◇ 世界の多様性を知り、多様な人やものと出会うこと・交流することの楽しさを伝える。 ◇ 多角的に肯定的にネパールと出会い、人の顔が見え、身近に感じられるようになる。
2. 日本とネパールとのつながりや同一性を理解する	◇ 国や人の多様性だけではなく、共通するものがあること（同一性）を理解する。 ◇ 地球規模で進むグローバル化の恩恵と課題を理解し、日本とネパールとのつながりに気づき、つながりを築く。
3. 共通の課題について共に考え・共に越える	◇ 相手を知ることで自国（自分）をふりかえり、互いの誇りや課題を確認する。 ◇ 共に学びあい、知り、考え、気づき、よりよい未来を共に築く入口を提供する。

現地研修の訪問スケジュール

期 日	訪 問 先 ・ 内 容
7/29 (月)	09:15 中部国際空港発ー(KE744/2h05m)→11:20 仁川空港着 (乗継2h15m)ー 13:35仁川空港発ー(KE695/7h10m)→17:30カトマンズ(トリブバン空港)着 →ホテル泊
30 (火)	① JICAネパール事務所ブリーフィング ② パシュパティナート寺院、ボダナート寺院、近隣店で教材収集
31 (水)	③ 【協力隊】JICA海外協力隊(経営管理)活動地 (活動紹介、農家体験、農家で昼食、周辺散策、伝統お菓子作り)
8/1 (木)	④ 【草の根】現地NGO「ラブグリーンネパール」事業地(モデル圃場・農家) (IPM農産物の出荷と販売の仕組みづくりを通じた農業活性化/日本NGO「ラブグリーンジャパン」プロジェクト現地実施団体) ⑤-1 ホームステイ 15:30～ ⑥-1 ホームステイ組合による歓迎会 (葉の皿作り)
2 (金)	⑤-2 ホームステイ 全日 (13:00～15:30 除く) ⑦ Kalidevi Secondary School (授業見学、昼休み見学、体験授業・交流、教員との意見交換) ⑥-2 ホームステイ組合による歓迎会2 (カルチャープログラム)
3 (土)	⑤-3 ホームステイ ～13:00 ★中間ふりかえりミーティング
4 (日)	☆小休息(～10:15) ⑧ ACP(Association for Craft Producers)Nepal工房、ACP直営店「Dhukuti」教材収集 (フェアトレード商品を作っている手工芸品工房、店舗)
5 (月)	⑨ 【草の根】現地NGO「Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center」 (ミトラ災害リスク削減学習センター/学校のクラブ活動を活用した防災コミュニティのモデル形成事業 /日本NGO「プラス・アーツ」プロジェクト現地実施団体) ⑩ 防災クラブ活動を行う学校「Bhassara Secondary School」 (授業見学、防災教育の説明、体験授業・交流、校長との意見交換)
6 (火)	⑪ 【草の根】e-Education(映像教育)実施学校「Arunodaya Secondary School」 (映像授業を活用した理数科教師の指導力向上と生徒の学力向上に向けた仕組みづくり /授業見学、事業説明、教員との意見交換/日本NGO「e-Education」支援) ⑫ 【現地NGO】CWIN(Child Workers in Nepal)(児童労働・子どもの権利分野の活動団体)
7 (水)	⑬ 日本語学校「Universal Training Center」(授業見学、学生との懇談) ⑭ Gate College(ホスピタリティマネジメント大学/1年生日本語クラス授業見学、学生との交流)
8 (木)	⑮ 【有償資金協力】ナグドゥンガ・トンネル建設事業 工事現場(事業説明、坑内見学) ⑯ アサン地区(下町)・タメル地区(観光客エリア) 散策・教材収集 ⑰ JICA事務所関係者との懇親会
9 (金)	★ 最終ふりかえりミーティング ★ JICAネパール事務所 帰国前報告会 19:20カトマンズ(トリブバン空港)発ー(KE696/6h40m)ー
10 (土)	05:15仁川空港着ー(乗継5h30m)ー10:45発ー(KE741/1h55m)→12:40中部国際空港着！

注:【草の根】…草の根技術協力事業

現地研修の訪問先



※ 地図出典：Google Map

● 研修の受講者

(1) 受講者

8名の研修受講者の属性及び同行者を含む名簿は以下のとおりである。
また、JICA 中部及び NIED が一名ずつ同行した。

性別：女性 3 名、男性 5 名
年代：20 代 2 名、30 代 4 名、40 代 2 名
地域：愛知県 5 名、静岡県 3 名
校種：小学校 5 名、中学校 2 名、高等学校 1 名

教師海外研修受講者及び同行者名簿

No.	名前	所属先・教科・学年	県
1	いけだ みき 池田 美輝	岡崎市立根石小学校 全教科、社会、3 年生	愛知
2	いちはら たける 市原 健	長久手市立東小学校 全教科、1 年生	愛知
3	かけい はるな 掛井 遥奈	磐田市立東部小学校 全教科、3 年生	静岡
4	さかた ひでか 坂田 英香	浜松市立泉小学校 (静岡大学教職大学院)	静岡
5	ながさわ ゆうすけ 長澤 佑亮	沼津市立大岡中学校 社会、2 年生	静岡
6	なかしま こうへい 中島 浩平	愛知県立豊田南高等学校 英語、2 年生	愛知
7	みちの やまと 道野 大和	津島市立西小学校 全教科、5 年生	愛知
8	やまだ たくや 山田 拓弥	名古屋市立鳴子台中学校 英語、1 年生	愛知
D1	てついのぶひと 鉄井 宣人	NIED・国際理解教育センター ファシリテーター	岐阜
D2	おくだ きりこ 奥田 桐子	JICA 中部 市民参加協力課 コーディネーター	愛知

(2) 応募資格等

【応募資格】 次の要件をすべて満たす方

- ① 愛知県、岐阜県、三重県、静岡県の国公立、私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（児童・生徒に開発教育・国際理解教育を継続的に実践できる立場にある教員）で、所属する学校の校長の推薦があること。
- ② JICA が実施している教師海外研修、JICA 海外協力隊、専門家、国際協力レポーター（ODA 民間モニター）等 JICA から海外に派遣された経験がないこと。

【参加条件】 次の条件を満たす方

- ① 教師海外研修の趣旨を十分理解し、同研修の実施および JICA が実施する開発教育支援事業に協力できること。
- ② 2024 年度中に授業やクラブ活動で、教師海外研修の経験を活かした開発教育・国際理解教育を実践できること。
- ③ 国内で実施される研修・説明会および現地研修の全行程に参加可能であること。
- ④ 派遣国の事情（道路状況や衛生環境等）を勘案した上で、全研修行程に参加するに耐えうる健康状態であること。
- ⑤ 帰国後、所属長の承認を得たうえで、1) 現地研修に関する報告書を提出すること、2) 所属校における授業実践内容についての実践報告書を提出すること、3) 実践報告フォーラムで実践内容を発表すること、4) これら提出物を報告書冊子や JICA ウェブサイトなどで学校名、氏名とともに一般公開されることに同意すること。
- ⑥ 本研修に関わる連絡・情報共有のため、E メールでの連絡が可能な方。

● 研修全体のスケジュール

教師海外研修の各研修等は、以下のような年間を通した日程で行った。

回	日時	内容（予定）
事前研修※ ¹	7月6日（土）13：00～17：00 7月7日（日）10：00～15：00	●本研修の概要、派遣国・訪問先の説明 ●海外渡航手続き、健康・安全管理等の留意事項の説明 ●研修目標の共有、情報収集・交流の準備、役割分担
出発前説明会	7月28日（日）13：00～17：00	●JICA 安全講習、現地情報・準備事項の最終確認
ネパール 現地研修	7月29日（月）～8月10日（土） （本邦発着 13 日間／現地 11 日間）	●開発途上国の現場体験、教材の素材収集 ●気づきの共有、受講者同士の学び合い
事後研修①	9月7日（土）13：00～17：00 9月8日（日）10：00～15：00	●現地研修の気づきや素材の教材化 ●上記教材を使った学習者主体の授業案の作成
9月～1月：各自、学校の授業などで実践！ 11月16日（土）、1月18日（土）：教師海外研修報告の準備、実践のフォローアップ等（有志参加）		
事後研修②※ ²	2月22日（土）10：00～18：00	●実践の内容、成果と課題の共有 ●フォーラムでの報告の準備
実践報告 フォーラム※ ²	2月23日（日）10：00～17：30	●海外研修報告、各実践の報告（ポスターセッション） ●有志チームによる開発教育体験ワークショップ ●実践者つながりワークショップ

※1： 上記「事前研修」実施前に全国合同オンライン事前研修を各自で受講した。

※2： 事後研修②と実践報告フォーラムは、開発教育指導者研修（実践編）受講者と共同で行った。

II. 出発前後の国内研修・説明会

● 事前研修 7月6日(土)13:00~17:00、7日(日)10:00~15:00

<ねらい>

- ◇ 教師海外研修の目的・内容を理解し、自分たちの言葉でミッションを立てる。
- ◇ ネパールの概要および訪問先の情報を共有する。
- ◇ 海外研修の経験を授業につなげるための教材の収集方法を検討する。
- ◇ 現地で行うチームの役割分担、係ごとの内容を検討する。
- ◇ 海外研修の準備・留意事項（フライト、持ち物、健康・安全対策など）を確認する。

<プログラム>

■ 1日目：7月6日（土）

時刻	内 容	講師・資料
13:00 (5分)	1. 開会 (1) あいさつ (2) スタッフ、同行者の紹介	JICA 奥田 資料 0
13:05 (5分)	2. 教師海外研修の目的・内容 (1) 研修の全体概要と受講者への期待	NIED 川合 資料 1
13:10 (35分)	3. 共通基盤づくり (1) アイスブレーキング・自己紹介～お互いのことを知り合おう～ (2) 海外で学んでくる私たちが担うミッション	NIED 伊沢
13:45 (40分)	4. 海外研修の訪問国・訪問先情報の共有 (1) ネパールの概要 (2) 現地行程（案）・訪問での活動予定→聞きながら自分の関心事をメモ (3) 質疑応答	NIED 川合 資料 2,3,4
14:25 (15分)	5. 海外研修を生かした教材化の視点の確認 (1) 学習者の学びの3本柱とねらい (2) 教材づくりのポイントの説明	NIED 伊沢 資料 5,13
14:40 (30分)	6. 海外体験を授業につなげるための計画①／個人作業 (1) ミッションと事前研修のねらいの再確認 (2) 「事前ー現地ー事後」研修パッケージのねらいの説明 (3) 「現地で何を見て、聞いて、調べてきたいのか？」洗い出し（付せん紙） (4) 訪問先資料集を読み3つのポイントまとめ・発表、付せん紙の追加記入 (5) テーマ区分ごとに付せん紙の集約	NIED 久世、伊沢、 川合 資料 6,7,8,13
15:10	休憩 (10分)	
15:20 (90分)	7. 海外体験を授業につなげるための計画②／チーム作業 (1) 教材チーム&担当テーマ決め (2) 担当テーマの教材収集シート8人分を分類・整理 (3) これだけは集める！重点項目と教材収集のねらいの設定 (4) 全体で発表・共有→提案・リクエスト (5) 担当テーマの教材収集シートのとりまとめ	NIED 久世、伊沢、 川合 資料 8,13
16:50 (10分)	8. 事務連絡 (1) 海外旅行保険説明 (2) ホームステイ説明 (3) その他、質疑応答	JICA 奥田、 NIED 川合 資料 9

■ 2日目：7月7日（日）

時刻	内 容	講師等
10：00 (10分)	9. 朝のアイスブレイキング	NIED 久世
10：10 (95分)	10. 海外体験を授業につなげるための計画③／チーム作業 (1) 教材収集の工夫の検討、重点項目の収集方法の設定 (2) 日本にいる間にできること&事前準備の内容の整理など (3) 担当テーマの教材収集シートのとりまとめ・完成 (4) 完成版の発表・共有（提案の採否、全員にお願いしたいこと）	NIED 久世、伊沢、川合
11：45	お昼休憩（60分）	
12：45 (45分)	11. 学校での模擬授業・子ども達との交流の検討 (1) 模擬授業・交流の機会や環境の確認とチーム（ペア）分け (2) 模擬授業や子ども達との交流のアイデア出し	NIED 久世
13：30 (35分)	12. 現地での1日の流れの確認と役割分担係の検討 (1) 1日の流れと役割の確認 (2) ネパールチームでの役割の分担係決め	NIED 久世 資料 10
14：05 (40分)	13. 参加の準備や注意事項 (1) 出発～帰国までのフライトなどの情報 (2) ネパール現地研修中の安全、健康、ルールの大原則 (3) 持ち物・準備事項、その他留意事項 (4) 質疑応答	NIED 川合 JICA 奥田 資料 11,12
14：45 (15分)	14. 最終調整、事務連絡 (1) 出発前説明会、結団式の案内 (2) その他連絡事項	NIED 川合 JICA 奥田 資料 14

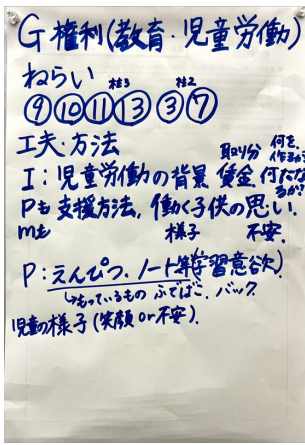
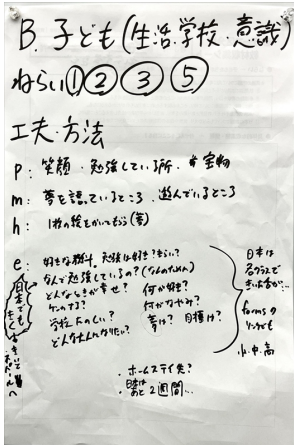
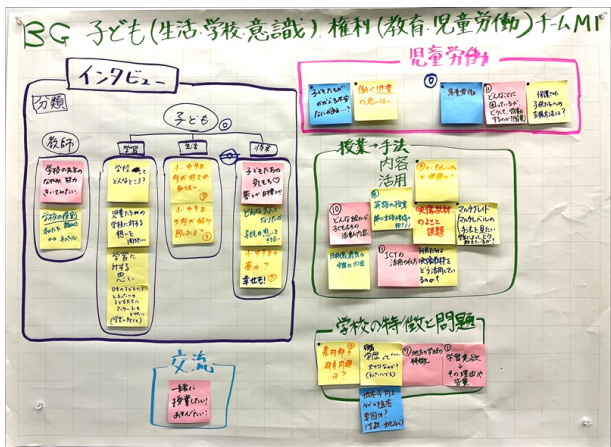
<配付資料>

- 資料 0：受講者・同行者名簿
- 資料 1：事前研修レジュメ
- 資料 2：ネパールの基礎・生活情報集
- 資料 3：ネパール現地日程案
- 資料 4：訪問先と活動予定（自分の興味・関心メモ）
- 資料 5：学習者の学びの柱・ねらい
- 資料 6：教材収集に係るテーマ区分（該当する訪問先など）
- 資料 7：ネパール訪問先資料集
- 資料 8：テーマ別教材収集シート
- 資料 9：海外旅行保険「無事カエルパック」資料
- 資料 10：チーム内の係の説明+研修の1日の流れ
- 資料 11：海外研修における安全、健康、ルールの大原則
- 資料 12：持ち物・準備に関する資料集
- 資料 13：JICA 中部 教師海外研修ガイドブック
- 資料 14：2023 年度教師海外研修報告書

<事前研修の様子>



<成果物>



■ 教師海外研修の内容及目標

■ 教材収集シート
MI (みき、みつちー)

B.子ども(生活・学校・意識)
G.子どもの権利擁護(教育・児童労働)

●「学習者の学びの柱」1: ネパールに肯定的に出会う
3: 共通の課題について共に考え・共に越える

● 重点的に収集する項目とその収集内容/方法・工夫 ※ねらいの詳細はP.1参照

重点項目	ねらい	収集内容/方法・工夫
B 子ども 生活・学校・意識	① ② ③ ④ ⑤	☐ [写真] 笑顔、勉強している様子、宝物 ☐ [動画] 夢を語っている様子、遊んでいる様子 ☐ [実物] 夢について描いた絵 ☐ [アンケート] 好きな教科、勉強は好き? 嫌い?、何のために勉強しているか、 どんなときが幸せか、ケンカする?、好きな物、悩み、学校は楽しいか、夢、 目標、どんな大人になりたいか
G 児童労働	⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫	☐ [インタビュー] 児童労働の背景、子どもの取り分・資金、作るもの ☐ [写真・動画] 支援方法、働く子どもの思い・様子・不安 ☐ [写真] 持ち物 (鉛筆、ノート、筆箱、バッグ等)、学習意欲、 児童の様子 (笑顔や不安)

● (参考) このテーマに関する収集したい内容一覧 ★: 重点項目

カテゴリー	収集内容
★子ども	[学習] ☐ 学校ってどんなところ? ☐ 児童たちの学校・学習に対する思い ☐ 日本の子どもとネパールの子どもの学習の対比 [生活] ☐ 小中学生の好きな物 ☐ 小中学生の悩み、困りごと [将来] ☐ 子どもたちの気持ち、夢、目標、幸せ ☐ どんな大人になりたいか
★児童労働	☐ どうして労働するのか (背景) ☐ どんなことに困っているのか、子どもが抱える不安 ☐ 保護された子どもたちへの支援方法 ☐ 働く児童の思い
教師	☐ 学校の先生の悩みや努力 ☐ 教師の思いとして学校の役割 (私たちとの対比)
授業 手法・内容・活用	☐ e-Education の内容、良さと課題 ☐ 子どもたちはどう映像教材を活用しているか ☐ ICT の活用の仕方 ☐ マルチグレード、マルチレベルの手法 (学年によってどう教えるか) ☐ 絵カードの活用、子どもたちの活動内容 ☐ 英語の授業 (第2言語習得の観点から)
学校の特徴 と問題	☐ 農村部の教育問題 ☐ 地方の学校の特徴 ☐ 学歴はどのくらい大切な ☐ 学習意欲とその理由や背景 ☐ 識字率向上の阻害要因 (宗教、文化など)
交流	☐ 一緒に授業したい! 遊びたい!

● みんなで協力すること

☐ 子どもへ [インタビュー] 「あなたの夢は何ですか?」

● 日本でやっておこう!

☐ 識字率 71% というのは世界的にみると高いのか低いのか

● 出発前説明会 7月28日(日)13:00~17:00

<ねらい>

- ◇ 海外研修の最新情報について共有し、出し物・お土産・情報収集などの最終調整を行う。
- ◇ 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけを決め、結団し、出発する。

<プログラム>

時刻	内 容	講師等
13:00 (5分)	1. はじめに ・主催者あいさつ、本日のねらいの確認	JICA 奥田 NIED 川合
13:05 (55分)	2. 最新情報と確認事項 ・マナビノオトの見方、使い方 ・その他各種留意事項 ・質疑応答	説明：NIED 川合
14:00 (20分)	3. 教材収集の確認 ・教材収集シートでの情報収集内容の確認・共有	進行：NIED 鉄井
14:20	休憩 (10分)	
14:30 (30分)	4. 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ ・仲間として ・個人として	進行：NIED 鉄井
15:00 (50分)	5. チーム活動の準備・調整 ・役割チーム（お土産、会計、カメラ） ・学校での交流授業チーム	進行：NIED 鉄井
15:50	準備 (10分)	
16:00 (60分)	6. 結団式 ・主催者からエール→参加者からの抱負 ・飲食、歓談	進行：JICA 奥田、所長挨拶 会費制

<開催の様子>



● 事後研修①※ 9月7日(土)13:00~17:00、8日(日)10:00~15:00

<ねらい>

- ① 現地研修で集めた情報を使ったアクティビティのアイデアを共有する。
- ② 教師海外研修で学んだことをもとにした個人の実践アクティビティ・プログラムを作成し、評価指標の活用や相互提案などを通してより実践的な内容に深める。
- ③ 実践報告フォーラムでのワークショップ提供の準備を行う。

<プログラム>

■ 1日目：9月7日（土）

時刻	内 容	講師等
13:00	1. あいさつと研修のねらい・スケジュールの確認	JICA 奥田、NIED 鉄井
13:05 (10分)	2. アイスブレイキング (1) 60秒自己紹介「帰国後日本について驚いたこと／発見したこと」	NIED 鉄井
13:15 (15分)	3. ネパール現地研修のふりかえり (1) 教師海外研修報告書「学びの3つの柱」の共有	NIED 鉄井
13:30 (30分)	4. 収集した現地素材の共有と活用法のアイデア出し (1) 教師海外研修ガイドブックの確認 (2) 現地素材を使ったアクティビティのアイデア出し→共有	NIED 鉄井
14:00 (45分)	5. 個人の授業実践プログラム作り①「ねらいの設定」 (1) プログラム様式への対象、実践時間、テーマの記入 (2) 子ども達と一緒に考えたいテーマの連想図 (3) 「知る・気づく／考える・行動する」対比表 (4) プログラムのねらいの文章化	NIED 鉄井 久世、伊沢、川合
14:45 (40分)	6. 個人の授業実践プログラム作り②「プログラム素案の作成」 (1) プログラム全体の展開（四行詩、起承転結等）の作成 (2) アクティビティの当てはめ・プログラムの流れの作成 (3) 主アクティビティにおける発問、現地素材の記述	NIED 鉄井 久世、伊沢、川合
15:25	休憩 (15分)	
15:40 (5分)	7. 個人の授業実践プログラム案の自己点検評価 (1) 6つの指標を使った点検評価	NIED 鉄井
15:45 (60分)	8. 個人の授業実践プログラム案の小グループ相談会 (1) 3～4人グループで各実践プログラム案の発表、相談 (1人につき発表5分＋相談10分)	NIED 鉄井 久世、伊沢、川合
16:40 (20分)	9. 個人の授業実践プログラム作り③「まとめ」 (1) プログラムをまとめ、A3用紙から模造紙へ	NIED 鉄井 久世、伊沢、川合
17:00	1日目終了	

※「事後研修②」については、2024年度開発教育指導者研修（実践編）第4回と合同実施のため、同研修の報告書をご参照ください。

■ 2日目：9月8日（日）

時刻	内 容	講師等
10：00	1. アイスブレイキング	NIED 鉄井
10：10 (50分)	2. 個人の授業実践プログラム作り③「まとめ」続き (1) 1日目の続きをまとめあげる	NIED 鉄井 久世、伊沢、川合
11：00 (30分)	3. 個人の授業実践プログラムの発表&提案会① (1) 発表者：プレゼンテーション (6分) ×2人 (2) 聞き手：よかった点／よりよくするための提案 (4分) ×2人	NIED 鉄井、久世
11：30	休憩 (60分)	
12：30 (20分)	4. 個人の授業実践プログラムの発表&提案会② (1) 発表者：プレゼンテーション (6分) ×2人 (2) 聞き手：よかった点／よりよくするための提案 (4分) ×2人	NIED 鉄井、久世
12：50 (40分)	5. 個人の授業実践プログラムの改善検討 (1) よかった点／提案をふまえてプログラムの改善、個別相談	NIED 鉄井 久世、伊沢、川合
13：30 (30分)	6. 授業実践に向けての私宣言！&エール (1) 受講者全員の実践プログラム案のギャラリー方式による確認 (2) 車座で今後の授業実践に向けた抱負とエールを交換	NIED 鉄井
14：00 (25分)	7. 実践報告フォーラム 2025 教師海外研修報告の検討 (1) 20 分間の発表内容と役割分担	NIED 鉄井
14：25 (25分)	8. 実践報告フォーラム 2025 有志ワークショップの検討 (1) ワークショップ提供する有志メンバーの選定 (2) 提供プログラムの決定と今後の予定・役割等の検討	NIED 鉄井
14：50 (10分)	9. 事務連絡・調整 (1) 中間会合、実践報告書様式、ネパール BOX (2) その他	NIED 川合 JICA 奥田

<配付資料>

資料 1：事後研修レジュメ
 資料 2：教師海外研修報告書「学びの3つの柱」
 資料 3：授業実践プログラムの6つの評価指標
 資料 4：実践プログラム作成様式（A 3 版）
 資料 5：実践プログラム作成例
 資料 6：実践報告書の記入解説および様式
 教師海外研修ガイドブック
 各自のマナビノオトおよび振り返りシート
 教師海外研修の写真・動画・資料集（データ共有）
 ネパールBOX

＜事後研修①の様子＞



＜成果例＞ ★ 受講者が作成した授業実践プログラム例

テーマ: 国際理解, 国際協力, SDGs, キャリア教育 拓 SDGs から考える <u>世界の平和・プロジェクト・アクション</u>		
ねらい①: ネパール課題の背景を考え、よい社会の実現には、 一人ひとりの行動や協働が必要であると気づく。 ねらい②: よい社会を実現するために「こんな仕事があったらいいな」と考え、自分にできる行動を積み重ねることに意欲を育む。		
対象: 中学校1年生 (149人)	所要時間: 9時間	
(起): ネパールと日本には共通点・相違点があることに気づき、 あってはいけない違いはないだろうかと考える。 (承): ネパール課題の背景を探り、自分との関わりを気づく。 (転): 世界には課題解決のために努力している人々がいることや 世界はつながっていて、互いに支え合っていることに気づく。 (結): 世界の課題を踏まえて、SDGsの目標につながる「世界の平和・ プロジェクト・アクション」を考えよう。		
日・時間 1 (45分)	流れ 1. <u>ネパールと肯定的に出会おう</u>	写真・動画 <u>「フオランゲージ」</u> 「日本と違ふところを」 (と) 悪いこと何となく 「ネパール語が通じると どう思ふか?」 ↓ 異文化との出会い = 楽しい

[illegible]

Ⅲ．現地研修の様子と受講者の学び

[7/30 (火)]

① JICA ネパール事務所ブリーフィング



池田美輝：JICA ネパール事務所職員の方々から、ネパールの現状や事業内容、健康管理等について聞いた。途上国を支援するのに、様々なアプローチがあることを学んだ。技術協力をするには、支援するだけではなく、裏側にある宗教的背景やカースト制度などの文化をしっかりと理解する必要があることが分かった。途上国の人の言動を振り返り、どうしてその行動をしているのかをよく考えるとよい。



インフラ整備や電力・エネルギーの安定供給など、基本的な生活の部分は保障されておらず、ネパールで早急に支援しなければならないことが多くある。政治・経済の面からも法整備や司法制度を強化する必要があることがわかった。一番難しいと感じたのは、途上国の人が支援内容を必要だと感じているかどうかである。支援内容が必要と感じていない場合、持続可能な支援や開発にならず、終わってしまう。なぜ、この支援を行う必要があるのかを、支援を受ける側にきちんと伝えることが必要だと感じた。



山田拓弥：JICA ネパール事務所の久保所長や飯塚次長からネパールに対する日本の支援についての話を聞いた。現在ネパールは、インフラの未整備、災害、地方の貧困等の課題を抱えているため、ネパールへの支援として「経済成長・貧困削減」、「防災」、「ガバナンスと民主化の強化」を行っているという紹介を受けた。具体的には、「農業・農村開発」、「無償での道路の建設や円借款でのトンネルの建設」、「民間セクター支援」、「医療の質向上」など多岐にわたる支援を行っているということを知った。

また、支援の1つとして「教育の質向上」を行っているという話を聞いた。ネパールにおける教育の課題として、低学年の子どもたちの留年率の高さが挙げられる。また、就学しても約 21%の子どもは基礎教育終了前に経済面や障害などの理由で学校を退学してしまう。そして、低学力や男女における教育格差も課題として挙げられる。以上を踏まえて、教員の研修機会の不足や教材不足を解消するなど、教育の質を向上させるだけでなく、親や地域が教育の重要性を理解する必要があると感じた。

[7/30 (火)]

② パシュパティナート寺院、ボダナート寺院



市原健：両寺院とも、観光地化しているのではなく、人々の生活に根付いているものという印象を受けた。パシュパティナート寺院は、ヒンドゥー教の大寺院

である。祀られているたくさんの神々、聞こえてくる音楽、人々の活気など、宗教が生活に根付いていることがよく分かった。寺院内にある川に面して、いくつもの煙が上がっていた。人を焼いている煙だと聞いたとき、驚きとともに死が身近にあるということを感じた。一方で、物売りをする子どもや物乞いをする人にも出会った。何もできないことに心が痛むとともに、より一層ネパールの現状について深く学びたいという意識が高まった。



ボダナート寺院は、チベット仏教寺院であり、中心には大きなドーム状の建物がある。その仏塔には、「ブッダアイ」と呼ばれる目が描かれてあり荘厳な印象を受けた。ネパール全体でいうと約 80%がヒンドゥー教という中で、これほど立派な仏教寺院があることにネパールの宗教的な寛容さを感じた。



道野大和：パシュパティナート寺院は、個人的にとっても楽しみにしていた。バンで向かう途中に見えた煙。遺体の火葬によるものである。故人を偲ぶ遺族。その川の反対側では、スーツ姿の男性を占う占い師の姿。生死がとても対称的に映った。日本では病院で生まれ、病院で死ぬことが多い。特に「死」がとても遠くに感じる。人々の生活の一部に当たり前のように火葬されている光景を見て、どちらが「ふつう」なのか、考えさせられた。

ボダナート寺院は、首都カトマンズに位置する仏教の聖地である。白いドーム状の建物の上を裸足で歩いた。周りを見ると、観光客であふれている。寺院のまわりを時計回りに回る巡礼者の姿は、信仰の深さを感じた。建物の周りには、喫茶店、土産屋が並び人々の生活を支えているのだと感じた。

[7/31 (水)]

③ JICA 海外協力隊（経営管理）活動地



掛井遥奈：レレという地で活動する榎本隊員との出会いは、私にとって大きな出来事だった。「思ったより栄えている」「各家庭に1人は出稼ぎに出ている人がいてあまりお金に困っていない」などという点から支援することがあまり見つからないという状況だったが、現地の人の思いに耳を傾けると、実は困っていることややってみたいことが出てきて活動につながったと話をしてくれた。支援を行う上で大切な信頼関係や相手のニーズをきちんと理解することが実現されており、レレやレレに住む人たちを大切に思って活動する榎本隊員の姿に感動した。農家の方々と榎本隊員の様子を見ると、本当に心から信頼し合っていることが伝わり、ネパールと日本のつながりを感じることができた。

農家体験では野菜を収穫した。大きなかごについている紐を頭に引っ掛けて運ぶのだが、これが本当に大変だった。重くなれば重くなるほど、首や背中に負担がかかり、かごの大きさの3分の1の量を運ぶのが精一杯。それを毎日、しかもほとんど女性が行っている。体への負担を考えると改善も必要なのかもしれないと感じた。



中島浩平：2023年から派遣されている榎本隊員の活動地ラリトプール群レレへ。農産物の出荷に係る地域活動を支援・販路促進に取り組んでいる榎本隊員の誰とでも打ち解けられる優しい笑顔が印象的だった。普段の何気ない会話から住民の悩みを聞き出し、相談に乗り、支援する地道な活動に脱帽。榎本隊員が支援している農家さんを訪ねて、キュウリやトマトの収穫をした。収穫したキュウリを大きな籠に入れ、重さ約20キロの籠を女性が運ぶ姿に全員が驚愕した。実際に何人かが運ぶ体験をしたが、毎日の作業だと思うと驚きしかなかった。また、周辺散策では舗装されていない急な砂利道を上り、農家一軒一軒回った。見晴らしのいい場所まで来たときに、同行している JICA ネパール事務所のティミルシナさんが、「ネパールでは4,000m以上が山と考えられています」と言われたことにも驚いた。榎本隊員が今後計画されているアグリツーリズム（農村で農業体験やホームステイをする余暇活動）を体験する日本人大学生の感想も今後聞いてみたい。

[8/1 (木)]

④ ラブグリーンネパール事業地（モデル圃場・農家）



坂田英香：印象深かったことは、「支援が入って変わったこと」を尋ねた際、様々な人の声が大きくなり、口々に話し出したことである。各々が前のめりに話し出す姿とその表情から、JICA やラブグリーンへの感謝の気持ちとその熱さが伝わってきた。

ラブグリーンは、現地で農業支援をしている NGO である。課題だった害虫対策に対して、「牛の尿と唐辛子等の植物を混ぜた」農薬を作っ



たり、牛小屋から尿が流れ出て溜めたりするような建物にしたり、現地にあるものを使って持続可能な仕組みを構築していた。さらに、農家の人は、土地の健康についての知識を得たり、適切な植える時期、植える間隔、肥料を入れる時期などのトレーニングを受けたりしていた。その結果、トマトの収穫量が80～90kgから120kgに増加したり、自分達への健康被害について認識して活動したりするように変化したそうだ。他の地域への支援拡張について尋ねると「学びたい意欲がある人に薦めたい」と返事が返ってきた。



長澤佑亮：「農業」という仕事に対し、如何にして付加価値を与えるのか、その方向性の模索について色々と考えさせられた1日であった。安心・安全な農作物を消費者に届けたいという思いがある一方で、そのために農薬を使うことを強いられるというジレンマに対し、ラブグリーンジパンのIPM農法（農薬/化学肥料をできるだけ使用せず、害虫や益虫を見分け、作物の植え合わせを工夫して自然の働きを利用する農業）に関わる研修プログラムには必要性を強く感じると同時に、現地の農家の方々にトレーニングすることで持続可能な農業を展開しており、この視点は自分にとって新鮮であった。安心・安全な農作物を生産し消費者にPRするという点においては、日本にも共通する部分があるだろう。今後の展望として、生産から流通、販売までをシステマティックに展開したいという思いを聞き、そのためのインフラ整備やマーケティングの手法など、多岐に渡る支援が今後とも必要なのだと感じた。また、雨季の時期に強い品種の改良や雨よけのトンネルがほしいといった農家さんの声に対して、資金援助だけにとどまらない支援の形を考えていく必要があると感じた。

〔 8/1 (木)～3 (土) 〕

⑤ ホームステイ（2泊3日）



池田美輝：ホームステイ先では、パパが迎えに来て、ママが家で温かく迎えてくれた。パパは、英語も話すが、ママはネパール語のみだ。出会ったとき、ママがハグをしてくれた。そのハグは温かく、「こんにちは、来てくれてありがとう」と言っているかのようにだった。非言語コミュニケーションの素晴らしさを感じた。

ホームステイ先の生活は、朝4時に鶏が鳴き、起床。朝6時になると、パパは、鶏の卵を採り、乳しぼりをするなどの家畜の世話をする。朝の食事は、生みたての卵を食べ、絞ったミルクを使ったミルクティーを飲む。その後、絞ったミルクを売る。売り場には、ミルクの脂肪分を抽出するための機械があり、機械を回し分離させる。価格は、日本円で1か月2万円分になる。牛を飼育するために1万円かかるので、利益は、1万円である。この生活を見て、自給自足の生活のよさを感じた。育てた食材を食べることで、健康的な食生活を送り、持続可能な生活が実現することができていた。



市原健：車から降りてすぐ、踊りや音楽、花飾りでの歓迎を受けた。ネパール流のおもてなしに心がとても温かくなった。二日間のホームステイで、ダル・バートをはじめ、ネパールの美味しい家庭料理を満喫した。ヒマラヤ山脈が一望できる絶景も、まるでトレッキングのような朝の散歩も、どれも新鮮で他では得難い体験だった。ホームステイでお世話になった家族には日本アニメに詳しい方がいて、共通の話題となった。「『ワンピース』のナミとハンコック、どっちが好き？」なんていうやり取りをネパールですとは思ってもみなかった。日本アニメは本当にすごい。どんな切り口でも、その国を知るということが、その国への興味や好感をもつきっかけになるのだと分かり嬉しくなった。また、言語が通じずとも、ホームステイファミリーの温かさがひしひしと伝わってきた。別れの時、アマ（現地でママのこと）の涙に胸が熱くなり、ネパールが大好きになった。





掛井遥奈：私を受け入れてくれた家族はタメル民族の家庭で、祖父母、父母、息子の5人家族だった。父以外はあまり英語が得意ではない様子だったが、

2泊3日のホームステイの中でたくさんの時間を共有できた。特に印象に残っているのは、2日目の歓迎会が終わって家に帰ってくると、いつもはにこにこ微笑んで部屋に戻っていく祖母が、私たちの部屋に来て自分の娘の写真を見せてくれたり、私が特参した日本の写真や学校の様子の動画を見てくれたりしたことだ。交わした言葉は少なかったものの、一緒に声をあげて笑って過ごしたあの時間は私にとっての宝物だ。私たちのために寿司作りに挑戦してくれたこと、浴衣を着て喜んでくれたこと、サリーなど歓迎会の準備に全力になってくれたこと、すべてが本当に愛おしい経験だった。この家族は飲食店を営んでおり、そこにたくさんの人々が集まっていた。このような地域のつながりも素敵な魅力であると思う。ここで出会った人々が幸せに暮らすことができるように自分にできることを見つけて行動していきたい。



坂田英香：「幸せとは」「豊かさとは」を自問し続けたホームステイであった。ホームステイ先の家庭は、食堂を開いていたためか、地域の人がよく集まってくる場所であった。その子どもたちは、私たちが訪問した「Kalidevi Secondary School」へ通っている子もいれば、少し離れた私立の学校へ行っている子もいた。いつも兄弟を抱いて遊びに来る子のお父さんは、娘を私立学校に通わせるためにドバイに出稼ぎに行っていると、後にホームステイ先のお父さんから聞いた。そんなホームステイ先のお父さんにとっての「幸せ」は、「家族みんなで過ごすこと」。

けれども、息子の将来への願いについて話していると「地元に残ってほしいが、何になってもどこに行っても応援する」と。「そのためには、図書館など施設面で足りない地元の学校より私立に通わせた方が…」と、少し寂しそうに話していた。「子どもの将来のために離れて暮らす幸せ」、「家族が一緒にいる幸せ」。どちらがよいのか。「幸せ」を自ら選んでいくことの大切さに気付いた。



また、お父さんは、朝から家族のために祈り、家事をしたあと仕事へ行く。仕事の後は、家族と一緒に夕飯の支度をする。私もお父さんとおばあちゃんとにんにくの皮剥きをしながら色々な話をした。豊かな時間である。私の勤務時間を聞いてお父さんは悲鳴をあげていた。「幸せとは」「豊かさとは」を考え続けた3日間。



長澤佑亮：私がホームステイをした家族は、祖父母の2人暮らしの家であった。畑が家の目の前にあり、そこで採った野菜が食卓に並ぶなど、ほとんど自給自足している様子であった。調理の際に出た廃棄物は畑の肥料に利用するなど、サステナブルな日常を体験することができ、なにか懐かしさを感じた日々であった。早朝や夕方になると、近くに住む高校生と中学生の孫が遊びに来てくれた。時間があつた時に2人に将来の夢を尋ねると、

両者とも「海外で働きたい」と口にしていて。2人は、近隣の学校ではなく都市部の学校に通っているため、英語は当たり前のように話していた。中学生の男の子は、海外で働くが、将来的には地元に戻ってきたいと話しており、出稼ぎによる移住が多い中で頼もしい回答だと感じた。しかし、地元に戻ってくる選択が本当に彼にとって幸せなのだろうか、と考えると何とも言えない感情になる。ホームステイ先の家族が今後とも幸せであってほしいと願うとともに、私たちに何ができるのかを模索する必要があると感じた。



中島浩平：遠くに見える美しいヒマラヤ山脈の景色と満天の星空を満喫できるホームステイだった。「幸せ」や「人生」に対する価値観とは何なのかをじっくりと考える良い時間でもあった。ホームステイ先のパパは私と同じ教員で、校長先生をしている。朝は5時に起きて、牛からミルクを取り、



近くのミルク回収場へ運ぶ。このミルクも貴重な収入源で、一か月約 10,000 ルピー（約 9,000 円）になる。その後、学校へバスで出勤し、16 時に帰宅し、広大な農園で農作業を行っていた。校長先生の給料は一か月約 32,000 ルピー（28,800 円）だと言っていた。幸せを考える上で、収入の事を考えてばかりいた私に、パパは「お金は生活できるだけあればいいんだ。お金を追うことはばかり考えていれば、時間はなくなり、家族と大事な時間が減ってしまう。さらに、この地域の仲間たちと過ごす時間さえなくなれば、何のために仕事をしているのかわからなくなるだろ。浩平、幸せっていうのはバランスだよ。」頭を強く殴られたような衝撃だった。同時に、隣に座っていた、ママの笑顔が今の幸せを表現しているように思えた。2泊3日のホームステイで得られたものは計り知れない。



道野大和：ホームステイ先で最も印象的だった出来事は、道端でニワトリを締めている場面に遭遇した

ことである。話には聞いていたが実際に見るのは初めてであった。女性が何食わぬ顔で締めている様子は驚きであった。しかも、その場面を小さな子どもたちも見ています。日本の子どもたちであつたらどうか。大人でも悲鳴をあげてしまうかもしれない。日本との当たり前の違いを感じた。日本でも鶏肉を食べる。私たちが日々食べているものは、命が犠牲になっているということを改めて感じる事ができた。ほかにも、自分の名前はネパール語でどう書くのか教えてもらった。「上手!」と褒めてもらえた。また、洗濯の仕方、食事を手で食べることなど、実際に体験することでホームステイの方々と気持ちが通じ合った気がした。



山田拓弥：ホームステイでお世話になったバダール家は、笑顔が素敵で、自分を温かく迎え入れてくれた家庭だった。私は、2泊3日のホームステイの中

で「幸せ」とは何なのかを考えさせられた。停電が頻繁に起こり、買い物や病院に行くにはバスに乗って出かけなくてはいけないなど、村での暮らしに対して不便に感じることもあるのではと思う場面があった。しかし、ホームステイ先のパパは、「ここでの暮らしにとっても満足しているし、幸せだ。仕事もあるし、ママもいるし、牛もいる」と言った。この村に欲しいものはあるかと自分が聞くと「欲しいものはない」とパパは答えた。便利さを求めて、いかに自分が身の回りに「あるもの」よりも「ないもの」に目を向けていたかに気づかされた瞬間だった。しかしながら、スマートフォンのテレビ電話機能を使って、孫に笑顔で微笑む姿は、万国共通だと感じた。「祭りの時期に息子、娘家族が帰ってくるんだ」と嬉しそうに語るパパの顔が非常に印象に残っている。



[8/2 (木)、3 (金)]

⑥ ホームステイ組合による歓迎会（葉の皿作り／カルチャープログラム）



長澤佑亮：「歓迎会」とあるように、とにかく私たち日本人が心の底から歓迎されているのだと伝わってくる会であった。伝統的な衣装に身を包み、伝統的

な楽器で演奏して出迎えてくれたり、村長さんが直々に出向いて私たちに歓迎の挨拶をしてくれたりなど、特別感に満ちた時間であった。村長さんの話の中で、「私たちは昔、日本にとってもお世話になった。それ以来、友好関係が続いている。そしてそれはこの先も…」と、先人たちが紡いだ友好関係を言葉越しに体感し、今こうしてこの場に居られることに感謝している自分がいた。葉の皿作りでは、私たちが作成した葉の皿が、次回のホームステイの客人の歓迎に使われること、私たちが歓迎の際に使用した葉の皿は前回の客人が作成したものであると知り、伝統を紡いでいく大切さについて体験を通して実感することができた。カルチャープログラムでは、最後の夜を惜しみながら、民族によって衣装が異なるが、伝統という言葉の下で、民族は違えど息を合わせて踊る姿を見て、多文化共生の手がかりを掴めたような気がした。





池田美輝：ホームステイ組合の方から、熱烈的な歓迎を受けた。カルチャープログラムでは、葉の皿作りが行われた。作っているときに、生活科の授業や防災教育の教材に適していると考えた。一つ一つ丁寧に女性の方が作っているため、とてもしっかりとした皿になっていた。災害が起きて、身近に皿がないときに、このような自然な皿があるととてもよいと思った。

カルチャープログラムでは、主に、代々伝わる民族の踊りを見せてもらった。男性の力強い踊りや子どもたちのしなやかな踊りに感動した。私たちも、お礼に、「幸せなら手をたたこう」を歌った。お互いに、ネパール語も日本語も分からないが、手を取り合ったり、リズムよく踊ったりする中で、音楽は言語の壁を越えて仲良くなれると感じた。同じ音楽を聴くもの同志仲良くなれるときがあるが、音楽は平和に欠かせず、世界を救うと感じた。音楽の趣味をもつだけで、ネパールだけではなく、世界の人々と仲良くなれると感じた。

[8/2 (金)]

⑦ Kalidevi Secondary School (授業見学、模擬授業・交流など)



中島浩平：首都カトマンズから車で1時間半くらい離れた、自然豊かな場所にある公立学校。近くにはカトマンズ大学キャンパスがある場所だった。限ら

れた教育環境の中で、校舎の壁に描かれていた言葉、「Children must be taught how to think not WHAT to think. (子供たちには、何を考えるかではなく、どう考えるかを教えなければならない)」に共感したのを覚えている。生徒たちの貴重な時間を使い、日本の伝統的な遊び、コマ回し、トントン相撲、福笑いを紹介した。高学年ということもあり、英語の指示もしっかり理解でき、スムーズに授業展開ができた。こちらが思っている以上に、夢中になって楽しんでくれたことが非常に嬉しかった。授業後に行った教員同士の意見交換では、公立、私立学校同士での生徒の取り合いが深刻だということが分かった。また、英語教員が不足しているということも大きな課題だと言われた。今後も Kalidevi Secondary School の Facebook を定期的に見ながら、生徒たちの成長を楽しみたいと思う。



市原健：子どもたちは日本から来た我々に興味津々な様子であり、「こんにちは！」や「ナマステ！」などとたくさん声を掛けてくれた。久々にした「先生」としてのやり取りの中、「やっぱり自分は子どもが好きだな」「だから先生になったんだよね」などと、自分の原点に立ち返る瞬間があり、嬉しくなった。

教室の落書きに『鬼滅の刃』の刀が描かれていたり、『ナルト』のキャラクターのキーホルダーを見せてもらったり、意外なところでいくつもの「日本」を発見した。交流授業では、日本の紹介と、折り紙で手裏剣を作る活動をした。日本紹介の際、子どもたちは日本の学校の様子にとっても興味津々だった。また、日本アニメについて知っている子も多く、話が盛り上がった。手裏剣を作る活動は難しかったようだが、今回の交流が日本について好感をもつきっかけになってくれれば幸いである。

[8/4 (日)]

⑧ ACP (Association for Craft Producers) Nepal 工房、直営店「Dhukuti」



道野大和：ACP は、フェアトレード商品の受注、生産を行う工場である。工場の入り口には3人の子どもの言葉が書かれた用紙があった。「この工場のおかげで教育を受けることができ、夢である医者になることができた」と書かれていた。働く方の子どもには1,000 ルピー支給される。特に「女の子に教育を」との思いを強く感じた。また、働き方にも柔軟に対応しており、在宅で勤務されている方も多くいると知った。フェアトレ



ード商品を扱う工場として、「自立すること」を目的にしていると勤務されている方から教えられた。エコバッグ作りでは、職人の方からペイントの仕方を教わった。こういった職人の技術がフェアトレード工場としての自立を支えているのだと感じた。



掛井遥奈：JICA の海外協力隊の人が技術協力をしていたことを知り、ここでもネパールと日本のつながりを感じた。日本以外からもいろいろな技術を学んでよりよいものを作ろうとする職人やスタッフの方々の姿に心を打たれた。工場の中を見学すると、本当に丁寧に細やかな作業がすべて手作業で行われていて、作品一つ一つが素敵だった。さらに環境に配慮した食堂のメニューや工場のつくりになっており、他国の支援をもとにネパールの中で可能性が広がっていき、持続可能な取り組みになっているのではないかと思った。

ここでは、適正な価格設定だけではなく、福利厚生なども保障されていた。特に女性の社会進出を支えるための取り組みも多く、働く人にとって安心安全であると感じた。ACP の取り組みを知れば知るほど、フェアトレードについてもっと知りたい、もっと考えたいと思った。フェアトレードに対して私たちにできることを考えていきたい。

[8/5 (月)]

⑨ Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center+⑩防災クラブ活動



山田 拓弥：Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center は、生徒、教師、地域住民、民間企業等に防災教育を行っており、施設内に自助・共助・公助という言葉が掲げていたり、日本の防災用品が展示されていたりと、日本のとのつながりを実感した NGO 団体だった。また、防災教育を、ゲームを通じて子どもたちに楽しく学んで欲しいという取り組みが印象的だった。実際に Bhassara Secondary School で体験したゲームは楽しいだけでなく、学びが多く詰まっているものだった。実物やピクチャーカードなどを使い、体を動かす場面も取り入れながら防災について学ぶことができた。そして、この学校では防災クラブを立ち上げ、上級生が下級生をリードし、生徒が主体的に動いていることがとても良いと感じた。防災意識を浸透させるための継続的な取り組みを行っている同校で感じたことを日本に持ち帰り、防災教育を見直すきっかけにしたい。



坂田英香：「Mitra Disaster Risk Reduction Learning Center」では、視覚的に訴えることの学びへの影響への気づきがあった。特に、マグニチュードの大きさを表した円は、インパクトが大きかった。また、日本からの支援が入っているため、日本の防災グッズの展示があり、比較を通して、自己の環境を見つめ、自分に合った準備をすることを訴える教材であった。

防災クラブの活動は、楽しく知識を得ることを体感した。自分の身近なもので身を守ることを学んだ「ドッジボール」。全身を使ってクイズの答えを探す「インベーターゲーム」や「二択クイズ」。応急処置などの手順を確認する「カードの並び替えゲーム」。事前・最中・事後に分けて自分の行動を考える「パズル」。紙芝居を見てからの「確認クイズ」。その場にあるものを使って「簡易応急処置」。さらに、中学生にあたる学齢期に生徒が外国人ある私たちに堂々と語る姿も自信をもち活動している印象を受け、日々の活動内容を知りたくなった。さらに、地域へもゲームを通して、楽しみながら知識を伝達しているようだ。「地域防災」の在り方に対する新たな知見を得た。

防災、減災は、共通の課題であることを実感するとともに、自国のものが他国へ生かされ、さらに、新たな視点が加わり、私たちへも還ってくることを実感した。

[8/5 (月)]

⑩ Bhassara Secondary School (授業見学、模擬授業・交流など)



池田美輝：防災クラブでは、アクティビティを行いながら、主体的に防災について、児童から学ぶことができた。それぞれのアクティビティでは、目的を達成できるようになっていた。なぜ学ぶ必要があるのかを、子どもたちが理解し、行動している姿に感銘を受けた。

授業体験では、この学校の前に訪問したホームステイ先の村の学校と比較できるように、同じレクリエーションと折り紙を折る活動を行った。小学校3年生だが、英語力はとても高く、私の英語をしっかりと理解して、スムーズに活動することができた。

折り紙を作る活動では、紙飛行機がなかなか折れず、苦戦する子どもの姿が見られた。その男の子は、私のところに来て、「折ってほしい」と頼んできた。一緒に一つ一つ手順を確認しながら折ると、遠くまで飛ばすことができ、満面の笑みを浮かべていた。日本でも、同じような状況がある。そのときに、子どもに寄り添って、一緒に取り組んでいるが、そのような行動が大切で、どこの国でも通じることを実感した。



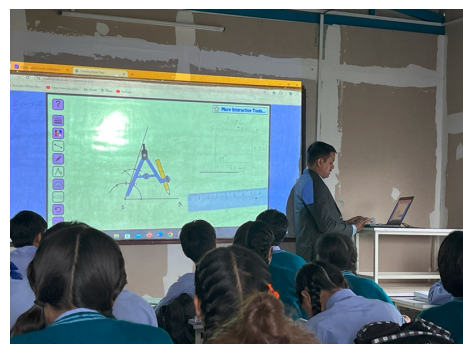
長澤佑亮：Bhassara Secondary School の子どもたちが、自ら防災をテーマとしたゲームの説明、運営を実施する姿を見て、防災をゲームで教えるという手法がいかに「子どもの視点」に立ったものであるのかを実感することができた。ゲームの作成過程において、災害後の子どもの提案を発端にし、Mitra DRR Learning Center と試行錯誤を重ねて誕生したことを知り、まず生徒が主体であること、そして地域の機関と連携して取り組んでいることは、日本の防災教育にも必要であると感じた。交流では、日本の伝統的な遊びと一緒に体験した。とても元気がよく、反応が良かったため子どもたちと過ごす時間はあっという間であった。子どもたちの英語力が高く、ほとんどの生徒が英語を流暢に使っている様子から、改めて英語に対する熱意や必要とする背景について考えさせられた。防災を通じて、現地の子どもたちと関わることができたのは非常に貴重な経験であったと感じると同時に、「防災」という共通の課題から日本とネパールのつながりを感じるよい教材であると感じた。

[8/6 (火)]

⑪ e-Education (映像教育) Arunodaya Secondary School



市原健：e-Education では、「最高の教育を世界の果てまで」という使命のもと、ネパールの課題である「都市部と農村部の教育格差をなくす」ことを目指した活動をしていた。また、実現のために設備面のフォローや研修、映像資料の提供を行っているということだった。Arunodaya Secondary School でも効果を実感しているようで、特に、10年生に向けた試験（通称「鉄の門」）に100%合格させているなど、客観的に見ても優れた実績を残している。ただし、こうした実施校でもICTの使用は9・10年生が優先されたり、停電がたびたび起こったりするなど、まだまだ課題があるようだ。農村部ではもっと設備面での課題が顕著であることが予想される。しかし、こうした先進的な学びが今後広がっていき、いつか「都市部と農村部の教育格差をなくす」という目標が実現されることを心から願う。



中島浩平：「最高の教育を世界の果てまで」をミッションに活動されているe-Educationの取り組みとその教育実践を導入した校長先生や現場の先生方と意見交換することができた。ネパールでは山岳部の7割の中学生が終了試験の合格点に届かず、教育格差が改善されていない。しかし、

e-Education では山間部でもインターネットや DVD の視聴環境があれば、映像授業（ネパールでは特に数学に絞って支援）を作成し、多くの生徒に届ける取り組みを行っている。モデル校となっている **Arunodaya Secondary School** の中等教育終了資格試験の合格率は昨年度 **100%**を達成し、確実に実績を残している。合格した生徒たちの顔写真や成績が学校内に大きく掲示されていた。映像教育の普及率が今後もさらに上がり、全ての生徒たちに学べる環境が行き届くことを強く願っている。

[8/6 (火)]

⑫ CWIN (Child Workers in Nepal)



掛井遥奈：ネパールでは、今でも **100 万人以上**の子どもたちが児童労働をしているということを知って衝撃を受けた。もちろん、**CWIN** の活動などによっ

て人数は減ってきているのも事実である。ただ、児童労働を禁止する法律がありながらも 0にならないのが現実だそう。保護者に対して職のトレーニングを行い、収入を得られるように支援して、児童労働に陥ってしまう前に保護するように活動をしていると聞き、児童労働の背景には貧困をはじめ、様々な問題があるのだということを知った。



外の壁に「**FOR CHILDREN WITH CHILDREN**」という言葉が書かれていた。この言葉を見て、足が止まった。多くの子どもたちと関わっている教員として軽く受け取れる言葉ではないと感じた。これまで日本やネパールで出会ってきた子どもたちの顔が頭の中に浮かび、胸が締め付けられた。子どもたちを取り巻く問題は日本でも同じように存在している。他人事ではない。自分もそれを助長する存在になり得るかもしれない。本当に深刻な問題であると再確認するとともに、明るい未来を生きる子どもたちを守るために大人たちが本気にならなければならないと思った。



道野大和：**CWIN** ができるまで、ネパール国内には児童労働に関わる団体はなかった。**1987 年**から子どもの権利を守るために活動を続けてきたと知った。実績としては、児童労働をする子どもが **260 万人**から **110 万人**に減ったこと、現在ネパールに団体が **11** か所あることなどであっ

た。しかし、根深い課題として政治家が経営している工場に児童労働の実態があることで法整備が遅れていることが印象に残った。課題解決を目指す団体の目前に、あまりにも高い壁があることを知った。しかし、団体の代表の方から「人類共通の課題として、ぜひ日本でも考え続けてほしい」と強くメッセージを送られた。決してあきらめない強い気持ちがあるからこそ、**CWIN** という団体が続いているのだと感じた。

[8/7 (水)]

⑬ 日本語学校 Universal Training Center (授業見学、交流)



坂田英香：中学卒業後から **40 歳**ぐらいまでの人が、日本での進学や就労を目指して学んでいる学校であった。参観したクラスは、日本人教師とともに『み

んなの日本語』を活用して学んでいた。ビル内には、私たちに日本語で挨拶を交わす多くの学生があり、多くの学生が日本へ行くことを目指していることを実感した。



中級クラスや国際交流基金のテストを受け、面接待ちをしている学生と交流した。日本へ行くことや日本語を選択した理由を尋ねると、「日本は安全」「日本人は親切」などの好イメージをもって希望していることや、英語は苦手だから文法が似ている日本語を選択したなど、必要感をもって語学を身に付けようとしていることが分かった。また、就きたい仕事を尋ねると、「『介護』の仕事について日本で働きたい。」「『介護』を学んで、ネパールで『介護』を教える先生になりたい。」「日本で『料理』を学んで、ネパールでレストランを開きたい」など、在留資格の『特定技能』

に関連する業種について語る姿があり、日本が既に支えられていることに気付いた。

彼らの選択が、明るい未来へとつながるようにと願う。



山田拓弥：Universal Training Center では、幅広い年代の方々が日本で就労・就学するために日本語を学習していた。見学をした授業では、日本での生活を想定した対話の練習を行っていた。

誰もが日本での生活に向けて真剣に授業を受けていた。授業参観後、日本の飲食店や介護施設で働くことを目指す4名の方々と対話をした。彼らは日本語能力試験に向けて勉強をしており、将来的には日本の企業との面接を控えているということで非常に礼儀正しい日本語を話すことが印象的だった。「なぜ日本で働きたいと思うのか」と尋ねると、「日本は安全な国だから」や「日本人は信頼できるから」という答えだった。日本に対する非常にポジティブなイメージは、今までネパールと関わってきた方々が長い時間をかけて積み上げてきた功績であり、そのバトンを我々も引き継いでいかなくてはならないと改めて感じた。

[8/7 (水)]

⑭ Gate College 日本語クラス (授業見学、交流)



長澤佑亮：GATE College の理念の一つである「国際ホスピタリティ」について、身をもって実感することができた。イベントを通してリーダーシップを育

成するという Edutainment (エデュテインメント) の考え方や Global citizenship (グローバルシティズンシップ) に迫るような授業の構想は、どれも新鮮で面白みを感じる内容であった。山本先生による日本語クラスの授業では、日本語を一生懸命に学ぶ学生の姿を見て嬉しく思うと同時に、

学生との交流の中で、ネパール語で会話を試みた際に学生が見せた嬉しそうな表情が重なり、「言語」が持つ帰属意識と言語は最大のコミュニケーションツールであるということを改めて認識した。シェフを志す学生が多いこともあり、昼食時には学内のレストランで学生によるコース料理を振る舞ってもらった。食事の準備をはじめ、料理の説明を日本語でしてくれるなど、一から十までホスピタリティに溢れる内容であった。「おもてなし」の心はある意味、万国共通で受け入れられる大切なものであり、それを教育に落とし込む GATE College の試みは素晴らしいものであると感じた。



坂田英香：「GATE College」は、スイスにも学校があるホスピタリティを学ぶためのカレッジであった。1年次に、実践的な実習を通して、接客技術等を学び、2年次は、世界各国へインターンシップに出掛ける仕組みとなっていた。第2言語の選択肢が「ドイツ語」か「日本語」であり、

日本語クラスは、日本人教師から『まるごと』を活用して学んでいた。参観したクラスの学生は、初級レベルであったため、ほぼ英語でのやり取りになったが、日本のアニメや音楽をはじめ、日本文化への関心が高く、教養として日本語を学んでいる印象を受けた。映画好きな学生が選曲した日本の歌を披露してくれた。

日本語担当の山本先生にネパールのよさを尋ねると、その言葉からネパールの人が好きだという気持ちが溢れて伝わってきた。特に、ネパールの人たちの子どもたちへの関わり方に温かさを感じた。さらに、学部長の Jiwak さんは、日本の大学を卒業して、ネパールの複数の大学で教鞭をとっている。学生に必要な学びの質や前述のようなカリキュラムを考えており、同年代の教員として感銘を受けた。素敵な大人との出会いの場であった。

[8/8 (木)]

⑮ ナグドゥンガ・トンネル建設事業 工事現場



中島浩平：2019 年 9 月から進められてきたネパールの初のトンネル工事プロジェクト。2025 年 10 月に完成予定の 2,000 日を超える大規模工事は複数の日本企業とネパール企業が協力して行っていた。途上国のインフラ整備に強みを持つ企業、橋梁技術で国内外に多くの実績を持ち施工指導を行っている日本の企業の社名があった。また、火災やガス事故などを防ぐための防火設備工事を担当していた日本の企業もあり、もはや日本のトンネルと何も変わらない質だと感じた。人生で初めて、トンネル工事現場を視察できる興奮を抑えながらも、気の遠くなるような作業内容を聞いて、ますます日本人技術者たちの凄さを実感した。また、ネパールの地質はまるで生きてると担当の方が言われたことが、印象に残っている。一度、掘削しても、また地盤が動き、穴を小さくしてしまうことに驚きを隠せなかった。技術者の方も経験したことがないネパールのトンネル工事現場で、冷静に緻密な作業を繰り返した両国の技術者が私にはアベンジャーズのヒーロー達に見えたのは冗談ではない。



掛井遥奈：人生で初めてのトンネル工事の現場に足を踏み入れ、高い技術力でネパールの人々に安心と安全、そして快適な生活を届けようとして活動していることに感動するとともに、働いている方々が本当にかっこいいと思った。日本の技術を利用しながらもネパールの土地に合わせて作業していく様子を目にして、トンネルが完成したそのあとも、この技術はネパールの土地でまたほかの何かに活かされていくのだろうかとワクワクした。日本人が活躍していること、日本の技術が世界に広がっていることを実感し、日本のよさにも気づくことができた。現場では、日本人の方だけではなく、フィリピンの方も多く働いていた。「多国籍な職場で共に働いている！」と安易にポジティブな感想をもったが、「本当に平等に働くことができているか」という見方もあると学び、改めて多角的・多面的に物事を捉えることの大切さを実感した。

[8/8 (木)]

⑯ アサン地区・タメル地区



道野大和：アサン地区・タメル地区は、首都カトマンズの古い市街地にある。地元の人々の生活が色濃く反映された場所である。細い路地が迷路のように広がり、通りにはスパイス、野菜、衣料品、仏具などが並んでいた。散策した日は平日であったが、たくさんの人で賑わっていた。休日だとさらに多くの人であふれるらしく、ネパールの方にとって、なくてはならない場所であることが伝わってきた。建物も独特の建築様式が見られた。ネワール建築と呼ばれる赤レンガと木材を使った美しい装飾が特徴である。特に窓枠や扉に施された木彫りの細工に目を奪われた。調べてみると、幾何学模様や神話をモチーフにしているとあった。何世代にもわたって、ここが人々の集う場所として存在していることが建物から伝わった。これからも、大切にしてほしいという願いが自然と湧き出てきた。



市原健：あいにくの雨だったが、ネパールの活気ある2つの地区で、教材探しやお土産探しを楽しむことができた。ネパール滞在 11 日目ともなると、未舗装かつバイクが歩行者すれすれを行き来する様子にも随分と慣れた。雑貨や香辛料、衣料品など、たくさんの露店が並ぶ道に、突如現れる立派な宗教施設。ここでも生活と宗教が深く結び付いていることを感じた。露店に入ると、ほとんどの商品に値札がなく、値引き交渉なども楽しむことができた。その一方で、物売りをする少年や物乞いをする人などに出会っ

た。やるせない気持ちを抱くとともに、こうしたネパールの側面についても、もっと学びたいという思いが強くなった。

[8/8 (木)]

⑰ JICA ネパール事務所関係者との懇親会



山田拓弥：懇親会では、JICA ネパール事務所働く方々に様々な質問をさせていただいた。日本を離れ、ネパールで行っている業務について答えていただき、職員の方々が日々ネパールのため、日本のために働いているということを実感した。日本を離れ、海外で活躍している人たちがいることを日本の生徒たちに伝えることで、一人でも多くの日本の生徒が国際協力に将来携わりたいと思って欲しいと改めて感じた。

また、飯塚次長から「なぜ教師を目指したのか」という質問を受け、一人一人が答える場面があった。私自身もその質問に答えながら、改めて教師は生徒たちの視野を広げることができる素晴らしい仕事だということを実感した。「自分にできる国際協力は何だろう」と常に自問自答していたが、私ができることは、生徒と一緒に世界が抱える課題について考え、世界のために尽力したいと考える生徒が一人でも増えるよう願い、努力することだと再認識した。今後も、生徒と過ごす時間の積み重ねが巡り巡って国際協力になることを信じて日々の仕事に励みたいと感じた。



池田美輝：飯塚次長始め、JICA 事務所関係者との懇親会では、それぞれのストーリーについて語り合った。JICA 事務所関係者の方の経歴を聞き、私たちは、教師になった経緯を話した。私は、今まで教師として、傾聴を大切にし、自分のストーリーをあまり話してこなかった。出会った方に、なぜ教師海外研修に参加することになったのかを話す中で、自分が教育者として、一人の人間として大切にしていることを思い出した。そして、懇親会の場で、話すことで、「自分のストーリーを子どもたちにぜひ話してほしい」と勧められた。ストーリーを話すことの大切さを実感した。少しだが、自分の話をすると、子どもたちは、すごくうれしそうに、親近感がわいているかのような反応をする。だから、これからは、必要な場で、自分のストーリーを語りたいと思う。また、ネパールで、世界で活躍する人々の姿を見て、子どもたちに、その姿を見せたいという気持ちをもった。日本にも、世界のために働く人はたくさんいる。それらの人々と出会わせるキャリア教育に力を入れたいという気持ちを強く持った。子どもたちには、将来に希望をもち、自分の夢をかなえるために行動する人材を育成したい。

IV. 帰国後の報告

● 現地研修報告書

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度



池田美輝：目的は、小学校三年生の「総合学習」のための教材収集だ。二学期以降の実践テーマは、「ネパールとの肯定的な出会いと現状、今後の課題と展望」である。初めに、「ネパールとの肯定的な出会い」で、自分の体験や経験を元に、参加型の授業で、児童がネパールに肯定的に出会う。次に、「ネパールの子どもたちと学校」のテーマで、日本の小学校との共通点に、主体的に気づく。その後、ネパールの児童をとりまく課題である「児童労働」を取り上げる。児童労働の現状や取り組みを知り、映像学習や資料の活用から今後の課題を学ぶ。このように、今までの学びを、授業支援クラウド(スクールタクト)に新聞や広告のようにまとめ、三学期の授業参観で児童が発表する。また、学級活動で低学年と交流し、簡潔に伝える。最後に、児童が「今の自分にできること」を考え、SDGsと関連して、行動宣言を行う。年間計画に従い、目的をもって教材収集を行ったため、どの訪問先でも、高い達成度だった。



市原健：本研修への参加目的は「自分自身の知見を広げること」と「子どもたちの教育に還元すること」であった。

一つ目の「自分自身の知見を広げること」については、ネパールの良さを五感と心で感じる事ができた。行く先々で出会うネパールの人々の温かさを肌で感じ、ネパールが大好きになった。また、たくさんの訪問地での学びを通して、開発途上国としての側面でもネパールの現状を知ることができた。インフラの未整備や若者の海外流出をはじめとして、ネパールが抱える様々な課題について深く考える機会となった。

二つ目の「子どもたちの教育に還元すること」については、現地で得た学びやたくさんの素材を生かして、最高の授業実践をしたいという思いを抱いている。子どもたちが他国と「肯定的に出会う」ことのできる時間となるように、教材や授業展開の工夫をしていきたい。



掛井遥奈：今回の研修では、五感すべてを使って多様な世界と出会い、自分の価値観を見つめ直すことと、目の前にいる子どもたちに「世界」で共に生きていくことの大切さを伝えられるようになることの2つを目的として参加した。実際にネパールに行くと、自分の思い込みや「こうであるべきだ」という固定概念が無意識のうちに働いていることに気付かされる場面が多くあった。子どもたちに関わる立場として、一人一人を尊重し、いろいろな考えを受け止めることの大切さに改めて気づかされた。ネパールの子どもたちが自由に夢をもち、一生懸命学習に向かう姿を見て、あたたかい気持ちになった反面、教育を受けられない子どもたちもいるという現実にも苦しめる気持ちもあった。これから国際理解教育を進めていくにあたり、当たり前は当たり前ではないことやネパールの問題ではなく、共通の課題として考えることなどに留意しながら実践を考えようと思う。子どもたちに関わることができることに感謝して、自分の経験を子どもたちや先生方に還元していきたい。



坂田英香：国際理解教育へ関心をもったきっかけは、外国に繋がる児童生徒への教育課題からである。学級の子どもたちと世界をどのようにつなげば、子どもたちが多様性を受け入れたり、共生に向けての意識を高めたりできるかを模索してきた。今回は、訪問先がネパールであったため志願した。近年、外国に繋がる児童生徒の出身国は、より多様化が進んでおり、市内でもネパール出身の人が増えたことを感じたためである。子どもたちがどのような環境で育ち、どのような教育を経て、どのような背景をもって来日しているのかを知りたく、現地研修に参加した。

この目的に対する達成度は高い。現地にて、書籍で知り得ること以上の「今」の現状や「生の声」を知れたため

ある。また、訪問を機に、市内に住むネパール出身の人達と話すきっかけも得た。

一方で、「世界をつなぐ」「肯定的に出会う」場を授業の中でつくることへの責任感が増し、新たな課題も生まれた。これからも私自身が学び続けるとともに、どの子ども自分らしく生きていける世の中であるよう、子どもたちと共に考え続けていきたい。



長澤佑亮：今回の教師海外研修では、「研修」とあるように、ネパールで感じたこと、考えたこととそれ自体を自分の成長につなげることに加え、よりよい社会の形成者を目指す子どもたちにとって「よき教材」を開発することが大きな目的である。ここで指す「よき教材」とは、①子どもの国際理解教育を促すもの、②ネパールの現状や課題を子どもの視点で考え、理解できるもの、③多くの人を巻き込むためにも汎用性のあるものだと考える。これらを踏まえた上で、今回の海外研修では自分が想像していた以上の教材を収集してくることができた。特に、私は社会科の教員であるため、社会的な課題や国際理解については授業で多く扱う。この際、教科書などの文字資料のさらにその奥にある人々の「想い」や「願い」を実際に感じて、教材化することにとっても意義を感じた。一方で、多様な研修内容だけに、資料が膨大な数となってしまったため、先に述べた「よき教材」に加えて、こういった場面でどのように工夫して提示するのかを改めて検討していく必要があると感じた。



中島浩平：私の目的は開発途上国の教育現場へ足を踏み入れ、肌で感じられる全ての事を吸収して帰って来ることだった。そう、「単純」だ。ただ、その「単純」こそが、今までの私だったのだと思う。「開発途上国」を表層的に理解していた自分が恥ずかしくてたまらなかった。ネパールには約 **35,000** の学校があり、そのうちの3校を訪問することができた。私が分かったことなど、米粒ほどのことだ。何も見えてない自分がいた。だが、この考え方こそ、私は今まで持っていなかったものだ。目に見えないもの、本質を考え続ける姿勢が芽生えた。予想していないことが自分の中で起こったのだ。氷山の一角として見えているもの、見えていないインサイトの部分をこれからどうやって発見し、学び、解決していくのか、考え出すと眠れなくなった。この研修経験で芽生えた「本質を探る」考え方を教室にいる生徒と一緒に使ってみたいと思う。生徒たちと同じ目線に立って、けれども、少し角度を変えながら、ファシリテーターとして新たな授業実践をしようと思う。



道野大和：昨年度、国内の開発教育指導者研修（実践編）に参加した。初めて国際理解教育を知った。また、参加型のワークショップの奥深さも知った。1年間の研修の中で、貧困や人権問題など世界の課題を知り、参加者と意見を交換し合う中で、発展途上国への実情を知りたいとの思いが強くなった。今回の現地研修での目的は「とにかく五感で感じる」であった。出国前はあえてネパールについての事前情報は調べずに臨んだ。実際、現地の景色・におい・音・食べ物の味・触感などをなるべくフラットな気持ちで感じたかったからである。おかげで、目の前で起こる出来事は全て新鮮に感じられた。「なぜ?」「どうして?」と、どんどん疑問が出てきた。きっと子どもたちもこういう反応を示すだろうと夢中で写真を撮った。私が五感で感じた、ありのままのネパールを子どもたちに伝えていきたい。



山田拓弥：私は「五感で体感したことを生徒たちに伝える」を目標に研修に参加した。研修前の私は、国際理解教育に関する実践においても、英語の教科書に取り上げられている人権や多文化共生に関する題材においても、どうしてもより生徒たちが活発に意見を伝え合い、深い学びを感じることができるだろうかと悩むことが多かった。世界が抱える課題を生徒たちと共に考えていくために、五感でネパールを感じることができたことが何よりも代えがたい経験になったと感じている。

また、英語教員として、他国の英語教育の実態や外国語を学ぶ意義というものを改めて感じたいと考えていた。英語を通して考えや想いを伝えたり、聞いたりする場面が研修中の様々な場面であったため、改めて英語という言葉学ぶ意義というものを感じた。しかし、ネパール語で話しかけたときのネパールの方々の笑顔が非常に印象に残っている。英語を学ぶ意義と共に、現地の言語を学ぶ大切さを伝えていく必要性を体感することができた。

2. ネパールから学んだこと①

「ネパールに肯定的に出会う」という観点から



池田美輝：社会科教員として大切にしていることは、根拠の提示だ。中学1年生の社会科で、「世界の諸地域」を教えたとき、その国の資料を調べ、グラフや表などを活用して伝えてきた。この研修を経て、人々の思いや願いに触れることの大切さに改めて気づかされ、今までの考えが覆された。

ネパールの方々は、私たちを温かく迎えてくれた。日本との友好関係から、日本に肯定的な考えをもつ方ばかりだった。いつでも使える「ナマステ」の挨拶や非言語的コミュニケーションからも、ネパールの方の優しさを感じることができた。

現地では、子どもに「将来の夢」、大人に「今後の展望」を尋ねた。その思いは、先進国である日本と変わらなかった。同じ地球市民として、感じていることは同じだった。ネパールの方との関わりから、今後の教育活動で人々の思いをさらに大切にしようと思決意した。資料や情報、事実も大事にしつつ、教材に関わる場所に足を運び、人々の思いや願いを聞き、授業を構成したい。



市原健：昨年度の実践報告フォーラムに参加した際に研修参加者が話していた「ぼくらの大好きなネパール！」という言葉が印象に残っていた。ネパールに実際に行ってみて、行く先々でたくさんの方と出会った。気さくに話しかけてくれたホテルの方々、真心をこめて接してくれたホームステイファミリーなど、たくさんの親切さに触れる中で、自分自身も「大好きなネパール！」と心から思うようになった。まさに「肯定的に出会う」ことができたのだと感じた。認識が変わってからは、見聞きするものがどれも愛おしく思えた。また、ネパールが抱える課題についても、「何とかしたい！」と自分事として考えられるようになった。このように、他国や人に「肯定的に出会う」ことは、「遠い世界の事」を「自分事」に変える力を持っているのだと実感した。



掛井遥奈：ネパールの人々は、国籍や文化、言語が違う私たちを、とびっきりの笑顔で迎えてくれた。もちろん、街の様子や文化など様々な魅力を知ったが、その笑顔を見ただけでネパールが好きになった。仲良くなったホテルの従業員の子は、毎日体調を気にかけてくれ、会う度に「あなたは家族だから。」と嬉しそうに伝えてくれた。ホームステイ先では、あたたかい歓迎に涙があふれた。見知らぬ外国人であろう私たちを大きな愛ですべて包み込んでくれるその心が本当に嬉しかった。でも、きっとネパールの人々は、「見知らぬ外国人」などと考えていないのだろう。気付かないうちにわたしは日本という枠の中に入り込んでいたのだなと思い知らされた。人や国に肯定的に出会うことで「理解したい」「大切にしたい」という気持ちになる。この気持ちががとても大切だと思う。一人の人間として、教員として、ネパールはもちろん、様々な国、人との肯定的な出会いを実現し、それを子どもたちにも経験してもらえるように努めたい。



坂田英香：私にとっての「訪問国に肯定的に出会う」は、日本にいる時から始まった。意識するとネパールに繋がる場所は身近にあった。ネパール料理屋さんに足を運んだり、日本で日本語を学ぶ学生と交流を図ったりした。その度に、様々なことを教えてくれたり、知人を紹介してくれたり「ネパールの人々の温かさ」に触れたためだ。

実際に訪問したネパールでは、幾度となく歓待を受けた。コミュニティーや人との繋がりを大切にする元々のよさもあるだろうが、現地で話を聞く中で、私たちが受けた歓待は、ネパールの人々の声に耳を傾け、寄り添い、ネパールで活動してきた日本人が築いてきた信頼関係によるものであると感じた。長年に亘り、積み重ねられた一人一人への信頼が、日本への信頼となり、初めて出会う私たちへ還ってきたのではないだろうか。

「肯定的に出会う」とは、自分が「先に」相手を受け入れようとする気持ちを示すことで生み出されると感じている。ネパールの人達との出会いは、私自身の生き方・考え方をも立ち止まって振り返る機会となった。



長澤佑亮：「肯定的に出会うためにも多少のステレオタイプが大事である」と、というのが今回の研修で大きく気づいたことである。「訪問先に肯定的に出会う」ことはとても重要である、という

ことは事前研修でも沢山学んできたが、やはり行き先が開発途上国ということもあり、「～なのではないか。」といったステレオタイプは潜在的に生起してしまう。しかし、「現地に足を運ぶ」ことの大きな利点として、このステレオタイプへの裏切りを目の当たりにすることができる。この「裏切り」こそ、むしろ訪問先を肯定的に捉えるチャンスだと感じる。ネパールと出会う前、私はネパールという国は日本よりも閉鎖的で、危ないのではないかと勝手に想像していた。しかし、実際に訪れた先で出会う人々は暖かく、何よりも活気に満ちていた。まさに、この裏切りこそ、自身の抱えていたステレオタイプを見直し、ネパールを肯定的に捉える一助になったとを感じる。ステレオタイプを全て肯定できるわけではないが、少なくとも今回の研修において、ステレオタイプの裏切りこそ、ネパールと肯定的に出会うきっかけになった。



中島浩平：渡航前から練習していた片言のネパール語を使ってコミュニケーションを図ることで、より現地の方と近い距離でコミュニケーションがとれた。「Namaste!」の一言から始まる笑顔

での会話は、ネパール人の優しさを沢山感じられる一つの方法だった。ネパール語を練習している時点で既に私はネパールという国を肯定的に受け入れていたのだと思う。一見怖そうな、警察官や警備員の方も笑顔で対応してくれることが印象的だった。また、ネパールに移住してきた日本人女性や JICA 事務所で働く女性職員の方がネパール人は子供にとっても優しいし、町の人たちは他人の子供であろうと関係なく、気にかけてくれると嬉しそうに言われていたのも心に残っている。実際に、車窓から子供たちを複数の大人たちで抱っこし合ったり、幼い子供たちの顔を優しく撫でている様子を目にした時は、とても感動した。同時に、日本社会が忘れてのことだと悲しくなる瞬間でもあった。

自らが肯定的に物事を見る、接することでこれほどまでに多くの発見や体験ができることに正直驚いた。海外研修だけでなく、普段の何気ない生活や学校生活を肯定的な視野で見れば、これまで見えていなかったものがきっと見えるようになるのだと思う。



道野大和：初めて覚えたネパール語は、「ナマステ（こんにちは）」であった。これは、研修中もっとも口にしたネパール語だった。私が印象的だったのは、現地の人たちが、「ナマステ」と一人ずつ丁寧に目を合わせながら挨拶していることだった。日本では、「こんにちは！」とその場

にいる人全員にする時がある。ネパールではそれがなかったのである。一人ずつ何度も「ナマステ」と挨拶をするのだ。「あなたたち一人一人を大切にしているよ」というメッセージを研修中ずっとネパールの方々から受け取っていた気がした。また、食事の際の「おかわりが自由」なところも素敵であった。ネパールの国民食である「ダルバード」を店で食べたが、店員さんが何度も「おかわり」をもたらしてくる。これは、こちらが「プギョ！（満腹です）」というまで続く。この 2 つの印象的な出来事から、ネパールという国が大好きになった。無事、肯定的な出会いを果たすことができた。



山田拓弥：研修を通して、「肯定的に出会う」ということの大切さを感じた。ネパールと日本は共通点もあるが、異なる点も多い。自分と異なるということは、マイナスであるように感じるが、日本との違いに毎日心がワクワクした気持ちになった。自分と異なる人を受け入れることに難しさを感じている生徒たちに、「異文化＝怖いではなく、異文化と出会うことはとても楽しいことだ」と伝えたいと感じた。

また、なぜ自分自身がこれほどまでネパールと「肯定的に出会う」ことができたのだろうと考え、ネパールで出会った本当に多くの方が「笑顔」で接してくれたからだと感じている。「笑顔」という非言語コミュニケーションは、言葉が通じなくても相手に安心感を与えるということを改めて実感した。ネパールの人々に「肯定的に出会い」、ネパールという国を好きになったからこそ、ネパールのことをもっと知りたい、ネパールのことを日本の生徒に伝えたいという気持ちになった。

3. ネパールから学んだこと②

「日本とネパールとのつながりや同一性を理解する」という観点から



池田美輝：ナグドゥンガ・トンネル建設事業現場の様子や話から、日本とネパールのつながりを感じた。バンで工事現場付近に近づくと、三角コーンやガードレール等があり、日本の光景が広がっていた。日本の企業が、途上国に技術支援する様子を垣間見た瞬間だった。ネパールは、日本と同じ地震大国だが、地形は全く違う。「地形に合わせ、トンネルをどのように建設するかを考え、失敗から成功に導くことが、醍醐味だ」と語る技術者たち。ネパールの人々が安心して生活できるようにしたいという強い思いを感じた。また、ネパール人の技術者は、日本の技術を学び、自国に生かしたいという強い思いをもっていた。これらの発言から、日本の技術支援の有効性に気づくことができた。日本の高度な技術を伝えることで、途上国の人々が日本の技術を学び、自立することができるため、素晴らしい支援方法だと実感した。この訪問は、日本との肯定的な出会いとなった。



市原健：研修に参加して、訪日ネパール人の多さに驚いた。日本語学校はネパール国内にたくさんあり、訪問した日本語学校（Universal Training Center）だけでも、2019年以降に日本へ約600人ものネパール人を送り出しているということだったので、今後ますます日本とのつながりは強くなっていくのだと感じた。教師として開発教育・国際理解教育の重要性を実感するとともに、子どもたちに他国と「肯定的に出会う」機会を提供したいという思いが強くなった。

ホームステイ先や訪問したい学校では、日本アニメが話題となり、一緒に盛り上がった。特に若い世代はたくさんの日本アニメを知っていて、自分よりも詳しい子もいて驚いた。共通の話題を話すことは相手と仲良くなるのに最適な手段である。日本アニメを通して貴重な経験ができた。



掛井遥奈：3つの学校の訪問やホームステイなどを通して、人々の笑顔と愛は世界共通だと感じた。私は英語が苦手であり上手にコミュニケーションが取れなかったが、笑顔と「あなたと出会えてうれしい」という気持ちを前面に出して関わったら、たくさんの人々が私のそばに来て、優しい笑顔で私の拙い英語を一生懸命理解しようとしてくれた。

また、JICAやNGOなど、日本からの様々な支援を目にしていくなかで、「支援」というのは、信頼関係があること、互いのニーズを理解すること、持続可能であることが大切だと学んだ。ネパールの地で活躍する日本人の方々との出会い、日本とネパール両方のよさを取り入れながら、お互いによりよい世界を目指して活動していることに感動した。ネパールのことを知ることを通して、日本のよさに気付くこともできたと思う。訪問前までは、あまりネパールと日本のつながりがイメージできていなかったが、人や技術など、いろいろなつながりがあることに驚かされた。



坂田英香：「子どもが興味をもったことに寄り添う」「遊びの中で学ぶ」「子どもの中にある能力を引き出す」これらは、「大切にしていること」として、Kalidevi Secondary Schoolの先生達が話した言葉である。子どもたちのよりよい未来を願う教師の想いは、日本もネパールも同じであることを感じ、胸が熱くなった。また、Bhassara Secondary Schoolでは、防災の知識についてゲームや実践を通して、体感的に学んだ。中学生ぐらいの生徒達が外国人である私たちに堂々と防災について伝える姿から、学ぶことの面白さや生徒の達成感の醸成も共通であることを実感し、「教育」がもつ力の素晴らしさを感じた。

また、「ナグドゥンガ・トンネル建設事業の現場」で働くネパール人の青年は、日本の「段取り8割」という働き方が浸透して、1週間掛かっていた範囲が1日で終わるようになったことを話す姿があり、日本語学校「Universal Training Center」では、日本へ行き日本の人の介護をすることを目標としている人に出会った。ネパール内での日本の関わりが、時代を越えてこれからの日本を支えようとしているネパールの人への相互作用となっていると思えた出会いだった。



長澤佑亮：特に強く感じた「つながり」を3つ挙げる。第一に、教育という観点から「子どもは宝物」ということである。いくつかの教育現場に足を運び、授業風景を視察したり、実際に授業を行ったりしたが、子どもたちの笑顔は万国共通で幸せな気持ちになれると感じた。同時に、そ

ういった笑顔を大切にしている教師、そして親や地域の人々の姿勢は、国は違えど日本との同一性を感じた瞬間であった。第二に、「仕事」を通したつながりである。ネパールで出会う人の多くが日本で働きたいと口にしていた。一方で、近年の日本ではネパールから出稼ぎに来ている若者も多い。日本の「Pull」とネパールの「Push」が「仕事」を通してつながっていると感じた。第三に、「技術」を通したつながりである。ナグドゥンガトンネルでの技術支援、ラプグリーンネパールでの技術支援など、日本の技術がネパールの人々に役立てられている事実を学ぶことができた。さらに、現地で持続可能な支援を提供していることから、技術の支援そのものが終わったとしても、後継として日本とのつながりは残るのだと感じた。



中島浩平：ホームステイ最後の夜、村のみなさんと一緒にダンスをしたり、歌を披露してもらったりした。村の人たちの歌が終わった後、私たち8人も歌を披露することになった。日本を襲った東日本大震災時の復興を願って歌われた曲ということを会場の皆さんに伝えて、坂本九さんの

「上を向いて歩こう」を歌った。日本語の意味も当然わからない中で、村の人たちは笑顔で手拍子してくれる反応に心打たれた。互いの伝統の踊りや歌を通して、「人としての繋がり」を感じた時間だった。

また、ナグドゥンガ・トンネル建設現場では日本の技術や安全意識、チームワーク構築をするための考え方が移行していることに繋がりを感じた。高い技術の裏には、安心・安全な現場作りを徹底する考えはまさに **Made in Japan** であり、今後も多く分野で繋がって欲しいと思った。そのためにも、次世代の生徒たちに世界の問題を我々の問題として捉えることができるような授業作りをしたい。



道野大和：日本とネパールの共通点は、研修中たくさん見つかった。分かりやすいところというと、地理的環境である。山が多い、棚田がある、水資源が豊富など。山間から見えた景色は、日本のそれとよく似ていた。しかし、私がもっとも繋がりを感じたことは、笑顔の多さである。研

修中に徒歩や車で移動するとき、道行く人々とよく目が合った。一見、険しい顔だと感じる人もいたが、目が合うとニッコリと微笑んでくれる。しかも、ほとんどの人がである。笑顔は、人と人を繋げてくれる。国が違って初対面でも笑顔で言葉を交わせば、友好的な関係が結べる。子どもたちの前に立つ大人として、このネパールで感じたことは熱く伝えていきたい。お互いが理解し合うことは、難しいようで簡単だと思う。今回のネパールで世界平和へのヒントのようなものを体感することができた。今後も笑顔を忘れずに過ごしていきたい。



山田拓弥：研修を通して、様々な機関や企業の方々が日本の経験や技術をネパールに伝えていていることを知った。そして、ネパールの人々の思いやニーズを聞くなど対話を大事にしながら、将来的には支援や協力がなくても持続することが可能になることを目指していることを学んだ。研修

中に「日本で働きたい」、「日本語を勉強したい」と思っているネパールの方々に対話する機会があった。ネパールの方々が、日本は「安全」、「信頼できる」、「誠実」な国だと思っているという言葉の背景には、どのような思いがあるのだろうか。それは、これまでネパールと関わってきた日本人の長年の積み重ねが日本に対する「信頼」を生んでいるということ、研修を通して実感した。

また、研修を通して様々な学校で働く先生方と対話する機会があった。ネパールの先生方は日本の教員同様、「教育で生徒の未来を明るいものにしたい」という思いで溢れた熱心な方々だった。生徒に対する思いは日本もネパールも共通していると感じた。

4. ネパールから学んだこと③

「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から



池田美輝：様々な訪問先で話を聞き、人々が世界共通の課題に対して向き合い、取り組んでいることを、二つの訪問先からより実感した。

初めに、ラブグリーンネパール事業所の取り組みを挙げる。担当者の話によると、この取り組みを行う前は、農薬を使用し、野菜を育てていたため、健康被害があった。しかし、トレーニングを行い、化学肥料を使う必要がなくなった。無農薬野菜を育てることで、消費者だけでなく、農家にもよい影響があった。JICA の草の根技術協力事業により、農業が活性化され、マーケティングへの挑戦も始まっている。日本の高い技術協力により、生産者が安心安全な生活を送っていることが喜ばしい。

二つ目に、CWIN の活動からである。児童労働の問題は、世界の緊急な課題である。課題解決に向けて、様々な立場から行動していた。一番驚いたことは、弁護士が児童労働に携わっていることだ。法律を知っているため、政治にもアプローチができる。脆弱な政治体制や女性の福利厚生などから、児童労働に頼らなければやっていけない現状がある。教育を平等に行い、識字率を上げることが、何よりも大切であることに気づいた。



市原健：ネパールの若者の海外流出について、共通の課題であると感じた。ホームステイファミリー曰く、子どもが5人いたら5人とも海外を目指すほど、ネパールの若者の多くが海外を目指すようだ。実際、GDP の3割程度が海外送金ということであり、今や必要不可欠な状況だ。ただ、次

世代を担う若者が国外へ流出する現状が続くと、国としてますます海外へ頼らざるをえなくなり、経済的な自立も遅れるうえに国内課題を解決する自力もついていかない。非常に難しい課題だと思う。一方、日本の立場で考えると、日本国内に今後ネパールの人が増加することが予想される。日本にきたネパールの人が豊かな生活を送っていけるように、制度面できちんとフォローしていく必要がある。また、日本人がネパールの人を温かく受け入れていくためにも、ネパールのことをこれまで以上に理解する機会があるとよいと感じた。国際理解教育で貢献したい。



掛井遥奈：ネパールに着いた翌日。2つの寺院を訪れた時、私は物乞いをする子どもたちに出会った。この子たちにはどんな背景があるのか、この子たちはどうやって大人になるのか、この子たちの笑顔はどうしたら見られるのか、そもそも自分にできることは何もないのか…心が大きく

揺さぶられた。本当に苦しい気持ちになった。しかし、このような子どもたちが厳しい状況下に置かれているというのは日本も同じである。ヤングケアラーや東横キッズ、児童虐待など、子どもたちを取り巻く環境には様々な課題があると感じた。他にも、農業や土木などの仕事をする人の減少、教育の格差、貧困などがネパールと日本の共通の課題として挙げられると考える。他国を理解することとともに自国のことにも目を向けて考え、お互いに力を合わせて課題に向き合っていくことが必要なのだと学んだ。次世代を担う子どもたちを育てる教員として、日本と他国のつながり、共に課題を解決することの大切さを伝え、自分で気づいて行動できるような実践を行っていきたい。



坂田英香：共通の課題の一つに「自分らしく生きる」を挙げる。私が一番初めに「日本にきた理由」を尋ねた学生は「安全」だと回答した。「安全な場所で暮らすことが、家族にとっても安心」だと語る話に衝撃を受け、ネパールの治安は悪いというイメージをもって渡航した。しかし、実

際に12日間過ごした場所では、治安の悪さを感じることはなかった。ネパールで出会った様々な人と話す中で、彼女達の語る「安心・安全」には、仕事が自由に選べるなど精神面に対する意味が含まれることを感じるようになった。ネパールでは、男女間の就学の差や、学校間の教育格差等、様々な場に格差が見られ、海外流出、女性の労働環境などの問題へと繋がっていた。「自分らしい生き方」を選択できるよう、支援が必要な部分である。

一方、どこの国とも接していない日本は「多様性を受け入れる力が弱い」と感じている。小学校教諭として、大きな課題意識をもつ。しかし、ネパールでは、それが日常にある。多文化共生社会の中で「自分らしく生きる」ためには、相手を受け入れること、自分が何者かを考えることだと話すラクスマンさん（通訳）の話に、感銘を受けた。

「共に考え、超える」とは、支援をするかしないかだけではなく、共に語り、自分にはない視点や知見を得て、新た

に創造していくことでもあると思え、現地で活動していた方々の姿や話と結び付いた。



長澤佑亮：特に強く感じた「共通の課題」について3つ挙げる。第一に、教員の成り手不足である。学校を訪問した際に、教員の方と議論をした中で「教員を目指す学生が減っている」と話題が上がった。この課題は日本でも同様に存在するため、「どのように教員の魅力を伝えていくのか」が共通して大事になると考える。第二に、SNSの普及による子どもの実態である。街の子どもたちが、日本と同じようにスマートフォンを触っている光景を何度か目にした。そのような中、現地の教員との意見交換にて、SNSに関わるトラブルが増えているとのことであった。観光名所にもSNSを禁止する看板があるなど、情報モラルに関する教育は、共通した喫緊の課題であると感じた。第三に、脆弱者への支援である。ネパールでは児童労働やカースト制度など、日本にあまり馴染みのない課題が多いが、しかし改めて日本にもこうした脆弱者は存在するのだと現地を感じたと同時に、脆弱者に対してどのような支援が必要なのかという視点は、共通して重要であると考えた。



中島浩平：学校教育に焦点を当てると、日本とネパールに共通の課題がいくつか見えてきた。1つ目は、経済格差が引き起こす教育格差である。ネパールでは10学年生修了時に中等教育終了資格試験（School Leaving Certificate 通称「鉄の門」）と呼ばれるものがある。合格すれば高校卒業認定が与えられるが、施設や教員等の教育諸条件が不十分な公立学校や地方の生徒にとってはハードルが高い。そのため、公立学校と私立学校出身の生徒では合格率が大きく異なる現状がある。同じようなことが、日本で起っているのは間違いない。

2つ目には、学校同士での生徒の取り合いが起こっていることだ。町の至る所に学校の宣伝広告が貼られてあり、ホームステイ先に向かう田舎道の木々にさえ、広告が貼られていたことに驚いた。ネパールでは居住地に関係なく学校が選択できるため、教師が集まらない学校の生徒たちはより学習環境が不十分になりがちだ。これについても日本で類似しているケースが存在しているのは事実だ。学校教育1つとっても共通の課題があることがわかり、共に考え、共に越える意味が理解できた。



道野大和：ネパールの子どもの権利擁護団体のCWIN（シーウィン）へ訪問する機会があった。施設職員が発した言葉で強く印象に残った言葉で「人類共通の課題」というものがあった。その団体からは、「児童労働」の実態について説明があった。日本では児童労働の問題はあまり話題になることはない。子どもたちは、児童労働という言葉すら知らないことだろう。その子どもたちに、どのように児童労働という問題を考えてもらおうとかと施設職員の話聞きながら思った。日本は物質的には世界で一番といっていいほど豊かである。しかし、そのまま世界の問題を知らなくてよいのかと問われるとそうではない。無関係のようで無関係ではない、共通の課題である。そのためには、開発教育指導者研修（実践編）で学んだ「肯定的に出会う」「つながりを見つける」「共通の課題に気づく」「解決に向けて話し合う」というステップを丁寧に踏むことが大切だと感じた。日本での実践を頑張りたい。



山田拓弥：研修を通じて、日本とネパールが抱える課題に共通点が多くあることを知った。まず、「働き手不足・後継者不足」の課題がある。人口減少に伴い、日本において働き手不足・後継者不足が深刻な課題となっているように、ネパールにおいては出稼ぎによって働き手が国外に行ってしまうという課題が挙げられる。また、日本もネパールも自然災害の多い国として知られている。今回の研修においても、日本の震災の経験をネパールに伝え、防災教育に生かしているということも学んだ。

子どもの権利擁護のために活動するCWINの職員の方に日本の生徒たちへのメッセージをお願いした際、「ネパールにおける児童労働の問題を世界の問題として一緒に考え、一緒に行動してほしいと願っている」と言ったことが非常に印象に残っている。世界の中の日本という国に暮らす私たちが、世界共通の課題を世界の人々と共に考えるということが非常に大切であることを日々の学校教育の中で生徒たちに伝えていきたい。

開発教育指導者研修(実践編)第3回における報告

- ◇ 海外研修受講者 1 人につき、開発教育指導者研修（実践編）のみに参加している受講者 2～3 人ずつ向かい合って座り、5 分間×3 回（席を替わって）、現地研修についての報告を行った。



開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2025 に向けた準備

- ◇ 「開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2025」で行う「教師海外研修報告」及び「実践体験ワークショップ」の検討を、次の日程で行った。

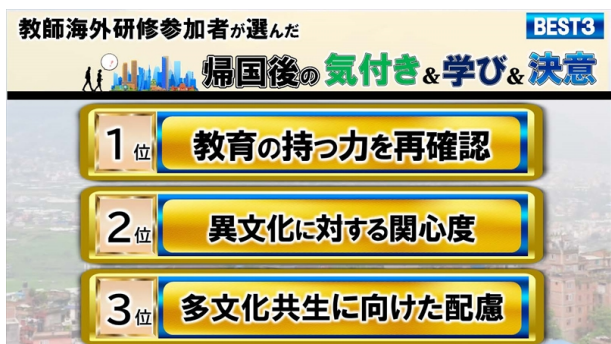
第 1 回：2024 年 11 月 16（土） 10：00～12：00、13:00～17:00

第 2 回：2025 年 1 月 18（土） 10：00～12：00、13:00～17:00

開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2025 での報告

- ◇ 実践報告フォーラムでは、「教師海外研修報告」「実践報告（ポスターセッション）」「実践体験ワークショップ」で、海外現地研修や学校での授業実践について参加型で報告を行った。
- ◇ 「教師海外研修報告」では、同行ファシリテーター挨拶の後、現地の写真や動画などを投影（P.35 に抜粋掲載）しながら、「ネパールでの驚き&気付き&学び BEST3」、「帰国後の気付き&学び&決意 BEST3」という視点で報告を行った。
- ◇ 「実践報告（ポスターセッション）」では、実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラム参加者へ 42 分間（14 分×3 セッション）の各自報告を行った。
- ◇ 「実践体験ワークショップ」では、受講者が実践したプログラムのうちの 1 つを 2 時間の一般向けに修正して、受講者がファシリテーターになって提供した。





海外研修報告の様子と投影資料（抜粋）

V. 実践報告書

実践報告書の内容一覧

No.	名前	対 象	時間数	テーマ	タイトル
1	市原 健	小学校1年生 (30名)	11	国際理解	せかいの子どもたちとなかよくなろう！
2	掛井 遥奈	小学校3年生 (31名)	8	多文化共生・ 人権・平和	みんなの地球、みんなの東部小、 みんなの3の2♡
3	坂田 英香	小学校6年生 (30名)	8	キャリア (自己理解 ・他者理解)	世界のWell-being 自分のWell-being
4	長澤 佑亮	中学校2年生 (126名)	9	多文化共生 ・国際理解 ・地域の在り方	世界の架け橋プロジェクト ～共に生き、共に乗り越える～
5	中島 浩平	高校2年生 (39名)	6	人権・共生・ コミュニケーション	New Encounter : Promoting Acceptance & Learning
6	道野 大和	小学校5年生 (71名)	12	国際理解・人権 ・貧困・豊かさ	ネパールから世界を知る
7	山田 拓弥	中学校1年生 (149名)	10	国際理解・SDGs ・キャリア	SDGs×キャリア教育 ～「より良い未来」をみんなで作ろう～

注：池田美輝さんは、事情により事後研修①の後に、その後の研修を辞退することとなったため、実践報告は未掲載。

※ 次ページ以降の実践報告書には、授業実践を6時限以上行った場合は、主要な時限についてのみ掲載しています。



せかいの子どもたちとなかよくなろう！



所 属	愛知県長久手市立東小学校	実践者	市原 健
対 象	小学校1年生（30名）	実践日	2024年10月～2025年1月
実践教科	学級活動・道徳	時間数	11時間
テーマ	国際理解		
ねらい	・ ネパールをはじめとした他国の人々に関心を持ち、進んで関わりたいという思いをもつ。 ・ 他者と関わるうえで大切なことを考え、実際にネパールの子どもたちと関わりをもつ。		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1	◆ 他国や、他国の人々に関心をもつきっかけづくり ◆ ① 世界の国名アイウエオ 【アイスブレイク】 ② 道徳教材「せかいのこどもたち」で、6枚の写真をもとに他国の子どもたちの生活に関心を持ち、登場する子どもたちと一緒にしたいことを考える。 【フォトランゲージ】【ブレインストーミング】	・ 光村図書「道徳1」
	2・3	③ 実物・動画・写真・クイズでネパール紹介 【フォトランゲージ】	
	4～7	◆ 疑似体験で、他国の人々を身近に感じ、関わりたいという思いをもつ ◆ ① 世界各国に住む4人の子どもの写真資料の中で「いいね！」と思うことに♡を付けるとともに、その子に「言いたい」「聞きたい」ことを書き込む。 【フォトランゲージ】 ② 全体で共有し、共感できる書き込みに◎を付ける。【ギャラリー方式】	・ 岩崎書店「世界の子どもたち」2018年 ・ 偕成社「世界のともだち 33 オランダ サシャの笑顔はチューリップ」2016年
	8	◆ 世界とつながる準備：「せかいの子どもたちとなかよくなろう！」 ◆ ① 「もしも4人が東小に引っ越して来たら」自分がどんな気持ちになるか、また、4人はどんな気持ちなのかを想像したうえで、「なかよくなるためにたいせつなこと」というテーマでアイデアを出し合う。 【ブレインストーミング】 ② ネパールの子どもたちとオンラインで交流することを知ったうえで、①で出したアイデアの中から交流内容を決定する。	・ 決定した交流内容
	9	③ オンライン交流の準備をする。	①ネパール語で自己紹介 【笑顔で挨拶・名前・好きなこと】
	10	◆ 世界とつながる：「ネパールのみんな、ナマステ！」 ◆ ① ネパール現地校の子どもたちとオンラインで交流する。	②日本の遊び紹介 【けん玉・コマ・じゃんけん】 ③じゃんけんと一緒に遊ぶ ④質問・感想タイム
	11	◆ 振り返り ◆ ① 活動を通して感じたことを共有する。 ② ネパールの子どもたちに向けてメッセージを書く。	
	成 果 開発教育で重視されている「行動につなげる」ことを目指した。実践を通して世界の子どもたちと「仲良くなりたい！」「友達になりたい！」という意見が多く出て、その思いを後半の実践に生かすことができた。ネパールの子どもたちとのオンライン交流では、児童が考えた「なかよくなるためにたいせつなこと」をもとに、児童主体で交流内容を考えて準備を進め、当日も充実した時間を過ごすことができた。		
	課 題 多くの小学1年生は、他国に対する偏見がない。こうした時期に世界の人々につながるポジティブな体験をすることは、児童の国際理解への向き合い方をより良くするきっかけになると思うので今後も続けたい。		
	備 考 ネパール現地校とのオンライン交流は、現地で活躍する団体(e-Education)のシェルパ絢子さんのご協力により実現した。		

[授業実践の詳細]

1-3 時限目「他国や、他国の人々に関心をもつきっかけづくり」

この時限のねらい

- ・ ネパールをはじめとした他国や他国の人々に関心をもつ。
- ・ 他国や他国の人々を「もっと知りたい」という思いをもつ。

1 子どもの活動の流れ

① 世界の国名アイウエオ【アイスブレイク】

- ・ 「世界の国名アイウエオ」というアクティビティで、指定された国（「アから始まる国」等）を世界地図の中からできるだけたくさん探し、見つけた国に印を付けた。

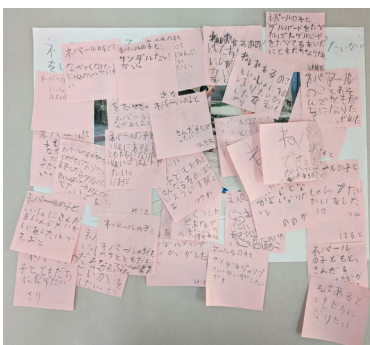
② 世界各国で暮らす子どもたちの写真(6枚)をもとに、他国の子どもたちの生活に関心をもつ

【フォトランゲージ】【ブレインストーミング】

- ・ 6枚ある写真のうち各班で1枚担当し、どんな場面の写真なのか想像し、写真の説明を考えた。
- ・ 自分たちで考えた写真の説明を他班に向けて行った。
- ・ 「写真の中の子どもたちと一緒にしたいこと」を考えて付箋にたくさん書き、その写真に貼った。

③ 実物・動画・写真・クイズでネパール紹介【フォトランゲージ】

- ・ ネパールの実物教材に触れたり服や装飾品を身に付けたりして、他国の文化を体験的に学んだ。
- ・ ネパールに関わる動画・写真を使ったクイズを通して、他国について楽しみながら学んだ。



【①で地図の中から指定された国名を探す様子】 【②で写真資料に貼られた付箋】 【③でネパールの実物教材を楽しむ様子】

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ①や②の活動を通して、色々な国に興味をもったり他国の人と友達になってみたいと考えたりする児童の様子が見られた。
- ◇ ③では、実物教材を見て触るだけでなく、「ネパールの匂いがする！」など、まさに五感で体験する様子が見られた。実物に触れたからこそ、その後に行ったネパール紹介の授業では、児童の目が一層キラキラ輝いていて、心から楽しんでいることが伝わってきた。

3 使用した教材

<教材1> 『道徳1』2024 年、光村図書

4-7 時限目「疑似体験で、他国の人々を身近に感じ、関わりたいという思いをもつ」——●**この時限のねらい**

- ・ 他国の人々を身近に感じ、進んで関わりたいという思いをもつ。

1 子どもの活動の流れ**① ベトナムに住むタイさんの暮らしの様子を体験的に学び、進んで関わりたいという思いをもつ**

【フォトランゲージ】【ギャラリー方式】

- ・ 各班で、タイさんに関する5枚の写真資料を見たり読んだりして、タイさんの人柄や好きなこと等を知った。
 - ・ 各班で、写真資料の中で「いいね！」と思うことに♡を付けるとともに、タイさんに「言いたい」・「聞きたい」ことを書き込んだ。
 - ・ ♡や書き込みを学級全体で共有し、共感できる書き込みに◎を付けた。
- ※ ②・③・④は、①と同様のやり方で、別の子ども(②はオランダのサシャ、③はパキスタンのマーク、④はブラジルのラファエルについて取り上げて授業実践をした。



【④で写真資料の説明を班の子にしている様子】



【③で写真資料に♡を付けたりコメントを書いたりする様子】

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 世界各国で暮らす4人の子どもについて、その子の好きなことや食べ物、習い事、ペットなどを詳しく知るうちに、自然と「ラファエルたちと仲良くなりたい」などの発言がよく聞こえてきた。「言いたいこと」や「聞きたいこと」を書き込む活動でも、「シンチャオ！ぼくのなまえは〇〇です。ともだちになろう！」や「こんどいっしょに水でっぼうであそぼう！」など、4人の子どもたちを身近に感じ、実際に仲良くなりたいという思いが伝わる記述で溢れていた。

3 使用した教材

<教材2> キャサリン・サンダース『世界の子どもたち』2018年、岩崎書店

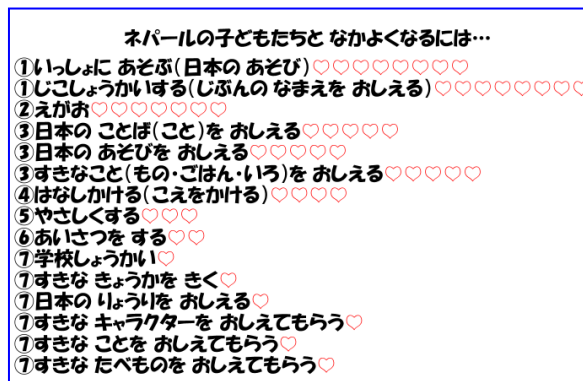
<教材3> 浅田政志『世界のともだち 33 オランダ サシャの笑顔はチューリップ』2016年、偕成社

8-9 時限目「世界とつながる準備:『せかいの子どもたちとなかよくなろう!』**この時限のねらい**

- ・ 他者と関わるうえで大切なことを考える。
- ・ 大切だと考えたことを、オンライン交流の準備に生かす。

1 子どもの活動の流れ

- ① 4-7時限目で登場した4人の子どもたちと仲良くなりたいという児童の思いを生かし、他者と関わるうえで大切なことを考える【ブレインストーミング】
 - ・ 「もしも4人が東小に引っ越して来たら」自分がどんな気持ちになるか、また、4人はどんな気持ちなのかを想像した。
 - ・ 「なかよくなるためにたいせつなこと」というテーマでアイデアを出し合った。
- ② 他者と関わるうえで大切だと考えたことを、オンライン交流の準備に生かす
 - ・ ネパールの子どもたちとオンラインで交流することを知ったうえで、①で出したアイデアの中から取捨選択し、交流する内容を決定した。(右下の図にある①から⑥までを実施)
 - ・ オンライン交流の準備をした。



【①で考えた「なかよくなるためにたいせつなこと」を共有する様子】

【①で班ごとに考えたアイデアを集約して上位から並べた資料】

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ①では、自分たちの視点だけでなく、相手の視点も大切にして話し合う姿が見られた。児童たちは「自分が違う国に引っ越したとしたら…」といった想像をし、4人が抱くであろう不安な気持ちにも気付くことができた。そのうえで、「えがおがだいじじゃないかな?」「その子のくにのあいさつをするとよろこんでくれるかも!」など、相手を念頭に置きながら、他者と関わるうえで大切なことを具体的に考えることができていた。
- ◇ ネパールの子どもたちと交流することを伝え、児童たちはとても喜んだ。どの児童も意欲的に準備し、ネパール語での自己紹介などを何度も繰り返し練習する姿が見られた。「ネパールの子がどうしたら喜んでくれるのか」ということを意識する児童がとても多く、頼もしく感じた。

10-11 時限目「世界とつながる:『ネパールのみんな、ナマステ!』」**この時限のねらい**

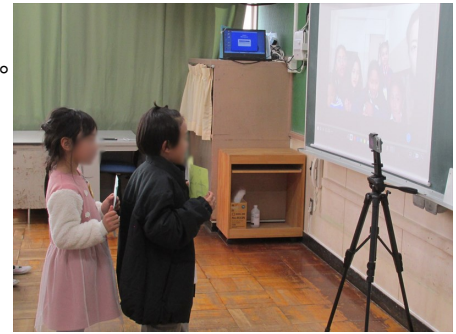
- ・ 学びを生かし、実際にネパールの子どもたちと関わりをもつ。

1 子どもの活動の流れ**① ネパールの現地校の子どもたちとオンラインで交流する**

- ・ ネパール語で自己紹介(笑顔で挨拶・名前・好きなこと)をした。
- ・ 日本の遊び(けん玉・コマ・じゃんけん)を紹介した。
- ・ じゃんけん大会をして、一緒に遊んだ。
- ・ 質問したいことや今日の感想をお互いに発表し合った。

② 振り返り(オンライン交流の翌日)

- ・ 活動を通して感じたことを共有した。
- ・ ネパールの子どもたちに向けてメッセージを書いた。



【ネパール語で自己紹介をする様子】



【けん玉を紹介する様子】



【じゃんけんをして一緒に遊ぶ様子】

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ オンライン交流は、児童たち主体で考えた「なかよくなるためにたいせつなこと」を十分に実現する内容となった。ネパール語で行った自己紹介を受けて、ネパールの子たちが日本語で自己紹介をしてくれたり、一緒にじゃんけんをして遊んだりする中で、どんどん打ち解けていき、終始笑顔が溢れる時間となった。
- ◇ 振り返りの中では、「ネパールみんなとともだちになれてよかった。」など、児童たちの満足した様子が窺える記述が多くあり、児童たちにとって大切な時間となったことが見て取れた。全ての活動を終えた後も、「ナマステ!」や「シンチャオ!」、「ホイ!」、「オラ!」、「サラーム!」といった、これまでの授業で扱った挨拶が飛び交うようになるなど、児童たちが明るく前向きに国際理解を進めていることが感じ取れる。

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

＜その他の実践その①＞

対 象	小学校 6 年生（93 名）	実践日	2024 年 11 月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	1 時間
実践内容	◇ ネパールへの現地研修で得た知見を生かし、写真や動画資料を提示しながらネパールについて紹介した。		

＜周りへの波及活動＞

- ◇ 職員に向けての研修報告を紙面にて実施した。(右図)
- ◇ ネパールとのオンライン交流授業を実施することを職員に向けて予告し、当日も数名の職員に参観していただいた。また、実践の様子を本校ホームページで公開し、保護者の方にも紹介した。



2 実践の総括

- ◇ 開発教育で重視されている「行動につなげる」ことを目指した。実践を通して世界の子どもたちと「仲良くなりたい！」「友達になりたい！」という意見が多く出て、その思いを後半の実践に生かすことができた。ネパールの子どもたちとのオンライン交流では、児童が考えた「なかよくなるためにたいせつなこと」をもとに、児童主体で交流内容を考えて準備を進め、当日も充実した時間を過ごすことができた。
- ◇ 今回実践した小学1年生と小学6年生の多くは、他国に対する偏見がほとんどないようだった。こうした時期に世界の人々をつなげる体験をしたり「世界って面白い！」と実感したりすることは、児童の国際理解への向き合い方をより良くするきっかけになると思う。今後も継続して実践していきたい。

3 次の実践者へのエール

- ◇ 開発教育の大きな魅力の一つが、子どもたちに当事者意識をもたせられることです。子どもたち自身がより良い未来を目指し、課題を解決しようとする姿がとても眩しく、自分自身にとっても良い刺激となりました。

以上

みんなの地球、みんなの東部小、みんなの3の2♡

所 属	静岡県磐田立東部小学校	実践者	掛井 遥奈
対 象	小学校3年生（31名）	実践日	2024年 11月～12月
実践教科	学級活動	時間数	8時間
テーマ	多文化共生、人権、平和		
ねらい	・ネパールやブラジルのよさ(日本と同じ or 違い)を知り、世界の面白さに気付く。 ・自分と他者の違いについて考え、それぞれのよさを力にするために大切なことを確認する。 ・多様な生き方があることを知り、だれもが過ごしやすい学級にするためにできることを考える。		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1	「ナマステ！ネパール！」 ・ネパールで撮ってきた写真や動画を見て、ネパールはどんな国かをグループで考える。【ブレンストーミング】 ・写真や動画を見て、ネパールの暮らしや文化について知る。【クイズ】	・ネパールの写真や動画(パワポ) ・ネパール BOX (JICA)
	2	「もっと知りたい、いろいろな国(ブラジル、日本)」 ・ブラジルの写真を見て、暮らしや文化について知る。【クイズ】 ・「日本といえば…」思いつくことは何かグループで意見を出し合う。	・ブラジルの写真(ブラジル国籍の児童と保護者に依頼)
	3	「みんなちがって、みんないい」 ・3つの国のそれぞれのよさについてグループで話し合う。【対比表】 ・もしみんなが同じだったらどうなるか、グループで話し合う。【派生図】	
	4	「いろいろな生き方」 ・ベジタリアンマークについて知る。【クイズ】 ・いろいろな生き方があることを知り、身の回りで困ることがないか考える。	・ベジタリアンマークのついた食品 ・日本の食品やメニューの写真
	5	「はるな先生のネパール日記 ～みんなはどう感じる？～」 ・ネパールでの出来事を共有し、その出来事の前と後で自分の気持ちがどう変化するか考える。【ブレンストーミング】	・ネパール日記(オリジナル)
	6	「みんなで生きよう！同じ場所で」 ・今までの学習を振り返り、みんなが過ごしやすい学校や学級にするために今の課題とどうなったらいいかをグループで考える。【派生図】	
	8	「みんなの3の2に！」 ・みんなが過ごしやすい3の2にするために自分にできることを考える。 ・その中から自分が今日から実践することを決める。【行動宣言】	
成 果	外国籍児童が多い学校のため、児童の中で見えない壁があるように感じていた。しかし、この実践を行っていく中で、同じ日本、同じ学級にいる友達として関わり合おうとする姿が見られ始めた。また、それ以外でも相手を否定しないこと、相手の声を聞くことを意識し始めている様子もあり、とても嬉しく思っている。		
課 題	実践を行う中で、多くの児童が「ネパールの子と友達になりたい！」「ネパールのことをもっと教えてほしい！」という思いを口にしていった。実際にネパールの子どもたちとつながれる機会を設け、生きている国は違っても同じ地球に生きる友達を見つけるきっかけづくりができるとよかったと思う。		
備 考	ブラジル国籍の児童や保護者の協力のおかげで、世界から見た日本の視点を得ることができた。		

[授業実践の詳細]

1 時限目「ナマステ！ネパール！」

この時限のねらい

- ・写真や動画を用いたクイズを通して、ネパールという国に肯定的に出会う。
- ・世界には様々な文化があることを知り、その面白さに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① アイスブレーキング

- ・「3つはホント、1つはウソ」

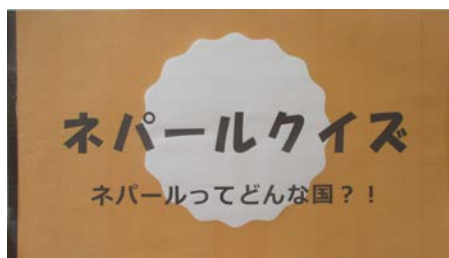
② ネパールってどんな国？

- ・ネパールで撮ってきた写真や動画を見て、ネパールはどんな国かをグループで考える。【ブレインストーミング】

③ ネパールクイズ

- ・写真や動画を見て、ネパールの暮らしや文化について知る。【クイズ】

④ 振り返り



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ネパールという国についての知識はないが、外国に対する興味関心は高く、クイズを通してネパールに肯定的に出会えた。「ネパールをもっと知りたい！」という発言が多く聞かれた。
- ◇ 写真や動画を用いたことで、日本と違うところや同じところを進んで見つけている子が多かった。
- ◇ 参加型の手法を使ったことで、ほとんどの子がペンをもち、発言し、活動に参加することができた。

3 使用した教材

<教材1>ネパールで撮影した写真や動画

<教材2>ネパールボックス(JICA より)

<教材3>ネパールで購入したクルタやヘナタトゥーなど

2

時限目「もっと知りたい、いろいろな国(ブラジル、日本)」

この時限のねらい

- ・写真や動画を用いたクイズを通して、ブラジルという国に肯定的に出会う。
- ・世界には様々な文化があることを知り、その面白さに気付く。
- ・他国と日本の同じところやちがうところを考えることを通して、日本の文化にも気づく。

1 子どもの活動の流れ

① ブラジルクイズ

- ・ブラジルの食べ物や風景の写真を見て、暮らしや文化について知る。【クイズ】
- ・ブラジル国籍の児童や保護者の話を聞く。

② 日本といえば？

- ・「日本」といえば、どんなことが思いつくかグループで話し合う。【ブレインストーミング】
- ・模造紙を回し、他のグループはどんな考えが出たか知る。【ギャラリー法】



③ 振り返り

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ クラスに在籍しているブラジル国籍の子供たちがとても生き生きとした表情で参加していた。
- ◇ ブラジルの話に興味をもち、ブラジルのことをよく知る子に、自然と会話をしようとする子たちの姿が見られた。
- ◇ 普段何気なく生活している中であまり気付かなかった日本の文化にも興味をもっていた。

3 使用した教材

- ＜教材4＞ブラジルの写真(ブラジル国籍の児童や保護者から提供していただいたもの)
- ＜教材5＞折り紙やゆかたなど、日本の文化がわかるもの(実物)

3 時限目「みんなちがって みんないい」

この時限のねらい

- ・ネパールやブラジルのよさ(日本と同じ or 違い)を知り、世界の面白さに気付く。
- ・「ちがう」ことは「悪い」ことではないということに気付く、多様な生き方があることを理解する。

1 子どもの活動の流れ

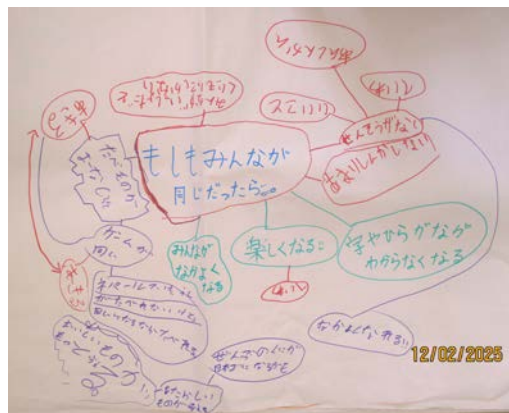
① 3つの国のいいところ見つけ

- ・3つの国(ネパール・ブラジル・日本)のそれぞれのよさについてグループで話し合っ
て表にまとめる。
 - ・模造紙を回し、他のグループはどんな考えが出たか知る。【ギャラリー法】
- 【対比表】

日本	ブラジル	ネパール
・おみせがある - 氷が溶ける ・かきを食べる。 ・おすそ ・サムライ ・おすしがおいしい。 ・たべものが多い。 ・お茶 ・日本人が多い。 ・四季がある。	・カーニバルー ・サッカー ・暑くない（暑い） 夏は暑い <i>(注)</i> 冬は寒い ・めずかしい目に大いに楽しむ ・バーベキューをする ・おいしい料理が多い ・日本人が少ない ・ブラジルに人が多い ・毎日暑い	・赤の物がいっぱい ・うしを食べて肉はいっぱい ・こっきが三角形 ・ドラムがある ・きゅうりのゆるいクマから ・チヂミ

② 「もしもみんなが同じだったら…」

- ・①で出たようなちがいが全くなく、みんなが同じだったらどうなるかをグループで話し合う。【派生図】
- ・模造紙を回し、他のグループはどんな考えが出たか知る。【ギャラリー法】



③ ふり返り

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 第1時と第2時でクイズを行い、ネパールやブラジルに肯定的に出会っていたため、その2つの国のよさは多く出されていた。日本と違うところに興味をもって、その部分を「よさ」として捉えている子が多かった。
- ◇ 日本についてあまり「よさ」が出てこなかった。
- ◇ 「みんな同じ考えだったら戦争が起きず、仲良くできる」という意見が出ているグループが多かった中で、「みんなが同じ考えだったら成長・進化していかない」という考えも出てきた。振り返りでは、「同じだからいいこともあるけれど、ちがったほうがおもしろいこともある」と感想をもつ子もいた。

3 使用した教材

＜教材6＞第1時～3時で作成した模造紙

5

時限目「はるな先生のネパール日記 ～みんなはどう感じる？～」

この時限のねらい

- ・自分が外国に行ったとき、どんな気持ちになるのか、どんなことを思うのかを理解する。
- ・ネパールの人たち(受け入れてくれる側の人たち)の行動によって、気持ちが変わることを経験し、お互いを認め合い、共に生きていくことの大切さに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① はるな先生のネパール日記〈前半〉

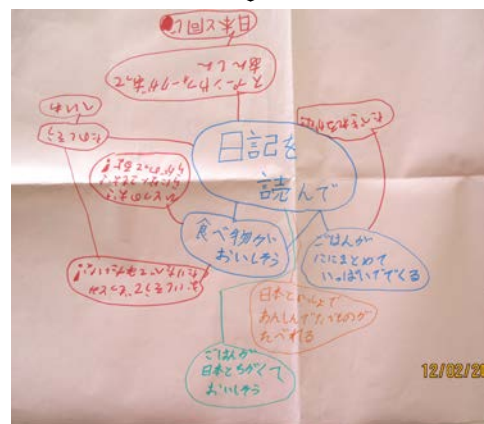
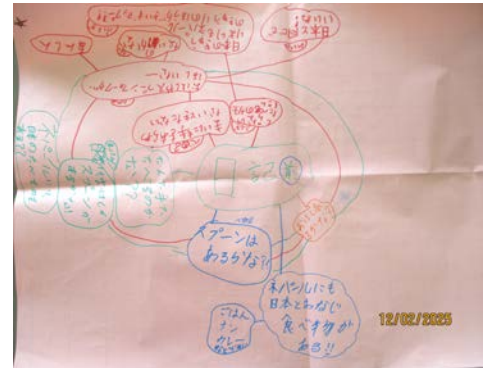
- ・グループごとに分けられた写真と文を読み、自分がその立場になったときどんな気持ちになるのか、どんなことを考えるのか、グループで意見を出し合う。

【ブレインストーミング】

② はるな先生のネパール日記〈後半〉

- ・ネパールの人たちの行動や様子がわかる写真と文を読み、その行動によってどんな気持ちや考えになったかグループで話し合う。【ブレインストーミング】

③ ふり返り



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 課題がやや難しかったようで、あまり場面や気持ちを想像できていない子がいた。
- ◇ ネパールについて肯定的に捉えていることはよかったが、少数派になったときのことを具体的にイメージできていなかった様子だった。
- ◇ ネパールの人たちの行動によって、「はるな先生」の心配な気持ちは解決されたことは理解できており、出来事の前後で不安な気持ちが安心に変わったことに気付いている子もいた。

3 使用した教材

＜教材7＞ネパールで撮影した写真を用いたオリジナルの日記



7 時限目「みんなの3の2に！」

この時限のねらい

- ・自分と他者の違いについて考え、それぞれのよさを力にするために大切なことを確認する。
- ・多様な生き方があることを知り、だれもが過ごしやすい学級にするためにできることを考える。

1 子どもの活動の流れ

① みんなのよさを力にするには？

- ・自分のよさ、友達のよさそれぞれを大切にし、それを自分たちの自慢、力にするにはどうしたらよいか意見を出し合う。【ポップコーン式】

② 自分には何ができるかな？

- ・みんなが過ごしやすい3の2にするために、自分たちにできることをグループで話し合う。
【ブレインストーミング】
- ・模造紙を回し、他のグループはどんな考えが出たか知る。
【ギャラリー法】

③ みんなの3の2に！行動せんげん！

- ・みんなが過ごしやすい3の2にするために、自分がやろうと思うことを1つ決めてロイロノートに書き、行動宣言をする。【行動宣言】

④ 振り返り

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 自分にも友達にも、それぞれよさがあることに気付き、お互いを大事にしていきたいという意見が多かった。
- ◇ 学級内に、ブラジル国籍の子が数人在籍しており、その子たちともっと関わられるようにしたいという思いから、グループ活動やペア活動の時に、自然とできてしまっていた壁が少しずつなくなってきている様子が見られた。
- ◇ 「どんなことができたらいいか」ではなく、「明日から（今日から）やろう」と決めたことで、実際に行動に移している子が見られ、それを帰りの会の「いいこと見つけ」という時間に紹介するという場面もあった。

3 使用した教材

<教材8>「ともだち」谷川俊太郎

みんなの3の2にしよう！
わたしの行動せんげん！

笑顔で挨拶する

不安そうだったら話す

誰にでも話す

助け合う

みんなの3の2にしよう！
わたしの行動せんげん！

- ・もっと元気なあいさつをする。
- ・こまっている人に話かける。
- ・友達といっしょにたくさん遊ぶ。

みんなの3の2にしよう！
わたしの行動せんげん！

話しかける時は、笑顔。

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<周りへの波及活動>

- ◇ 参観会の授業で実践を行い、保護者にもアクティビティに参加してもらう。
- ◇ PTA バザーの日にネパールコーナーを設置
- ◇ 教師海外研修の報告会（勤務校の教員に向けて）
- ◇ 校外の研修にて、教師海外研修の報告、参加型の手法の紹介や体験

2 実践の総括

- ◇ 自校の特徴として、児童数の多いことや外国籍児童も多いことが挙げられる。ポルトガル語の通訳の方が配置されていたり、国際理解委員会という様々な国への理解を深めるために活動する委員会があったり、雰囲気としては国際理解に対して前向きな様子が見られている。しかし、どうしても見えない壁があって、同じコミュニティの中だけで関係性が成り立ってしまっていることが課題であると感じていた。
- ◇ 今回の研修や実践を通して、自分の学級では少しずつそのコミュニティの広がりが見られ、国籍に関係なく子供たち同士のつながりができてきたように感じている。実践の中で、多くの児童が「ネパールの子と友達になりたい！」「ネパールのことをもっと教えて！」という思いを口にしていた。実際にネパールの子どもたちとつながれる機会を設け、生きている国は違っても同じ地球に生きる友達を見つけるきっかけづくりができるとよかった。
- ◇ 同僚に向けた研修報告や PTA のバザーの場を借りた「ネパールコーナー」など、教員、保護者、地域にも発信しようとしたが、伝えるだけになってしまった。もっと一緒に考えられるような機会を作りたい。また、対象によってできることと難しいことがあり、なかなか自分の考えるねらいを達成できる実践が思いつかなかった。いろいろな人に国際理解について考えるきっかけ作りができるように、今後も実践を行っていくと思う。

3 次の実践者へのエール

- ◇ 実践を行う中で、実物、写真、動画がとても有効であることを改めて感じた。自分が伝えたかったことが言葉なくとも伝わることもあった。百聞は一見に如かず。もちろん、計画する中で様々な仕掛けや工夫をすることも大切だけれど、いかに現地で得た教材を生かせるか…が重要になってくると思う。
- ◇ 実践を通して、自分自身の知識も広がり、実践の場が子供たちと本気で考えるきっかけになった。「どうにかしたいな、でもどうしたらいいのだろう。」と悩んでいた部分に踏み込めたのもこの実践だった。自分が行動すれば周りも少しずつ変わるのだと気付けたことも大きかったと思う。

4 参考文献・資料

- 1) 谷川俊太郎 『ともだち』 2002 年 玉川大学出版部
- 2) 『よりよい未来をとともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編』 2018 年、NIED・国際理解教育センター 以上

世界の Well-being 自分の Well-being

所 属	静岡県浜松市立泉小学校	実践者	坂田 英香
対 象	小学校 6 年生 (30 名)	実践日	2024 年 10 月～12 月
実践教科	(総合的な学習の時間)	時間数	45 分×8 時間 (4・5 回を除く)
テーマ	キャリア (自己理解・他者理解)		
ねらい	・世界にはどのような課題があるのかを知り、自分の生きる未来を想像する。 ・自己を見つめ、自分が「意義を感じる」「したいこと」「大切にしたいこと」などを感じる。 ・よりよい未来のために、自分ができると宣言する。		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1 (45 分)	<u>どんな大人になりたい？</u> ○ 魅力的な大人とは？ ○ 働くとは？ (㊦ クイズ“自分の当たり前”それホント？ → 次時からの目標:視点を変えて考えよう)	【対比表(円形)】 【ランキング】
	2 (90 分)	<u>どんな未来になるといい？</u> ○ 世界が30人の村だったら・・・ ○ 15 年後(自分が親になった頃)、どんな未来になっているといいかな？	【ロールプレイ】 【 Y 軸 】
	3 (90 分)	<u>何のために働くの？</u> ①課題解決のため ○ 貧困の輪 → 課題解決のためにできること ㊦ネパールで活躍する人々の写真と貧困の輪のマッチング ㊦働く人の思い(動画)	【貧困の輪】 【マッチング】
	(4)	<u>②やりがい・好きなこと</u> ○ 好きの分解 → 調べ学習 (*担任実施)	【派生図(個人)】
	(5)	<u>③色々な人に話を聴こう</u> 地域の人(大工・美容師など)・スポーツ選手など (*担任が実施)	
	6 (45 分) (45 分)	<u>自分を見つめよう</u> ○ 強みカード + ジョハリの窓 ○ 仕事の分解	【強みカード】 【派生図 (グループ)】
	7 (45 分)	<u>振り返り</u> ～ 自分の幸せ・みんなの幸せ ～ ○ やりがいランキング ○ 自分の「幸せ」をカードから選択 → ・みんなの「幸せ」を考える。 ○ 振り返り→ どのように生きたいか(大切なこと・幸せなこと)を振り返る。 よりよい未来のために自分ができると考える。 ㊦写真	【ランキング】 【幸せカード】
成 果	多様な参加型の手法を用いることは、様々な視点から繰り返し児童の価値観形成に迫る上で有効であった。また、本研修の成果としては、自らの体験をもとに教材を作成できたことを挙げる。今後、児童が自らの変容を実感するためにどのような場面でどのような手法を用いると効果的なのか、研鑽を重ねたい。		
課 題	第3回では、訪問先のネパールにて出会った方々を題材に教材化したものを活用した。児童にとって情報量の多さが課題となった。内容の精選と情報の共有の仕方を再検討して、他の学級で実施した。絵と簡単な情報付きのカードを用いること、児童が自分のカードを班の人に読み伝えようと考える。		
備 考			

[授業実践の詳細]

2 回目「どんな未来になるといいかな？」

この時限のねらい

- ・世界共通の課題を知り、自分の生きる未来を考える。

1 子どもの活動の流れ

① 世界の人口と日本の高齢化を知る。

- ・クイズや資料の投影を通して世界の人口の変移を知る。
- ・世界と日本の人口を比較して、日本の現状を掴む。

② 世界には多様な言語が存在することを知る。

- ・世界の国の言葉で挨拶をしたり、クイズをしたりして多様な言語が存在することを実感する。
- ・ネパール語で書かれた指示やコップの中身の表示から文字が読めないことの不便さを体験する。

③ 大陸ごとの課題を知ろう。

- ・大陸ごとに分かれる。人口や栄養面からの気づきを促す。
- ・地球温暖化について考える。
- ・使い捨てプラスチックについて考える。

④ 世界共通の課題を知り、自分の生きる未来を考える

- ・『世界が100人の村だったら』を読み聞かせる。
- ・感想を共有し、課題を出し合う。
- ・自分の生きる未来を想像する。

【投影資料例】

☆ **日本**は今、高齢化？若年化？

役割カード	大人	床に座る
「2日本の場合の年齢」	子ども	立つ
のところを見てください	お年寄り	椅子に座る

先ほどの**世界**と比べてどう思いますか？

☆ 文字が読めないってどんなこと？

役割カード	6
「6」の横と6の下に書いてある「記号」や「文」をよ〜く見てください。	बस्नुहोस

5 つくられているもの2

ヨーロッパ	北アメリカ
アジア	南アメリカ
アフリカ	

先ほどの紙の量と比べてみましょう？

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「立つ」「座る」、輪の中に集まるなど、視覚的に児童に分かりやすい教材を活用することで、体感的に気づきを生みながら、現在の状況や課題全員で共有できた。
- ◇ スクリーンに指示を出すことは、児童が参加しやすい状況をつくることに有効であった。

3 使用した教材

<教材1> 『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら 第6版』2020年、開発教育協会(DEAR)

3 回目「何のために働くの？」①課題解決

この時限のねらい

- ・世界で課題解決のために活躍する人たちがいることを知り、自分が何のために働くのか考える。

1 子どもの活動の流れ

- ① 「貧困の輪」から、なぜ貧困が起こるのか考える。
 - ・SDGs1「貧困を無くそう」について、衣食住に関わるチラシをもとに1日約310円の暮らしについて考える。
 - ・「貧困の輪」を行う。
 - ・各グループの輪の順序やその理由を共有する。【ジグソー】
 - ・なぜ貧困が起こるのか考え、自分にとって大切だと思う箇所とその理由を共有する。

学校に 行けない	能力や技能が 身につかない
仕事 が見つからない	収入が 足りない
栄養が十分に 取れない	貧困
健康を損なう	働くことが できない

【貧困の輪 ネパール】

② 課題解決のために活動する人たちを知る。

- ・「貧困の輪」において、解決したいと思った部分について解決方法を考える。【派生図】

- ・配付された「ネパールで活躍する人を紹介するカード」についてグループの人に紹介する。
- ・「ネパールで活躍する人達を紹介するカード」が、貧困の輪のどこに関わるのか考え、マッチングさせたり、矢印で示したりする。

③ 自己の働き方のイメージについて再構築する。

- ・海外で活躍する日本人を知り、「今」時点の自分がどのような生き方・働き方をしたいか考える。



作成した「紹介カード」の例

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「貧困の輪」の共有の際にジグソー型を実施した。各グループから2人ずつ移動した学級より、時計回り・反時計回りそれぞれ1人ずつ移動し、残りは自分のグループで説明をする学級の方が相手の意見に集中する様子が見られた。
- ◇ マッチングを行うために各グループから「紹介カード」の内容に対する質問を積極的にする様子がみられた。一方で「外国で働く」ことは、子ども達の中にあまり備わっていない知識である。「紹介カード」の情報量は精選する必要があった。

3 使用した教材

<教材1> 『JICA 中部 教師海外研修ガイドブック』2020年、JICA 中部

6 回目「自分を見つめよう」

この時限のねらい

- ・自分が「意義を感じること」「したいこと」「大切にしたいこと」などを考えるために、自分の強みを見つめる。

1 子どもの活動の流れ

自分のつよみ

① 自分の強みを自己評価する。

- ・「強みリスト」を用いて、◎○△で自己評価をする。
- ・ベスト3を赤で囲む。

② 友達と強みを伝え合い、

- ・友達の強みを伝えあう。
- ・友達から伝えられた自分の強みの項目を「カード」「正」の字で記入する。

③ 自己評価・目標設定

- ・「ジョハリの窓」を参考に作成したワークシートに記入して、自分の強みの認識を高め大切にしたいことを考える。

自分のつよみの活かし方

① 仕事を分解する。

② 次の項目で想像を広め追記する。【派生図】

- ・その仕事があることで社会にどのように役に立つか。
- ・人々はどんな気持ちになるのか。

③ 委員会の仕事を具体化する。

④ 自分の役割と自分の強みと結びつけて考える。

自分の「強み」をキャリア・パスポートに追記する。

【記述例】

- ① ～が得意だから
- ② (どのように) (どんな仕事を) して、
- ③ 人 …… (みんなが) ～ の気持ちになってほしい。
場所 …… (が) ～ になってほしい。
こと …… (行事・委員会が) ～ になってほしい。

2 子どもの活動の成果・反応

◇「みんなに声を掛けるのが得意だから…」「整頓が好きだから…」など、自分の強みに言及する。

3 使用した教材

＜教材1＞元吉佑樹(2024)「児童のポジティブな自己理解を促すキャリア教育：「強み」の活用と児童認知の枠組みを広げる教師同士の対話を通して」、授業実践開発研究、17巻、pp.41-50

【24の「強み」リスト】

ここにある「強み」は、だれもがすべてもっています。自分は、どんな「強み」をばっきしているのかな？リストを見ながら考えてみましょう。

1. 思いやり 自分の思いやり、思いやりを伝えることが得意です。みんなの心を暖めます。	2. 誠実 自分の言動に責任を持ち、約束を守ります。みんなの信頼を勝ち取ります。	3. 人の気持ちをわかる 人の気持ちを察知し、適切な対応ができます。みんなの悩みを解決します。	4. 公平 人々の間では、どちらか一方に偏りなく、みんなの意見を尊重します。	5. リーダーシップ グループの目標を達成するために、みんなを引っ張ります。みんなの力を最大限に引き出します。	6. チームワーク チームの一員として、やる気を出し、みんなの力を最大限に引き出します。みんなの力を最大限に引き出します。
7. ゆるさず しつこく目標に向かって努力します。どんな困難でも乗り越えます。	8. 自分を管理する 自分の感情や行動をコントロールし、冷静に対処します。みんなの信頼を勝ち取ります。	9. しんちょう 自分の行動に責任を持ち、約束を守ります。みんなの信頼を勝ち取ります。	10. けんた よくできずとも、みんなの力を最大限に引き出します。みんなの力を最大限に引き出します。	11. こうき 自分の意見をしっかりと伝えることができます。みんなの意見を尊重します。	12. かわいさ みんなの心を暖めます。みんなの悩みを解決します。
13. 気持よく みんなの心を暖めます。みんなの悩みを解決します。	14. すぐで 自分の感情や行動をコントロールし、冷静に対処します。みんなの信頼を勝ち取ります。	15. そうさ 自分の行動に責任を持ち、約束を守ります。みんなの信頼を勝ち取ります。	16. ねん よくできずとも、みんなの力を最大限に引き出します。みんなの力を最大限に引き出します。	17. かん 自分の意見をしっかりと伝えることができます。みんなの意見を尊重します。	18. ねん よくできずとも、みんなの力を最大限に引き出します。みんなの力を最大限に引き出します。
19. 気持よく みんなの心を暖めます。みんなの悩みを解決します。	20. すぐで 自分の感情や行動をコントロールし、冷静に対処します。みんなの信頼を勝ち取ります。	21. そうさ 自分の行動に責任を持ち、約束を守ります。みんなの信頼を勝ち取ります。	22. ねん よくできずとも、みんなの力を最大限に引き出します。みんなの力を最大限に引き出します。	23. かん 自分の意見をしっかりと伝えることができます。みんなの意見を尊重します。	24. ねん よくできずとも、みんなの力を最大限に引き出します。みんなの力を最大限に引き出します。

「強みリスト」元吉(2024)

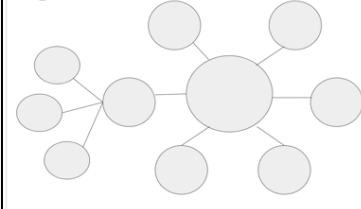
○ 2回以上言われた番号
2, 7, 16

◎ 自分も選んだ・友達も選んだ
22

☆ 自分は選ばなかった・友達は選んだ → 自分の知らない自分のよき
2, 7, 13, 16, 19, 24

♡ うれい
親切心 うつくしさを大切にしたい ありがとう
リーダーシップ 勇気
これから伸ばしたい
親切心

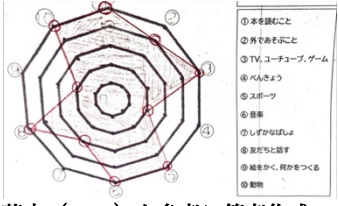
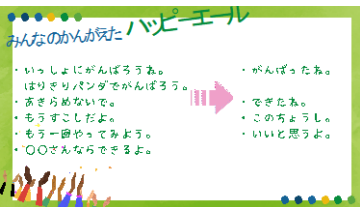
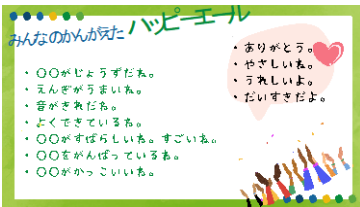
③ 人々はどのような気持ちになる？



[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

＜その他の実践その①＞

対 象	小学校 2 年生 (30 名)	実践日	2024 年 10 月～11 月
実践教科	道徳・学級活動	時間数	2 時間
実践内容	ねらい ・学級の友達と自分の考えの違いがあって良いことに気付き、自分らしさを表現する。 ・考え方や感じ方が違う友達と、どうすれば力を合わせて活動できるのかを考え、自分のできることを決める。 第1回 自分の形・みんなの形 (多様性) 1. ネパールのお札やカレンダー、韓国のお箸のおき方、イギリスの伝統衣装の写真などから日本との違いを見つけ、あっていい違いとその理由を考える。【フォトランゲージ】 2. 自分の好きなことを5点評価する。 3. 自分の形と友達の名を比べる。 4. 友達との比較から感じたことや気付いたことを共有する。 【資料】  荒木 (2021) を参考に筆者作成    【参考・引用文献】 荒木寿友 (2021)『対話する道徳をデザインする いちばんわかりやすい道徳の授業づくり』、明治図書出版		
	第2回 考え方や感じ方の違う友達と、力を合わせるためには…? (共生) 1. 「4つのコーナー」を行う。 2. 感想を共有する。→同じ場所でも違う理由、違う場所でも同じ理由がある。理由を聞くと「なるほど」と思う。 3. 伝え合う時に「嬉しい気持ちになる言葉」「嫌な気持ちになる言」を考える。【対比表(円形)】 4. 自分のめあてを決める。 【成果物】   【参考文献】 ・荒木寿友著『対話する道徳をデザインする いちばんわかりやすい道徳の授業づくり』2021 年、明治図書 ・重枝 一郎・柴田悦子著『Teacher's Teacher: 子どもが輝く風土づくりの実践と理論』2011 年、権歌書房		

＜その他の実践その②＞

対 象	小学校 6 年生 (30 名)	実践日	2025 年 2 月～ 実践中
実践教科	社会科	時間数	4 時間
実践内容	【東京書籍 社会6 政治・国際編】 ◇世界の中の日本 (1 / 1) ・地球上の人々の多様性や社会が抱える問題に気付き、どのようにして、世界の人々とともに生き、平和な社会を築いていけばよいのか、考えようとする。【派生図】 ◇日本とつながりの深い国々 (1 / 7) ・これまでの社会科の学習や日頃の生活を振り返り、日本と外国の共通点や相違点について理解する。【ネパールBOX】 (配当外) ・資料から多文化共生社会の様子を理解したり、調べようとしたりする。【ネパール版】 ◇世界の未来と日本の役割 (1 / 5) ・SDGs の内容と世界の課題や解決に向けた取り組みを調べ、予想や学習計画を立てる。 (4 / 5) ・様々な分野で技術者を海外に派遣したり、海外から働く人々を受け入れたりしていることを理解する。【現地で撮影した映像などの活用】 (生かす) ・SDGs の 17 の目標を参考に、今後、我が国が国際社会において果たすべき役割などを考え、「今、できること」「今後取り組めば解決につながることを実現可能性の視点をもって、選択・判断したりする。【ブレスト】		

＜周りへの波及活動＞

◇担任外という立場であるため、様々な学年における実践を考えることができた。実践クラスで事前に内容を検討したり、授業後に意見を交わしたりすることで、手法や教材についての関心を高めることで、周囲への波及に貢献できたと考えられる。特に、平成 29 年告示の小学校学習指導要領 特別の教科道徳において、低学年では「国際理解・国際親善」が加わり、中学年では独立した項目として取り扱われるようになった。担任とともに教材について検討をすることで学年に応じた「国際理解」について考えることができた。

2 実践の総括

- ◇ 参加型の手法を用いて実践を行なうことは、どの学年においても授業の後「楽しかった」と伝えに来る子との出会いに繋がった。また、ネパールボックスなど、実物が手元にある事は、児童が「に
おい」や「手触り」など、五感で海外と繋がっていく様子を見とることができた。教師の学びは、
児童にとっての豊かな学びとなることを実感できた。
- ◇ 一方で、流れがあるプログラムを作るには、小学校段階では、担任が総合的な学習の時間や各教科
と複合的に考えていくことがより効果的であると感じた実践であった。

3 次の実践者へのエール

- ◇ これから海外で働きたい人、教材作成に興味がある人に、教師海外研修の参加を強く勧めたい。
- ◇ これまで、JICA 中部の開発教育指導者研修（実践編）の受講を通して、国際理解教育への理解が
深め、参加型の手法などの授業への活かし方を考えることで、自分の授業と子どもの反応が変化す
ることを体感してきた。
- ◇ 教師海外研修の参加は、それに加え、教材作成としての写真の撮り方や、現地の人からの話の聞き
方などを学ぶ機会となった。厳選された視察場所で心が揺さぶられる体験をし、現地の人と対話を
通して様々なことを考え続けた濃厚な日々について、同じ場所に行った仲間と共有したり、経験豊
かな同行ファシリテーターや JICA のスタッフからアドバイスを頂いたりする中で、新たな視点をも
ったり、気づきが育まれたりした。そして、自分の現地の感動や思いが詰まった教材作成へと繋
がっていく。私たちが踏み出した一歩が、子供達の関心を高め、学びの実感に繋がる。
- ◇ 皆さんの新たな一歩を応援しています。

4 参考文献・資料

- 1) 『ワークショップ版 世界がもし 100 人の村だったら 第 6 版』 2020 年、開発教育協会（DEAR）
- 2) 『JICA 中部 教師海外研修 ガイドブック』 2020 年、JICA 中部
- 3) 元吉佑樹（2024）「児童のポジティブな自己理解を促すキャリア教育：「強み」の活用と児童認
知の枠組みを広げる教師同士の対話を通して」、授業実践開発研究、17 巻、pp. 41-50

以上

世界の架け橋プロジェクト ～共に生き、共に乗り越える～

所 属	静岡県沼津市立大岡中学校		実践者	長澤 佑亮
対 象	中学校2年生（126名）		実践日	2025年 1月～2月
実践教科	（言語読解・社会科地理的分野）		時間数	9時間＋α
テーマ	多文化共生 国際理解 地域の在り方			
ねらい	・ネパール人をはじめ外国人移住者のバックグラウンド(Push 要因)と日本の現状(Pull 要因)を理解した上で、多文化共生の実現に向けたまちづくりについて考える。 ・国際理解の重要性に気づきながら、私たちの暮らす地域の未来を想像し、深めていく。			
実践内容	回	プログラム		備 考
	1	「ネパールクイズ大会 ～ネパールってどんな国？～」 ・実際にネパールで感じた「！」「？」をクイズ形式で学ぶ。 ・ネパールについての概要を理解し、興味・関心を抱く。		【クイズ】 ・Kahoot! で実施 教材：マニ車、紙幣、硬貨、サリールなど
	2	「貿易ゲーム① ～世界のリアルを教室で体験しよう～」 ・貧富の差が生じる要因や国際協力の重要性について反省的に気付く。		【貿易ゲーム】 ミッション：①は「利益を出すこと」②は「平等な世界を築くこと」、どちらも同じグループ・設定で実施
	3	「貿易ゲーム② ～平等な世界は実現可能なのか？～」 ・平等な世界の実現可能性や実現に不可欠な要素、および実現を阻害する要因について理解する。 ・「平等」の価値観について考察する。（平等・公平・公正）		
	4	「Youは何しに日本へ？ ～スニールさんはなぜ日本にやってきた？～」 ・ミステリーを解きながら、スニールさんが日本にやってきたストーリーを作成する活動を通して、来日するネパール人のバックグラウンドに気付く。		【ミステリー】 教材：カード25枚、ヒントカード4枚
	5	「Youは日本をどう思う？ ～ネパールでのインタビューを通して～」 ・前時で作成したストーリーを読み合いながら、来日するネパール人のバックグラウンドを理解する。また、動画にて現地の声を視聴する。 ・現地でのインタビュー動画を視聴しながら、ネパール人が日本にどのような印象を持っているかを知る。（対比表）		ミッション：ネパールから日本にやってきたスニールさんのストーリーを作成しなさい。
	6	「多文化共生のまち 沼津へ」 ・増加する外国人移住者にとっても、私たちにとっても「暮らしやすい」まちを実現するための提案や主張の準備をする。		【プレゼンテーション】 ミッション：沼津を多文化共生のまちにするための取り組みを提案もしくは主張し、プレゼンしよう。
	7	・平等な世界の実現を視野に、移住者のバックグラウンドに配慮した多文化共生を実現できるような提案・主張づくりを意識する。		
	8	「多文化共生のまち・NUMAZU ～共に生き、共に乗り越える～」 ・各グループで作成した提案・主張を発表し、互いに評価・コメントする活動を通して、よりよい社会の実現について考える。		
	9	「多文化共生のまち・NUMAZU ～共に生き、共に乗り越える～」 ・各グループで作成した提案・主張を発表し、互いに評価・コメントする活動を通して、よりよい社会の実現について考える。		
	＋α	「ネパール特別展示会」 ・ネパールに関する展示に触れ、体験することでネパールをもっと知ってもらう		教材：ネパール BOX 昼休みに2日間実施
成 果	「日本にきた外国人移住者」という認識の向こう側にある「移住の理由」と「社会システム」について理解した上で、自分たちの住む地域の課題を見直し、よりよい社会のために必要なことを提言することができた。特に、ミステリーの活動は、ネパールの社会構造を俯瞰的に捉えることを促し、まちづくりの活動において国際理解および他者理解の視点を助長したと感じる。			
課 題	ミステリーを通して「仮想上での外国人移住者」との対話はできたものの、実際の外国人移住者やそれを希望する人、すなわち「本物」との出会いや対話は実現できなかった。よりよい社会の形成のためにも、地域の現状に対し切実性をもって考えることが重要である。これを課題とし今後も継続して実践に努めたい。			
備 考	当初、「貿易ゲーム」は構想になかったが、ネパールクイズを終えて「なぜ国が違うとこんなにも格差が生じるのだろうか」という生徒たちの声を聞き、急遽であるが実施した。			

[授業実践の詳細]

2-3 時限目「貿易ゲーム ～世界のリアル/平等な世界とは～」

この時限のねらい

- ・貿易ゲーム(1回目)を通して、貧富の差が生じる要因や国際協力の必要性について気付く。
- ・貿易ゲーム(2回目)を通して、平等な世界の実現に不可欠な要素や、「平等」に対する多様な価値観について考えを深める。

1 子どもの活動の流れ

① 前回の学習を振り返ろう！（2時間目）

- ・隣同士でペアを組み、お互いに前回の授業で学んだことを振り返り、共有する。

② 貿易ゲーム①「世界のリアルを教室で体験しよう！」（2時間目）

- ・4人～5人のグループを6つ作成し、代表者はA～Fの封筒（中にゲームで使用する道具が入っている）をひとつ選び、班に持ち帰る。「お金を稼いでください」というミッションが告げられ、ゲームを開始する。制限時間は25分。

③ リフレクション①（2時間目）

- ・稼いだ金額を全体で共有する。共有された結果が世界のリアルとして何を示しているのかについて意見共有を行う。

【ポップコーン方式】



貿易ゲームでの作業の様子

④ 貿易ゲーム②「平等な社会は実現可能なのか」（3時間目）

- ・前時と同じグループを作成し、同じ封筒（道具）が配布される。「平等な世界を実現してください」というミッションが告げられ、ゲームを開始する。制限時間は25分。

⑤ リフレクション②（3時間目）

- ・稼いだ金額を全体で共有する。共有された結果が平等な世界を実現できているのかについて、意見共有を行う。また、平等な世界の実現に必要な要素についても考える。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇1回目の貿易ゲームでは、先進国役のグループと発展途上国役のグループとで、最終の金額に大きな格差が生じる結果となった。「これが世界のリアルだよ」と教師が告げると、「途上国に支援をお願いされたけど断ってしまった」と反省的に振り返る子どもや、「途上国になると何もしようがない。」と無力感に打ちひしがれる子どもが多数見受けられた。世界にはなぜ格差が生じるのか、なぜ国際協力が必要であるのかについて、体験的に学ぶことができたと感じる。
- ◇2回目の貿易ゲームでは、前回の反省を踏まえながら、各グループ同士で協力する様子がみられた。何をもって「平等」と判断するのかを考え、試行錯誤しながらゲームを進行していた。結果に対して、「温かい支援の手があれば、平等な世界を築くことができるのではないかと、国際協力の根底にある考えに気付く子どもがいたり、「先進国ばかりが負担をしているから不平等なのでは」と、国際協力の難しさに直面する子どもがいたりするなど、国際協力の大切さと難しさの両面を体験的に学ぶことができたと感じる。

3 使用した教材

＜教材1＞貿易ゲームで使用する道具（鉛筆、はさみ、定規、コンパス、分度器、A4 用紙、クリップ大小）

4 時限目「Youは何しに日本へ？ ～スニールさんはなぜ日本にやってきた？～」

この時限のねらい

- ・ミステリーを解きながら、スニールさんが日本にやってきたストーリーを作成する活動を通して、来日するネパールの人のバックグラウンド(背景)に気付く。

1 子どもの活動の流れ

① 前回の学習を振り返ろう！

- ・隣同士でペアを組み、お互いに前回の授業で学んだことを振り返り、共有する。

② ミステリー 「スニールさんはなぜ日本にやってきたのか？」

- ・4人～5人のグループを作成し、ミステリーカード25枚とヒントカード4枚を受け取る。

カードをグループ化したり、関連付けたりしながら、「ネパールから日本にやってきたスニールさんのストーリー」を作成する。この際、関係構造図の作成にオンラインホワイトボードを使用する。【ミステリー】

- ・作成したストーリーは意見共有ツールにて他グループにも共有する。



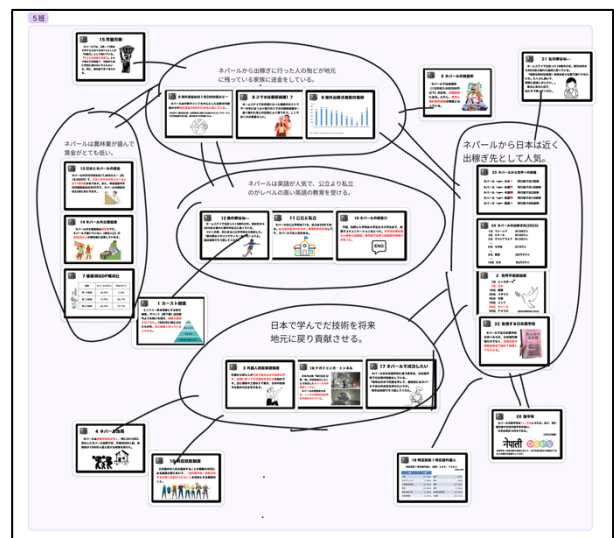
ミステリーの様子

③ リフレクション

- ・自分たちのグループが作成したストーリーをもう一度見直し、今日の活動で感じたことや考えたことをグループで共有する。



ミステリーカードの例



関係構造図の作成（ホワイトボードツール）

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「近年、日本にくるネパール人が増えている」という事実を提示すると、「なぜ日本にやってくるのか」という問いをもって活動に取り組んでいる姿が見られた。ミステリーに取り組む中で、「ネパールって〇〇があるんだね」というように、社会構造に気付く子どもや「日本には外国人などを

受け入れる制度がある」といったような日本の現状、さらにはそれらを関連づけながらネパールと日本のつながりについて考察する様子が見受けられた。

- ◇ 生徒が作成したストーリーには、どれもバックグラウンド (Push 要因) と日本の現状 (Pull 要因) が含まれており、ミステリーを通して現代社会を俯瞰することで、構造的に社会を捉えることができたのではないかと評価できる。

3 使用した教材

＜教材2＞ネパールのミステリー(カード 24 枚・ヒントカード 4 枚)

＜教材3＞オンラインホワイトボード(「Figjam」を利用)

＜教材4＞在留ネパール人の推移

5 時限目「You は日本をどう思う? ～ネパールでのインタビューを通して～」

この時限のねらい

- ・全グループのストーリーを読み合う活動やインタビュー動画の視聴を通して、来日するネパール人のバックグラウンドへの共通認識を図る。
- ・インタビュー動画の視聴を通して、ネパール人が日本に対してどのような印象を持っているのかを知る。

1 子どもの活動の流れ

① 前回の学習を振り返ろう！

- ・隣同士でペアを組み、お互いに前回の授業で学んだことを振り返り、共有する。

② みんなが作成したストーリーを分析しよう！

- ・6グループ×4クラス、計24つのストーリーを読み、各ストーリーの共通点や相違点、自分たちにはなかった気付きなどをワークシートにまとめていく。その後、分析の結果をクラスで共有し、ネパール人のバックグラウンドに対する共通認識を図る。【ポップコーン方式】

生徒が作成したストーリーの例

僕は技術を学びたくて日本に来ました。日本には外国人技術実習制度があり、前にネパールで日本の企業による技術協力があり、そのおかげで初めての高速トンネルができました。その話を聞いたときに自分もネパールの役に立ちたい、力になりたいと思いました。ネパールには日本語学校があり、僕はネパールでその学校に通うことで日本語を習得することができ、専門の学校に通いながら、お金をためています。将来は日本で勉強した技術を使い、ネパールで力になりたいです。僕には兄弟もいます。兄弟には私立の高校に通わせたいとも思っています。そのためには大金が必要です。家族に迷惑をかけないためにも、自分が家族の力になりたいです。

③ 日本から見たネパール/ネパールから見た日本「インタビュー動画を通して」

- ・これまでの学習を振り返ってみて、改めてネパールとはどんな国であるのか、ワークシートにできるだけ書き込んでみる。そのあと、クラスで共有する。【対比表】
- ・ネパールで撮影したインタビュー動画(①JICA 海外協力隊の榎本さんによるネパールのリアル/②日本への就職を目指すネパール人に対して日本のイメージ or あなたの夢に関するインタビュー)を視聴し、ネパール人のバックグラウンドについての確認や、ネパールから見た日本のイメージについて把握し、ワークシートにまとめる。【対比表】

- ・視聴後、それぞれのイメージに対してポジティブな意見には赤、ネガティブな意見には青の下線を引き、その結果をペアで確認する。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ストーリーを読み合う活動では、自分たちが作成したストーリーとの共通点に対しては「やっぱりそうだよね」、相違点に対しては「なるほど、確かにそういったパターンもあるな」と反応しており、他者の作成したストーリーからも多くの気づきがあったと感じた。ミステリーの活動およびそのリフレクションを通して、日本に来たネパール人の背景がよりはっきりと捉えられるようになったと感じる。
- ◇ インタビュー動画の視聴では、ミステリーで作成したストーリーと同じような背景をもつネパールの現状を知り、自分たちが作成したストーリーが、実際の「声」として語られている様子に、うなずく子どもも多く見受けられた。
- ◇ お互いの国のイメージを対比する活動では、日本から見たネパールにはネガティブな意見が多いのに対し、ネパールから見た日本にはポジティブな意見が多いという結果になった。ネパールが日本に対して好感をもってくれている喜びや嬉しさと同時に、対して自分たちは偏見やネガティブな印象からイメージをしてしまっていると反省する子どもも多く見受けられた。

3 使用した教材

＜教材5＞ミステリーで作成したストーリー集

＜教材6＞ネパールでのインタビュー動画

6-9 時限目「多文化共生のまち・NUMAZU ～共に生き、共に乗り越える～」

この時限のねらい

- ・これまでの学習における学びを大切にしながら、多文化共生のまちが実現できるような提案や主張をプレゼンテーションする。
- ・国際理解の重要性に気づきながら、私たちの暮らす地域の未来を想像し、深めていく。

1 子どもの活動の流れ

① 前回の学習を振り返ろう！（6時間目）

- ・隣同士でペアを組み、お互いに前回の授業で学んだことを振り返り、共有する。

② 多文化共生のまちに向けた取り組みを調べよう！（6時間目）

- ・4人～5人のグループを作成し、多文化共生に向けたまちの取り組みについて調べる。その際に、「沼津市の取り組み」と「沼津市以外での取り組み」に分け、分担して調べ学習を行う。

③ 多文化共生のまちづくりに向けた提案 or 主張を考え、まとめよう！（7～8時間目）

- ・それぞれ調べた内容をグループ内で共有し、以下のいずれかの視点で発表の準備をする。

A：沼津市以外で行われている取り組みを参考に、多文化共生に向けたまちづくりを提案する

B：自分たちで考えた、新しい取り組みと多文化共生に向けたまちづくりを提案する。

C：沼津市が現在取り組んでいる多文化共生に向けたまちづくりについて主張する。

④ 各グループで作成した主張・提案を発表しよう！（9時間目）

- ・各グループで順にプレゼンする。その際、傍聴側はプレゼンの内容を聞いて、多文化共生のウェビングマップを広げる。プレゼン後、代表のグループからその場でコメントや質問を行う。

⑤ 全体リフレクション（9時間目）

- ・全グループのプレゼンを聞いて、グループで感想や意見を共有する。その後、これまでの学習を振り返りながら、振り返りシートに学んだことやこれからの決意を記入する。

2 子どもの活動の成果・反応

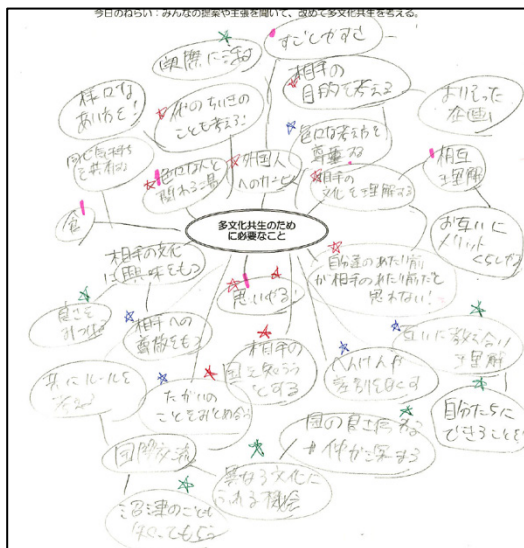
- ◇ 自分たちが住んでいるまちを改めて見直していく中で、「多文化共生のためにこんな取り組みをしていたなんて知らなかった」といった気付きや、「沼津市って外国人移住者が増えている割に多文化共生に向けた取り組みは少なく感じる」など、課題を見出す子どもの様子も見受けられた。特に、課題意識をもった子どもについては、「私たちのまちをもっと良くしたい」という思いのもと、これまでの学習で取り扱った移住者のバックグラウンドに焦点を当て、多面的・多角的に取り組みの提案や主張を構想している姿が印象的であった。
- ◇ プレゼンテーションでは、スライドを用いて視覚的にも分かりやすく、工夫して発表している子供の姿が印象的であった。提案や主張の根拠を、自身の感覚ではなく、今までの学習の学びや統計データなどを提示して行なっていたため、内容としても説得力のある発表であり、この実践を通じた成長を感じることができた。



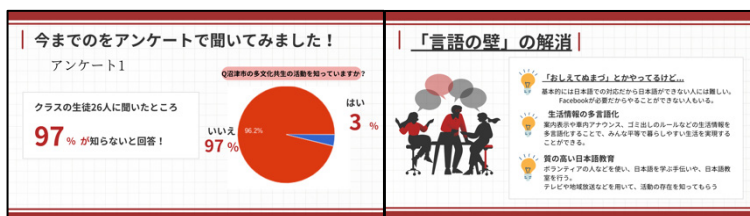
プレゼンテーションの様子



提案例①「逆ホームステイ」



多文化共生に向けたウェビングマップ



提案例②「言語の壁」解消



提案例③「マズマーズマート」



提案例④「国際的な防災訓練」

3 使用した教材

<教材7>プレゼンテーションツール(Google スライド・Canva)

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践その①>

対 象	中学校育成学級 1 ～ 3 年生（10 名）	実践日	2024 年 11 月～12 月
実践教科	（社会科地理的分野）	時間数	2 時間
実践内容	◇所属する学校の育成学級を対象に、社会科の時間において2時間ほど実践を行った。最初の1時間は「ネパールを肯定的に捉えよう」をテーマに、ネパールについての概要をクイズ形式で学習した。授業後、ネパールって面白い国だねといった声が挙がるなど、ネパールを肯定的に捉えた子どもの姿が見受けられた。2時間目は、ネパール BOX の中身を広げながら、「これはなに？どんな使い方をするの？」といった問いを投げかけながら、授業を進行した。育成学級の子どもたちは、現物教材への興味関心が比較的高い傾向にあるため、普段は授業で発言しないような子供も、現物を手に取るとみんなと一緒に使って使い方について考えている様子が見られた。最後に、「ネパールに行ってみたい人？」と発問すると、大半が「行ってみたい！」と元気よく返事をしてくれた。		

<その他の実践その②>

対 象	中学校 2 年生（126 名）	実践日	2025 年 1 月
実践教科	（昼休み）	時間数	20分×2日間
実践内容	◇授業とは別に、昼休みの時間を活用し「ネパール特別展示会」と題した展示会を行った。会議室を貸し切り、ネパール BOX が届いたタイミングで実践した（主実践の貿易ゲームが終了したタイミング）。約30種類以上の展示品を実際に触ったり、匂いを嗅いでみたりするなど、「本物と出会える」時間を楽しそうに過ごしている様子が印象的であった。ネパールクイズが終わったタイミングであったため、「これクイズに出ていたやつだ！」と、主実践の内容を振り返る子供も見受けられた。鑑賞後、最も印象に残った展示品をアンケートしたが、一番多く票を集めたのは「イエティのぬいぐるみ」という結果になった。		

<周りへの波及活動>

- ◇ 夏休み明けの職員会議の後に、「海外研修報告」と題して職員（約30名）に対し報告会を行った。現地での様子に加え、「教室にいる外国にルーツのある生徒から見える景色」をテーマに、国際理解の重要性を訴えた。
- ◇ 大学の講師として招致された授業にて、JICA 教師海外研修に行き感じたことや学んだことを講義の中で紹介した。授業後、学生から「教員になってもこういった機会があるのを知れてよかった。」とコメントをいただいた。こうして国際理解教育の輪が広がってくれば何よりである。

New Encounter : Promoting Acceptance & Learning

所 属	愛知県立豊田南高校	実践者	中島 浩平
対 象	高校2年生 (39名)	実践日	2024年11月～12月
実践教科	英語コミュニケーションⅡ	時間数	6時間
テーマ	人権・共生・コミュニケーション		
ねらい	- 日本とネパールの同一性に気づく、そしてつながりを理解する。 - 見えていなかった社会の現実気づき、自分たちができることを実際に考え、実行できる生徒を育てる。		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1	<u>Exploring the Self (自らを知る)</u> ① 【アイスブレイク】あなたはどっち？を使用し、クラス内の多様性に気付く。 ② 4人グループにネパールについて書かれた情報カード10枚を正誤に分類する(情報は全て誤り)。その決定は何によって行われたかを分析する。 ③ ネパール研修で撮影した4枚の写真をペアに提示し、1枚選び、自由にストーリーを作成する。 ④ 振り返りとして自分の考えが肯定的か否定的かに気付く。	【アクティビティ参考】 「参加型アクティビティ集」(NIED・国際理解センター) 情報カード・写真集 (実施者作成)
	2	<u>Recognizing the State of Our Society (見えていないものに気付く)</u> ① 日本で働くネパールの人たちに書かれた記事(Worksheet I)を読み、感想を書く(宿題実施)。感想をグループでディスカッションする。 ② 負のサイクルカードを使い、グループで正しい順番に並び変える。	Worksheet I 負のサイクルカード (実施者作成)
	3	<u>Preparing for the Online Session (オンライン文化交流準備)</u> ① 日本で働く海外出身者の数をランキング形式にした Worksheet II を使い、グループでディスカッションする。その後、答え合わせ。17万人もネパール人が勤務していることに気付く。 ② ネパール BOX を使用し、興味をもった文化教材を英語で紹介できるように準備する。相手の文化について、五感を使って具体的に理解するのがねらい。	ネパール BOX (JICA) Worksheet II (実施者作成)
	4	<u>Online Cultural Exchange Session (オンライン文化交流本番)</u> ① ペアになって相手校 (Vishwa Adharsha Secondary School) の生徒とそれぞれ割り当てられた Breakout Room 内で2対2の構成で交流を行う。	各自のタブレット PC
	5	<u>Drafting Your Action Plan (アクションプランの作成)</u> ① Worksheet III を使い、日本に住む外国人住民が直面する問題 (Language Barrier/Miscommunication/Workplace Isolation/Homesickness/Lack of Social Support/Financial Stress/Long Working Hours/Health Issues) において、グループで1つの問題に焦点を絞る。 ② Worksheet III に記載されているアクションプランフォーマットを参考に、模造紙に問題に対するアクション&効果、さらにはグループの思いを記載する。	Worksheet III (実施者作成) A1模造紙&筆記用具
	6	<u>Group Presentation (アクションプランの共有)</u> ① 5の継続を行う。他グループのアクションも参考にする。 ② 全グループが完成したことを確認し、2分間隔のポスターセッションを行い、アクションプランの共有を行う。	
成 果	多くの生徒が積極的に取り組み、異文化理解、多文化共生のための意識を高めることができた。ネパール BOX は非常に好評で、高校生の好奇心を刺激してくれた。また、英語の授業で実施したため、教材作成には時間がかかったが、その分生徒は集中して英文を読み込み、多くのことを学んでくれた。		
課 題	実際に現地の高校生たちと交流はできたものの、日本在住のネパール人の方などの生の声を聴く機会を設定することができなかったため、3学期に実施したいと思う。生徒の五感をさらに刺激したい。		
備 考			

[授業実践の詳細]

1 時間目 Exploring the Self (自らを知る)

この時限のねらい

クラス内の多様性に気づき、ネパールに対する先入観や自分の考え方を見直す。

1 生徒の活動の流れ

- ① 【アイスブレイク】「あなたはどっち？」を使用し、クラス内の多様性に気付く。
- ② 4人班でネパールに関する情報カード10枚を正誤に分類し、その判断基準を分析する。
- ③ ネパール研修で撮影した写真4枚から1枚選び、自由に作成する。
- ④ 振り返りで自分の考え方が肯定的か否定的かを確認する。



2 生徒の活動の成果・反応

- ◇ 多様性への気づきが深まり、ネパールに対する興味と理解が広がった。

3 使用した教材・機器

情報カード、ネパールの写真集

2 時間目 Recognizing the State of Our Society (見えていないものに気付く)

この時限のねらい

社会の見えない部分や日本で働く外国人の現状に気づく。

1 生徒の活動の流れ

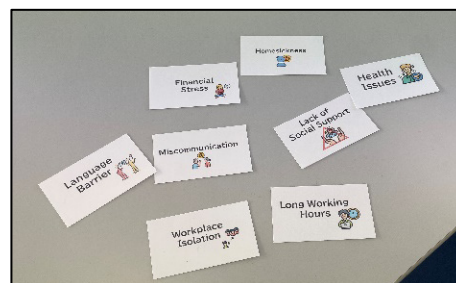
- ① 日本で働くネパール人の記事 (Worksheet I) を読み、討論する。[生徒感想は別紙]
- ② 負のサイクルカードをグループで正しい順番に並び替える。

2 生徒の活動の成果・反応

- ◇ 外国人労働者の課題に対する理解が深まり、共感の意識が高まった。

3 使用した教材・機器

Worksheet I、負のサイクルカード



3 時間目 Preparing for the Online Session (オンライン文化交流準備)

この時限のねらい

ネパール文化の理解を深め、効果的な交流準備を行う。

1 生徒の活動の流れ

- ① 日本で働く外国人の数をランキング形式でディスカッションし、ネパール人労働者の多さに気づく。
- ② ネパール BOX を活用し、文化教材を英語で紹介できるように準備する。

2 生徒の活動の成果・反応

- ◇ 異文化理解が深まり、交流への意欲が高まった。ネパール BOX、Worksheet II

3 使用した教材・機器

ネパール BOX、Worksheet II

4 時間目 Online Cultural Exchange Session（オンライン文化交流本番）**この時限のねらい**

実際にネパールの学生と交流し、異文化理解と英語でのコミュニケーション能力を高める。

1 生徒の活動の流れ

- ① ペアになり、Breakout Room で 2 対 2 の交流を行う。

2 生徒の活動の成果・反応

- ◇ リアルな異文化交流を通じて自信を深め、異文化への関心が高まった。

3 使用した教材・機器

タブレット PC、Zoom

**5 時間目 Drafting Your Action Plan（アクションプランの作成）****この時限のねらい**

外国人住民が直面する課題について考え、具体的な解決策を考案する。

1 生徒の活動の流れ

- ① Worksheet III を使用して、外国人住民の課題に焦点を当てる。
- ② 模造紙にアクションプランを作成する。

2 生徒の活動の成果・反応

- ◇ 課題解決に向けた具体的なアイデアを出し合い、協働する姿勢が育まれた。

3 使用した教材・機器

Worksheet III、模造紙、筆記用具

6 時間目 Group Presentation (アクションプランの共有)

この時限のねらい

自分たちの考えたアクションプランを発表し、他グループの意見から新たな視点を得る。

1 生徒の活動の流れ

- ① 自分たちの考えたアクションプランを発表し、他グループの意見から新たな視点を得る。
- ② ポスターセッション形式で意見交換を行う。

2 生徒の活動の成果・反応

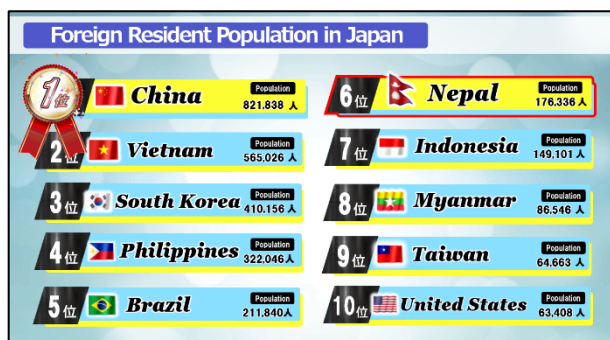
- ◇ プレゼンテーションを通じて自信を持ち、他者の意見から新しい視点を得た。

3 使用した教材・機器

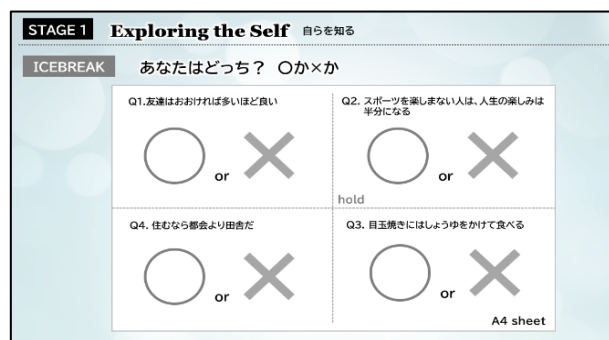
模造紙、ポスター、筆記用具

全体を通して

1 授業の様子



授業で使った PowerPoint スライドの一部



授業で使った PowerPoint スライドの一部

2 生徒の感想（2時間目に使用した記事に対する感想）

Q. Please refer to the article above and share your thoughts and feelings.

I used to think that there was not much relationship between Nepalese and Japan. But I was surprised at the Japanese economy has become thanks to Nepalese workers. I think that the problems that Nepalese workers face need to be solved and it is better to think of ways to improve quickly.

Q. Please refer to the article above and share your thoughts and feelings.

I had no idea about this situation and the country of Nepal itself. So, I was surprised to learn how important Nepalese workers are to Japan's economy. I learned about foreign workers who are doing well in Japan and wanted to do something to help.

Q. Please refer to the article above and share your thoughts and feelings.

We should solve these problem as soon as possible. Nepalese workers working time is long. this fact may be connect to workers bad health. I think Japanese government should make law for foreign workers.

Q. Please refer to the article above and share your thoughts and feelings.

I understood about Nepalese workers play an essential role because they have elements to be strengthen the bond between Japan and Nepal. But it has also any negative parts, so it should improve that problem.

Q. Please refer to the article above and share your thoughts and feelings.

I knew that Japan's declining birthrate and aging population had reduced the number of Japanese workers and that the country was relying on labor from abroad. However, I didn't know what role they played in Japan. I would like to thank them for their support of Japan.

3 使用したワークシート

[Worksheet I]

Material type: Article		STAGE 2
Nepalese Workers in Japan: Their Role and Challenges		
<i>December 4, 2024</i> <i>Written by Kohei Nakashima</i> Nepalese workers play an essential role in supporting Japan's labor market. Due to its aging population, Japan faces a shortage of workers, and many businesses depend on foreign workers. Nepalese people are among the key contributors, working in various industries such as factories, restaurants, construction, and caregiving. In factories, they help produce goods like food and electronics. In restaurants, many Nepalese workers prepare meals or serve customers. They also assist in construction projects, building homes, roads, and offices. In caregiving roles, they provide support to Japan's elderly population. Their hard work ensures these industries continue to function effectively. However, working in Japan comes with challenges. One major issue is the language barrier. Many Nepalese workers arrive with limited Japanese skills, making communication difficult. To overcome this, they often attend language classes or learn Japanese through daily interactions. Another challenge is the long working hours that are common in Japanese workplaces. Nepalese workers are known for their resilience and determination, which helps them adapt to the demanding environment. Cultural differences can also be a challenge. Japan has strict rules and expectations, especially in professional settings. Nepalese workers often show great respect and patience in adapting to these new cultural norms. Many also experience homesickness as they are far from their families. To cope, they form close communities with other Nepalese workers for support. Despite these challenges, Nepalese workers are making a significant impact. They not only support Japan's economy but also bring cultural diversity to Japanese society. Their hard work and positive attitudes strengthen the bond between the two nations. Nepalese workers in Japan are a symbol of dedication and perseverance, showing how people from different cultures can contribute to and enrich each other's communities. (284 words)	labor market 労働市場 shortage of ~ 不足 key contributor 主要な貢献者 caregiving 介護 ensure ~ を可能にする overcome ~ を克服する resilience 粘り強さ determination 決意 adapt to ~ に適応する demanding environment 過酷な環境 patience 我慢 cultural norm 文化的規範 form ~ を形成する strengthen the bond 絆を深める (強める) dedication 献身 perseverance 忍耐	
<i>Q. Please refer to the article above and share your thoughts and feelings.</i>		

[Worksheet II]

Material type: Article & Interview sheet

STAGE 3

Q: Refer to the data below, and choose a country from the word bank below to arrange the chart in the correct order.

Foreign Resident Population in Japan				
	Country	Population	Your Answer	Correct Order
1	?	821,838		
2	?	565,026		
3	South Korea	410,156		
4	?	322,046		
5	?	211,840		
6	?	176,336		
7	Indonesia	149,101		
8	?	86,546		
9	Taiwan	64,663		
10	?	63,408		

Resource: Immigration Services Agency of Japan. (2023, December 31). Number of foreign residents in Japan. Ministry of Justice.

Word Bank

Nepal / United States / Brazil / Myanmar / Vietnam / Philippines / China

Nepal Through Your Senses: NEPAL BOX

TASK: Introduce one item from the box in the next online session

A Thing you and your partner will introduce []

Example expression:

We are happy to share what we learned about Nepalese culture. The first item we have is called...

[Vocabulary]

refer to (～を参照する)
below (下, 下方)
order (順番)

Immigration Service Agency
(出入国在留管理庁)

word bank (語群)

Online Session
Date & Time :December 10th ,11:55-12:45)
Partner School: Vishwa Adharsha Secondary School (NEPAL)

Session Theme:
Building Bridges Between Nepal and Japan: Our Connections and Impressions

Detailed Explanation:
This session is about exploring the connections between Nepal and Japan. Even though our countries are different in many ways, we share meaningful ties through culture, people, and experiences.

Why This Theme Matters:
This session helps us to build friendships, understand cultural differences, and celebrate what makes Nepal and Japan unique. It's a chance to learn directly from students in another country and share our thoughts openly.

Question idea

Initial Question:
Q. Japan is known for its unique mix of modern technology and traditional culture. From anime to temples, there's so much to explore. What's your favorite thing about Japan?

Follow-Up Questions:
Q. "What do you find most interesting about that? Have you seen something similar in Nepal?"
Q. "What's the first thing you'd want to see or learn about Japan if you visited?"

Initial Question:
Q. Japanese anime like Naruto, One Piece, and Studio Ghibli movies are loved by many people around the world. Have you watched any Japanese anime or movies? Which one is your favorite?

Follow-Up Questions:
Q. "What do you like about that anime or movie? Is there a character you relate to?"
Q. "What anime or movie are you most interested in watching?"

Initial Question:
Q. Japan has so many amazing places to visit, from the busy streets of Tokyo to the peaceful temples in Kyoto, and the beautiful Mt. Fuji. If you could visit Japan, where would you like to go? Why?

Follow-Up Questions:
Q. "What interests you the most about that place? Have you read or seen anything about it?"
Q. "Would you like to visit a modern city like Tokyo or a historical place like Kyoto?"
Q. "Is there a place in Nepal that you think Japanese tourists would enjoy visiting?"

[Vocabulary]

build bridges
(架け橋を作る)

explore (～を探る)
meaningful (重要な)
tie (関係, 結びつき)
celebrate (～を祝う)
openly (素直に)

Ghibli (ジブリ作品)

relate to (～に関係する)

busy street
(賑やかな通り)

modern city
(近代的な)

[Worksheet III - 1]

Today's Task: Making Your Action Plan for these Challenges

(日本に住む外国人住民が直面する課題を解決させるための行動プランを作成する)

※模造紙の構成(縦方向で使ってね)

カテゴリー (どんな困難へのアクション?)	(		)	Group Member	(		)
行動プラン名 (							)
アクション① [							]
▼							
①に期待される効果							
▼							
アクション② ②に期待される効果 なぜ①②が必要? グループの思い ①②で結果が出なかった時の 心構えと次への思い							

[Worksheet III-2]

Material type: Case Study Sheet

Challenges Faced by Foreign Residents in Japan

STAGE 4

Language Barrier

[Key Vocabulary]

1	役所や病院、学校などの公共機関で多言語対応が不十分。 (例: 書類が日本語のみ、窓口での対応に通訳がない。)	Public institutions like city offices, hospitals, and schools often lack multilingual support. (e.g., forms are only in Japanese, and there are no interpreters at help desks.)	multilingual (多言語) forms (書類) interpreter (通訳) instruction (指示)
2	職場での指示がすべて日本語で行われ、理解が難しい。 (例: 作業マニュアルが日本語のみで提供される。)	Workplace instructions are only given in Japanese, making them hard to follow. (e.g., operation manuals are not translated into other languages.)	limiting (限られた)
3	日本語能力試験(JLPT)が採用条件になっており、外国人が就職先を見つけるのが困難。	Passing Japanese Language Proficiency Tests (JLPT) is often required for employment, limiting job opportunities for foreigners.	leave (ある状態にする) region (地域)
4	日本語学校が都市部に集中しており、地方では学ぶ機会が少ない。	Japanese language schools are concentrated in urban areas, leaving fewer learning options in rural regions .	

Miscommunication

1	職場での文化の違いが原因で誤解が生じる。 (例: 「空気を讀む」文化が理解されず、意図せず失礼とされる発言をしまう。)	Cultural differences in the workplace can lead to misunderstandings. (e.g., not understanding the concept of "reading the air" can unintentionally offend others.)	lead to ~(-)に導く unintentionally (意図せず)
2	日本人と外国人労働者の間で指示の伝達が不明確。 (例: 「暗黙の了解」が通じないため、作業の優先順位を誤る。)	Communication between Japanese workers and foreign employees is often unclear. (e.g., " implicit understanding " common in Japanese workplaces may not be recognized by foreigners.)	implicit understanding (暗黙の了解)
3	学校や地域で外国人住民が自分の考えを十分に伝えられず、誤解や孤立が生じる。 (例: PTA 活動や地域イベントでの言語的な障壁。)	Foreign residents struggle to express their thoughts clearly in schools or communities, leading to isolation . (e.g., difficulties in participating in PTA meetings or local events.)	struggle to ~(-)することに苦む isolation (孤立)

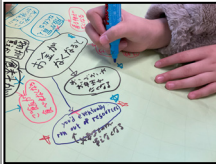
Workplace Isolation

1	外国人労働者が「外部者」として扱われ、日本人同僚との交流が少ない。(例: 休憩時間に日本人同士で話込むが、外国人労働者は会話に加われない。)	Foreign workers are often treated as "outsiders" and have limited interactions with Japanese colleagues . (e.g., Japanese coworkers talk only among themselves during breaks, excluding foreigners.)	limited interactions (限られた交流) colleague (同僚)
2	職場での外国人労働者向けの研修やメンター制度が不足している。(例: 新しい職場で適応するための支援がない。)	There is a lack of training or mentorship programs tailored for foreign workers. (e.g., new foreign employees receive minimal support in adapting to the workplace.)	mentorship (メンターシップ、指導者) minimal support (最小のサポート)
3	職場外でも孤立しやすい環境。 (例: 近隣住民や同僚との交流がほとんどない。)	Even outside of work, foreign workers often feel socially isolated. (e.g., they have little interaction with neighbors or coworkers outside work hours.)	

Homesickness

1	母国の家族や友人と離れている孤独感が強まる。 (例: 長期母国に帰れず、家族の生活状況が不明で心配。)	Being away from family and friends in their home country creates strong feelings of loneliness. (e.g., being unable to visit family for years causes emotional distress.)	discomfort (不快感) ingredient (食材)
2	母国の食文化や習慣が日本で手に入らず、精神的なストレスになる。(例: 母国の食材が手に入らず、日常生活に馴染めない。)	A lack of access to familiar foods or cultural practices adds to their discomfort . (e.g., essential ingredients for traditional dishes are hard to find in Japan.)	disconnected (切り離される)
3	母国語を話す機会が少なく、アイデンティティの喪失感を覚える。 (例: 日本語に対応しなければならない環境が続き、自分の文化から切り離されたと感じる。)	Limited opportunities to speak their native language make them feel disconnected from their cultural identity. (e.g., environments where only Japanese is spoken create stress.)	

ネパールから世界を知る

所 属	愛知県津島市立西小学校	実践者	道野 大和
対 象	小学校5年生（71名）	実践日	2024年 9月～12月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	12時間
テーマ	国際理解・人権・貧困・豊かさ		
ねらい	・ネパールの素晴らしさに気づき、世界に目を向ける。 ・外国とのつながりを感じ、世界について考え、よりよい未来の作り手となる気持ちを高める。		
実践内容	回	プログラム	備 考
	1	◆全校朝礼でネパール研修報告 ネパールクイズ・日本と感じたつながり	全校朝礼で使用したスライド 
	2・3	◆ネパール料理「モモ作り」	資料: JICAつながる世界と日本（モノ編とごはん編）
	4・5	◆なぜ、国際理解が大切なのか・・・？ ①海外に頼っているものは何？ ②もしも海外とのつながりがなくなったら・・・【派生図】【回し読み】	6時間目に使用したスライド 
	6	◆わたしの夢、あなたの夢 ・自分の夢・友達の夢 ビンゴゲーム ・ネパールの子の夢は何だろう？	ネパールの子どもの夢の写真 
	7	◆私の国の誇り ・ネパールの誇りと残念 ・日本の誇りと残念は何だろう？	「貧困」 お金がないと起こることの派生図 
	8	◆人権週間から考える ・人権というか・・・人間って何だ！？ ・私・私たち・みんなに必要なもの	
	9	◆人権問題「貧困」 ・お金がないと起こること	
	10	◆豊かさとは・・・？ ・本当の豊かさとは何だろう？	
	(11)	※出張授業 ネパールから人類共通の課題を考える	
	(12)	◆サプライズ「八神先生プレゼンツ～チェコからこんにちは～」 ・日本とチェコの違い・チェコ道徳～チェコ野球と全盲の大学生～	
成 果	全校にネパール研修についての報告を行うと、子どもたちの反応だけでなく、保護者からの反応が得られた。また、ほかの世界はどうなっているのだろうか？と自分の中の興味を広げていく姿が見られた。		
課 題	ねらいに迫るために、子どもたちの知識と授業案に差があったことがあった。それを改善するためにインプットする時間を設けたり、発問を絞ったりする必要性を感じた。調べてみると素敵な実践が多くあるが、目の前の子どもたちに合わせ、微調整する力を高めていきたい。		
備 考			

[授業実践の詳細]

1 時限目「ネパール研修報告～全校集会で～」

この時限のねらい

- ・クイズやスライドを通して、ネパールに肯定的に出会う。・日本とネパールのつながりに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① ネパールクイズ

- ・ネパールはどこにある？人口は？ネパールの世界一は何？クイズを通して、ネパールという国に興味をもつ。

② 日本との違い、こんなところに驚いた！

- ・ネパールには〇〇がない！？交通事情の違い。洗濯、ご飯、食べ方、道具が日本と違うことを知る。

③ 日本とのつながり

- ・ネパールで「日本」を発見しました！アニメや企業、学校とのつながりを知る。

④ ネパール語でつながろう！

- ・これってネパール語で何て言うの？簡単な挨拶を知ることで、日本在住のネパールの方々とつながろうとする気持ちを高めさせる。



〈ネパールクイズのスライドの一部〉



〈ネパール報告会の様子〉

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 本学年では、毎日学年通信を発行している。保護者の方から通信への感想をフォームで募集している。全校に向けて行ったネパール報告会の後、複数の保護者から反応があった。そのうちのひとつを紹介する。
- ◇ 「朝礼でされた教師海外研修の報告会のお話を子どもたちから聞きました。2年生の弟も先生から聞いた話を楽しそうに教えてくださいました。普段はゲームやYOUTUBEで頭がいっぱいな息子ですが、こんな風に海外のことに興味をもってくれるなんてびっくりしました。
ちょうどその時期にネパールの洪水のニュースを見た息子は、大丈夫かな？先生が行ったところの近くかな？と言っていて、普段はこういったニュースを見ても自分とは関係ないという感じでしたが、先生の報告会で関心をもつきっかけが出来たと思います。ありがとうございます。」
- ◇ 全校で行った報告会は、時間にすると20分程度であった。しかし、こうした反響があったのは予想外であった。とても嬉しかった。海外に興味をもつことは、ほんのきっかけに過ぎないかもしれない。しかし、とても価値のある一歩目となるのではないかと大きな可能性を感じた報告会となった。

3 使用した教材

＜教材1＞ネパールで撮影した写真

2-3 時限目「ネパール料理モモを作ろう！」

この時限のねらい

- ・ネパールの料理を作り、味わうことでネパールを身近に感じる。
- ・ネパールと日本の料理の違いについて考えることで、それぞれの国の理解を深める。

1 子どもの活動の流れ

- ① アイスブレイク「私のベスト3」
 - ・お題「好きな食べ物」「好きなデザート」
- ② ネパール料理について知ろう。
 - ・現地で撮影したネパール料理の「ダル・バード」や「モモ」の写真を見せる。
 - ・日本の食事との共通点・相違点を出し合う。【対比表】
- ③ 「モモ」を作ってみよう！
 - ・モモ作りの手順を動画で確認する。
 - ・役割分担を決める。
- ④ 作って、味わう、ネパール料理モモ
 - ・班ごとに調理する。
 - ・振り返りを行う。



〈モモの写真〉



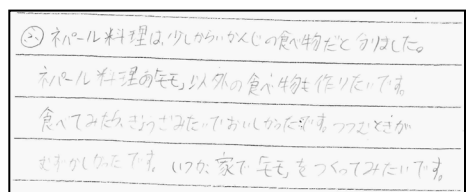
〈モモを調理する子どもたち〉



〈完成したモモとチリソース〉

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ネパール料理は、子どもたちにとって身近な存在ではなかった。ダル・バードという豆のスープをご飯と混ぜて食べるものは特に馴染みのない食べ物であった。しかし、モモを見た瞬間、「餃子みたいだ！」と笑顔になった。見た目が日本の料理と似ていることでネパール料理との距離がぐっと近づいた。
- ◇ 子どもたちの振り返りには、「日本の餃子とそっくりだった」や「味は少し違っておもしろかった」など、異国の文化に触れた感想がみられた。
- ◇ 後日、「家族と一緒に作ってみました」と報告してくる児童もいた。また、「近所のネパール料理のお店に実際に行ってみました」と授業だけでなく、家庭でも興味の広がりを感じられた。



〈児童の振り返り〉

3 使用した教材

＜教材2＞ネパール料理の写真

＜教材3＞モモ作りの動画 YOUTUBE おうちごはんではネパールを応援！「徳島県産豚肉のモモ」

6 時間目「私の夢、あなたの夢」

この時限のねらい

- ・自分の夢をもち、意欲的に生活していこうとする気持ちをもつことができる。
- ・遠い国に住む同年代の子にも自分と同じような夢があり、世界と自分とのつながりに気付く。

1 子どもの活動の流れ

① 学校で見つけた、これ何でしょう？

- ・アイスブレイク「他己紹介」
- ・ネパールの学校で見つけた？をクイズで出題する。

② あなたの夢を教えて！

- ・自分の夢をひとつ書く。
- ・思い浮かばない場合は、好きなことを書く。

③ 同じクラスの友達の夢を予想してみよう！

- ・9つのマスの中に友達の夢を予想して書く。
- ・立ち歩いて交流し、ビンゴを目指す。

④ ネパールの子の夢は？

- ・スライドの続きを見せて、ネパールの子にも夢があることを伝え、予想させる。
- ・実際に夢が書かれた画用紙と写真を紹介する。
- ・振り返りを書く。

年 組 名前

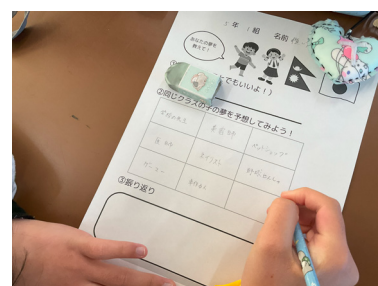
あなたの夢を
教えて！

①夢（好きなことでもいいよ！）

②同じクラスの子の夢を予想してみよう！

③振り返り

〈授業で使用したワークシート〉



2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「夢」と聞かれると、どうしても身構えてしまう児童が多かった。夢といわれて「ない」と即答する児童もいることに驚いた。しかし、ビンゴ形式にして、友達と交流することで柔らかい雰囲気となり、積極的に参加する児童が増えた。
- ◇ ネパールの同世代の子たちの写真に興味津々であった。遠く離れた国の子でも、自分たちと同じように夢をもち、日々学習に取り組んでいることを伝え、「私も夢に向かって頑張りたい」や「まずは、好きなことを見つけてみようかな」と前向きな振り返りが見られた。
- ◇ 遠い国の子でも同じように「夢」があることに気付いてもらうことが目的の授業であった。反応を見ると、プログラマーのような自分と身近な夢をもつ子がいたことに驚いたり、ダンサーやバレーボール選手といったようなネパールで盛んなスポーツを知ることができたりと、日本とネパールの繋がりだけではない幅広い学びが感じられた授業となった。

〈友達の夢を予想する児童〉



〈交流する児童の様子〉

3 使用した教材

＜教材4＞現地で撮影した写真

＜教材5＞現地で行った授業で記入してもらった夢が書かれた画用紙

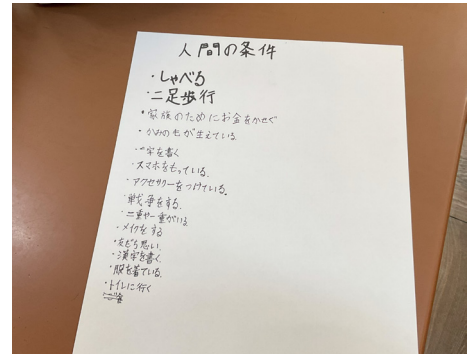
8 時限目「人権週間 貧困は人権侵害!？」

この時限のねらい

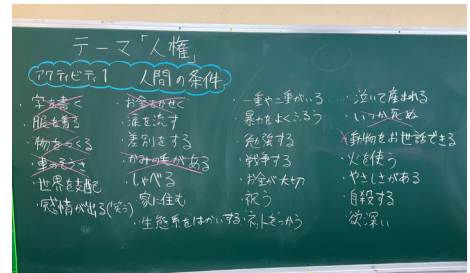
- ・人権についての理解を深める。
- ・他国の事例について知り、自らの人権感覚を高める。

1 子どもの活動の流れ

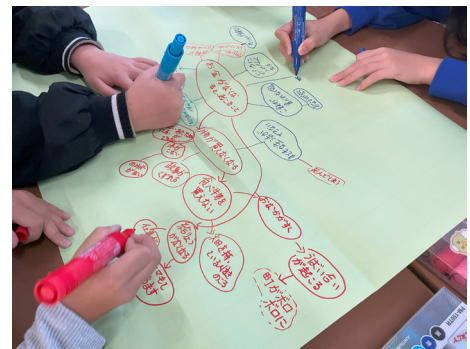
- ① アイスブレイク「これが私のナンバーワン」
 - ・お題「日本のいいなと思うところ」を発表し合う。
- ② 人権って何？
 - ・「人権」と聞いて思いつく言葉は？【ポップコーン方式】
- ③ アクティビティ「宇宙人がやってきた！」
 - ・ルール
「地球に遊びに来た宇宙人。しかし、人間を見たことがありません。この宇宙人に「これが人間だよ」と人間の条件を教えてください。」
 - ・注意事項→その条件はすべての人間にあてはまる？ほかの動物に重ならない？
 - ・世界人権宣言について知る。
- ④ お金が無くなると起こること・・・【派生図】
 - ・「もしもお金が無くなると？」から始まる世界を派生図で書き出していく。



〈アクティビティ「宇宙人がやってきた！」〉



〈人間の条件で出た板書〉



〈派生図で考えを出し合う様子〉

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 本校では毎年人権週間に道德を中心とした授業を通して、児童に人権感覚の育成を行っている。そこで、国際理解教育を通して人権とは何かを知ってもらいたいと考えた。アクティビティ「宇宙人がやってきた」は、国内で行った開発教育指導者研修(実践編)で知ったアクティビティである。子どもたちも楽しく参加していた。途中で、「それって全ての人に当てはまる?」「ほかの動物に当てはまらない?」と問うと、「歩けない人もいる・・・」や「結婚していない人もいるよ!」など、少数派への気付きが見られた。

3 使用した教材

＜教材6＞授業スライド



10 時限目「豊かさって何だろう…?」

この時限のねらい

- ・自分たちの暮らしについて考え、豊かさについての理解を深める。
- ・どの国においても必要とされる「豊かさ」について意見を出し合い、これからの自分の在り方について考える。

1 子どもの活動の流れ

① アクティビティ「もしも願いが叶うなら」

- ・お題「神様が3つ願いを叶えてくれるのなら何を願います?」

② 自分が豊かな生活を送るために必要なものは?

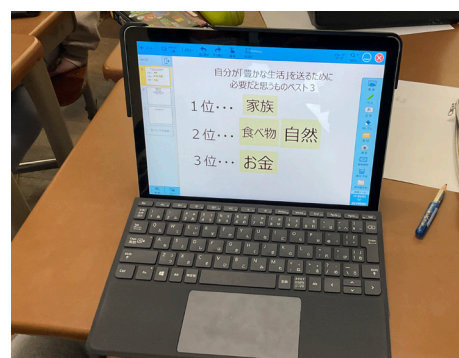
- ・11枚のカードから、自分が豊かな暮らしを送るために必要なものを選ぶ。【ランキング】
- ・全体で交流する。

③ どの国であっても、誰にとっても必要なものは?

- ・②と視点を少し変えて、全体にとって必要なものは何か考え、全体で交流する。

④ 豊かさの定義について知り、これからの自分について考える。

- ・スライドで「豊かさ」について説明する。
- ・豊かさを理解するためには、私たちにとって「必要なもの」と「あるといいなと思うもの」を区別して考えることが大切だということを伝える。【対比表】
- ・振り返りを行う。



〈自分が豊かな生活を送るために必要なもの〉



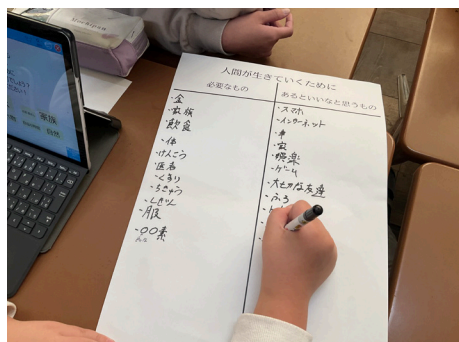
〈考えを交流する児童の様子〉

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ アクティビティ「もしも願いが叶うなら」では、子どもらしい素直な考えが出た。モノを欲しがめる児童が多いことを予想していたが、「健康な体」を願いの一つとして書く児童が多いことに驚いた。
- ◇ 振り返りからは、「今の生活は幸せなのだ気付いた」「どの国にとっても必要なものは、やっぱり友達だ」など、あらためて今の自分の生活を見つめ、考える児童が見られた。

3 使用した教材

〈教材7〉授業スライド



〈対比表に書き込む児童の様子〉

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

<その他の実践その①>

対 象	小学校5年生（71名）	実践日	2024年11月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	1時間
実践内容	◇貧困問題がなぜ解決されないのかを考える。 ◇アクティビティ「貧困の輪」12枚のカードを順番に並べる。 貧困の負のサイクルを体感し、貧困問題を解決するための手立てを考える。		

<周りへの波及活動>

- ◇ 前任校である津島市立神守小学校の6年生の総合的な学習のテーマは「国際理解」である。海外研修前に、ネパールについていくつか質問を募集した。子どもたちの興味関心は高く、「筆箱の中身を知りたいです」「保健室はどうなっているか見てきてください」「給食は何を食べているのですか？」など、自分たちの学校生活とどのような違いがあるのか気になる様子であった。質問されたことをスライドにまとめ、写真を見せながら説明した。実際に授業を行うことは都合上叶わなかったが、少しでも興味を広げ、今後の生活に生かしてほしい。

2 実践の総括

- ◇ 昨年度、初めて国際理解教育というものを知った。子どもたちが参加型教育によって、積極的に学習に参加する姿に驚いた。しかし、実際に世界の課題を肌で感じた経験は自分にはない。実践していく上では、その経験は必須であると感じていた。

今年度、教師海外研修に参加させていただき、ネパールという国を訪問した。自分が予想していた発展途上国の課題を肌で感じる事ができた。しかし、それだけではなくネパールという国から日本の課題も見つかった。それを何とか子どもたちに伝えたいと思った。五感で感じたネパールでの経験を、授業で思いを込めて伝えようと必死に授業を行った。子どもたちの反応から、やはり経験に勝るものはないと感じた。熱をもって伝えられたのである。授業で学んでほしかったことが実生活に目に見えて生かしているかといわれるとそうとはいえない。しかし、いつの日か世界に広く目を向ける子、世界から日本を見つめる子が増えることを願う。そして、我々人類の課題を自分事と捉え、行動に移すことができるといいなと強く思う。今後も、今回の経験を忘れず、地道に実践を積み重ねていきたい。

3 次の実践者へのエール

- ◇ 前年度に開発教育指導者研修（実践編）を経験していたことがとてもよかったと感じた。ネパールで情報収集を行う上でも、授業実践を何となくイメージしていく必要がある。そうでないと、どんな写真が必要なのか、何を教材化すればいいのかが分からない。開発教育指導者研修（実践

編)を1年経験することで、何となくでもイメージをもつことができる。また、書籍なども多く発行されている。1冊でも多くの書籍に目を通し、実践のイメージを掴むことをおすすめする。

◇ 様々な授業アイデアを教師海外研修前に集めておくことをお勧めしたい。一つの写真からでも色々な活用の仕方があることを実感できると思う。

4 参考文献・資料

- 1) 『国際理解教育教材「わたしたちの地球と未来」』公益財団法人愛知県国際交流協会
- 2) 『JICA 中部 教師海外研修ガイドブック』2020 年、JICA 中部
- 3) 『よりよい未来をともに学び・ともに創るファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編』2018 年、NIED・国際理解教育センター

以上

SDGs×キャリア教育 ～「より良い未来」をみんなで作ろう～

所 属	愛知県名古屋市長鳴子台中学校		実践者	山田 拓弥
対 象	中学校 1 年生（ 1 4 9 名）		実践日	2024 年 9 月～2025 年 1 月
実践教科	総合的な学習の時間、英語		時間数	10 時間
テーマ	国際理解、SDGs、キャリア			
ねらい	・世界の課題の背景を考え、より良い社会の実現には、一人一人の行動や協働が必要であることに気づく。 ・より良い社会の実現や SDGs の目標を達成するための「未来の仕事やアクション」を考え、自分にできる行動を積み重ねようとする姿勢を育む。			
実践内容	回	プログラム		備 考
	1	ネパールについて知ろう！ネパール語で自己紹介をしよう！ ・ネパールに関するクイズや、ネパール語での自己紹介を通して、ネパールと肯定的に出会う。【フォトランゲージ】		・教師海外研修の写真
	2	ネパールと日本の共通点・相違点を考えよう！ ・写真を見て、日本と同じ点、違う点を書く。【フォトランゲージ、対比表】 ・あってよい違いとあってはいけない違いを考える。【対比表】		・教師海外研修の写真
	3	ネパールを通して、貧困について考えよう！ ・カードを使って「貧困の悪循環」を学ぶ。【因果関係図】 ・支援の「事例カード」を、「貧困の悪循環」へ貼り、貧困の悪循環を断ち切るにはどのような方法が良いかを考える。【マッチング】		・国際理解教育実践資料集(JICA) ・教師海外研修の写真
	4	SDGs の目標を調べ、自分にできることを考えよう！ ・一人一つ割り振られた SDGs の目標の内容や課題を調べ、自分にできることを考える。廊下に掲示し、他の生徒と学んだことを共有する。		・SDGs CLUB（日本ユニセフ協会）
	5-6	国際的な問題や地域の問題を紹介するポスターを英語で書こう！ (NEW HORIZON English Course1 Unit9 Think Globally, Act Locally)		
	7	市内分散学習を通して企業や団体の SDGs アクションを学ぼう！		・JICA 中部や名古屋国際センターなど
	8	ネパールで活躍している日本の方や企業について知ろう！ ・JICA 海外協力隊の方や企業で働く方の話から、ネパールと日本のつながりやより良い社会の実現のために努力している人たちについて学ぶ。		・教師海外研修の動画
	9-10	未来の仕事やアクションを考えよう！ ・より良い社会の実現や SDGs の目標を達成するために「未来の仕事やアクション」を考え、発表をする。 ・1年間の振り返りと今後心がけたいことを入力する。【行動宣言】		
	成 果	・年間を通して国際理解教育とキャリア教育に関する参加型授業を実践し、肯定的に異文化と出会うことができたり、級友と意見を交換しながら学びを深めたりすることができた。 ・世界の現状を知り、課題の解決のために自分にできることから行動したいという気持ちが高まった。		
課 題	・時間が限られていたため、急ぎ足で行った活動があった。考えを共有したり、深掘りしたりする機会を大切にしたい。また、今年度の実践をきっかけにし、自らの住む地域や自国のことを考える機会を作りたい。			
備 考	・インターネット電話を使って、ネパールの中学生と日本の中学生が交流する機会を計画している。			

〔授業実践の詳細〕

1 時限目「ネパールについて知ろう！ネパール語で自己紹介をしよう！」

この時限のねらい

- ・ネパールに関するクイズや、ネパール語での自己紹介活動を通して、ネパールと肯定的に出会う。
- ・ネパールと日本の文化の違いを知ることで、異なる文化と出会う楽しさを学ぶ。

1 子どもの活動の流れ

① 「ネパールクイズに挑戦しよう！」【フォトランゲージ】＜教材1＞

- ・10個の質問（ネパールの国旗、食事、文化などについてのクイズ）を通して、異文化と出会うことの楽しさを感じる。
- ・ネパールと日本の共通点・相違点に気づく。

② 「ネパール語を使って自己紹介ビンゴをしよう！」

- ・ペアを作りネパール語であいさつをする。互いにネパール語で名前を聞き、名前を聞くことができたならビンゴの欄にサインをしてもらう。＜活動①のプリント＞

ネパール Quiz!!

★ネパールってどこにあるんだろう？地図を塗ろう！

★クイズに答えよう！答えを選びひきをつけよう！【答えが複数の場合もあり】

①	【 A : B : C : 】		
②	【 A : 約3000万人 B : 約1億2500万人 C : 約3億人 】		
③	【 A : 3,776m B : 5,895m C : 8,848m 】		
④	【 A : 3つ B : 5つ C : 8つ 】		
⑤	【 A : B : C : 】		
⑥	【 A : 僧侶の法座 B : 幸せの祭り C : ファッション 】		
⑦	【 A : 1995年 B : 2024年 C : 2081年 】		
⑧	【 A : B : C : 】		
⑨	【 A : 新造祭 B : リニア C : 大台朝早 】		
⑩	【 A : 南はよう B : こんにちは C : さようなら 】		

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ クイズやビンゴを通して、生徒達は楽しみながら、肯定的にネパールと出会うことができた。
- ◇ 生徒達の多くが「とても楽しくネパールのことを学べた。」、「ネパールのことをもっと知りたいと思った。」、「ネパールと日本が意外なところでつながっていることを知って驚いた。」、「ネパール語が相手に通じて嬉しかった。」という感想を述べている。

ネパール Bingo!!

A : ナマステ (こんにちは)

B : ナマステ (こんばんは)

A : タバコ ナム ケ ホ？ (あなたの名前は何か？)

B : メロ ナム オオ ホ？ (私の名前はオオです)

A : タバコ ナム ケ ホ？ (あなたの名前は何か？)

B : メロ ナム オオ ホ？ (私の名前はオオです)

A : ダンネバード (ありがとう)

B : ダンネバード (ありがとう)

A : ダンネバード (ありがとう)

B : ダンネバード (ありがとう)

★名前を聞いたならサインをもらおう！

名前の人	サインをもらおう！	名前の人
名前の人	サインをもらおう！	名前の人
名前の人	サインをもらおう！	名前の人
名前の人	サインをもらおう！	名前の人
名前の人	サインをもらおう！	名前の人
名前の人	サインをもらおう！	名前の人

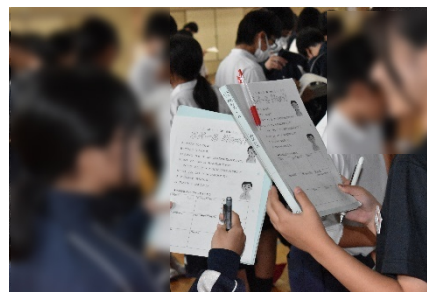
＜活動②のプリント＞



＜活動①の様子＞



＜活動②の様子＞



3 使用した教材

＜教材1＞教師海外研修の写真

2

時限目「ネパールと日本の共通点・相違点を考えよう！」

この時限のねらい

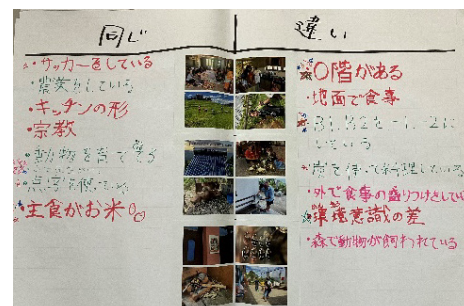
- ・ネパールと日本の共通点・相違点を知る。
- ・ネパールを通して、あってよい違い・あってはいけない違いに気づく。
- ・世界の課題や SDGs を学ぶ必要性に気づく。

1 子どもの活動の流れ

① ネパールと日本の共通点・相違点を知る。＜教材2＞

【フォトランゲージ、対比表】

- ・グループを作り、各グループに写真（教師海外研修の写真）が貼られた対比表を配布する。
- ・写真を見て、日本と同じ点・違う点をグループで書き出す。
- その後、成果物を回し読みする。



＜活動①の成果物＞

② あってよい違い・あってはいけない違いについて考える。【対比表】

- ・学習用タブレットに配布されたカード（手でご飯を食べるなど）をあってよい違い、あってはいけない違いに分類する。

③ あってはいけない違いがこれからも存在したらどのようなことが起きるかを考える。

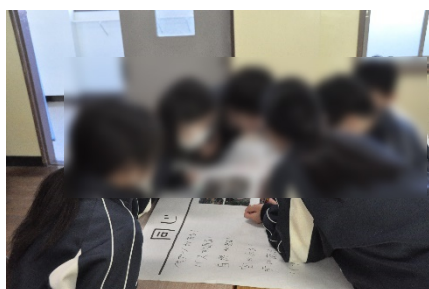
- ・あってはいけない違いは、それぞれの国が抱えている課題だということを知る。
- ・あってはいけない違いは、これからも存在したらどのようなことが起きると考えられるかを班で話し合う。

あってよい違い			あってはいけない違い		
目を怪しがるのはOKのサイン	インドカレー屋と日本のカレー屋が異なる	おでこに黒い粉（チキカ）をつける	多くの子どもが働いている	頻りに停電が起きる	道路が洪水したり、洪水が起きる
ノミスタは、食・住・遊に使える	壁に神様のポスター	手でご飯を食べる	日本では、100円以上の現金でしか買えないものが多い	バスとバスがぶつかる	道路や歩道が壊れている
100円を超えるお菓子が売られている	教室の机を3人で使う	国旗の形が四角ではない	安全な水を飲むことができない	暑いけど寒い雨の季節が長い	スーパーの売り場は、日本より狭い（100円）
牛や羊の加工品を食べない	レンガ作りでカラフルな住宅				

＜活動②の成果物＞

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 写真を使った対比表を作成することで、生徒たちは日本とネパールの共通点や相違点に驚きながらや楽しみながら活動を行うことができた。
- ◇ あってはいけない違いを考えたことで、生徒達は世界の課題に気づき、今後の実践である SDGs の目標を学ぶ活動のきっかけ作りを行うことができた。



＜活動①の様子＞



＜活動②の様子＞

3 使用した教材

＜教材2＞教師海外研修の写真

3 時限目「ネパールを通して、貧困について考えよう！」

この時限のねらい

- ・貧困に陥る過程を「貧困の輪カード」を使って学ぶ。
- ・貧困の輪を断ち切るために活動している人達がいることを知る。

1 子どもの活動の流れ

① 「貧困をなくそう」に関するクイズに答える。

- ・班員と協力して、SDGsの目標①「貧困をなくそう」に関するクイズに答える。スーパーマーケットのチラシを見て、1日約300円の暮しを想像する。

② 「貧困の輪」を考える。＜教材3＞【因果関係図】

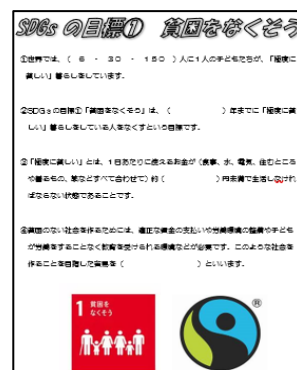
- ・「学校に行けない」をスタートにし、貧困のサイクルを各班で考え、「貧困の輪カード」を模造紙に貼る。
- ・模造紙を他の班に回し、自分たちの班との違いを確認する。

③ 貧困の輪を断ち切るために活動している人たちについて学ぶ。＜教材4＞【マッチング】

- ・支援の「事例カード」を一人一枚受け取り、どのように活躍しているかを読む。その後、班員に発表する。
- ・支援の「事例カード」が「貧困の輪」にどのように関わっているかを考える。「事例カード」に関連する「貧困の輪」カードの近くに貼り、矢印でつなぐ。

④ 貧困の輪を断ち切るための取り組みとして、フェアトレードについて学ぶ。＜教材5＞

- ・フェアトレード・ラベル・ジャパンの動画を視聴し、フェアトレードについて学ぶ。



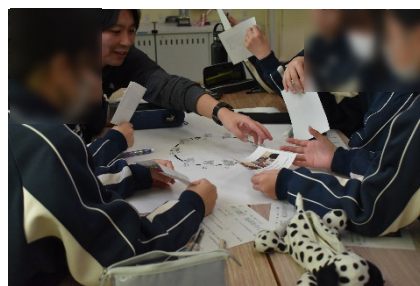
＜活動①のプリント＞

2 子どもの活動の成果・反応

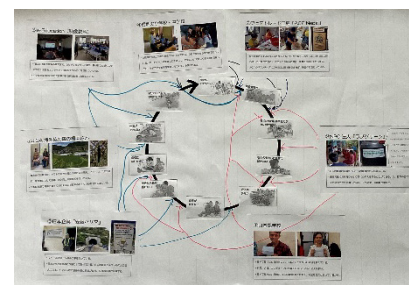
- ◇ 生徒達は、カードを使って貧困のサイクルを学び、世界にはこのサイクルを断ち切るために活動している人たちがいることを学ぶことができた。また、フェアトレードに対しての関心が高まり、実践を行った後に「フェアトレード商品を店で見つけました。」と担任に報告をする生徒がいた。



＜活動②の様子＞



＜活動③の様子＞



＜活動③の成果物＞

3 使用した教材

＜教材3＞JICA 「生きる力」を育む国際理解教育実践資料集「負の連鎖のワークショップ」

＜教材4＞教師海外研修の写真

＜教材5＞フェアトレード・ラベル・ジャパン公式動画「3分で分かるフェアトレード」

7

時限目「市内分散学習を通して企業や団体のSDGsアクションを学ぼう！」

この時限のねらい

- ・市内分散学習の一環として、企業や団体を訪問し、SDGsの目標を達成するために行っている活動について質問をする。
- ・市内分散学習を通して学んだことの発表会を行い、学びを共有する。

1 子どもの活動の流れ

① 訪問する企業や団体について事前学習を行う。

- ・企業や団体がSDGsの目標を達成するために行っている活動についてホームページで調べる。
- ・学習用タブレットを使って、調べた内容をまとめる。
- ・企業や団体に質問したい内容を班で考える。

② 企業や団体が行っているSDGsアクションを学ぶ。

- ・企業や団体を訪問し、SDGsの目標を達成するために行っている活動について質問する。

③ 学んだSDGsアクションについてのまとめを作成し、発表会を行う。＜教材6＞

- ・事前学習で調べた内容に、質問を通して学んだことを加え、まとめを作成する。
- ・市内分散学習を通して学んだことの発表会を行い、他の班の生徒と学びを共有する。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 実際に企業や団体の方から話を聞くことで、様々な企業や団体がSDGsの目標を実現するために努力していることを学ぶことができた。
- ◇ 発表会を通して、自分が訪問した企業や団体以外の取り組みについて学ぶことができた。



＜活動①の様子＞



＜活動②の様子＞



＜活動③の様子＞

- ・SDGsだからやるのではなく、「今やっていること」をSDGsにどう置き換えるかを考えることが大切。
- ・SDGsは一つの内容につき、複数の目標が当てはまることから、自分が今できることを身近で探し実践していきたいです。
- ・自分が苦手だと思っていることを、誰かが得意と思っていることもある。逆に自分が得意なことを、もっと深めていくことで、可能性が広がることが分かりました。

「支援した相手の目が輝いて、希望を持ってくれる時が励みになります」と言っていたJICA中部の職員さんがかっこいいなと思った。

＜生徒が作成したまとめ＞

3 使用した教材

＜教材6＞生徒が市内分散学習で学んだ内容のまとめ

9-10 時限目「未来の仕事やアクションを考えよう！」**この時限のねらい**

- ・より良い社会の実現や SDGs の目標を達成するために「未来の仕事・アクション」を考える。
- ・行動宣言を行い、より良い社会を実現するために自分にできる行動を積み重ねようとする姿勢を育む。

1 子どもの活動の流れ**① SDGs の目標を実現することを目指し、未来の仕事やアクションを考える。**

- ・実践を通して学んだことを踏まえ、SDGsの目標を実現するために「このような仕事やアクションがあったらいいな」と考え、タブレットに入力する。
- ・未来の仕事やアクションが SDGsのどの目標達成に関連があるかを考え、まとめを作成する。

② 考えた未来の仕事やアクションの発表会を行う。

- ・班員に「未来の仕事・アクション」を発表する。
- ・まとめを学級全体で共有する。

③ 1年間の実践を振り返り、より良い社会を実現するためにできることを考える。

- ・より良い社会を実現するために自分ができることを考え、行動宣言を行う。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 生徒達は、市内分散学習や国際理解教育の授業を通して学んだことを踏まえて、「こんな未来になってほしい」という願いを抱きながら、未来の仕事を考え、発表することができた。また、他の生徒の発表を楽しみながら聞くことができた。
- ◇ 「どの国もいろいろな国と助け合って成り立っているから、自分も身近な人と協力し合うことを大切にする。」など、自分にできることから行動したいという思いを行動宣言に記入している生徒が多かった。また、「学校に行けて勉強することができているという幸せを感じたから、一日一日の学校生活を大切にする。」など、当たり前に行っていることが当たり前ではないと気づき、普段の生活に感謝し、その中でできることを考える姿が見られた。

【未来の仕事・アクションの名前】
発電ランナー

【マーク】
7 持続可能なエネルギー

【①関連するSDGsの目標】
エネルギーをみんなに そしてクリーンに

【②仕事の内容】
靴の裏に発電装置をつけ、走ったり歩いたりするときの踏む力を使って発電する。発電した電気は自分で使うか、寄付する。

【③こんな人・ことに役立つ】
発電装置を普通に販売して、マラソンランナーなどの方だけでなく、一般の人でも発電装置をつければ発電することができ、それを充電などに使えるようにしたら、電気代が安くし、地球にも優しい。

【④イメージ写真・イラスト】

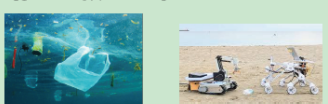

【未来の仕事・アクションの名前】
sea clean game実況者

【マーク】
14 海の豊かさを守ろう

【①関連するSDGsの目標】
海の豊かさを守ろう

【②仕事の内容】
海の自然環境を守るために海に流れてしまったごみをロボットを操作してごみを集めるゲームを実況し届ける。ロボットにカメラを付けることでその生き物について知ることできる。

・【③こんな人・ことに役立つ】
海の自然環境を守りきれいに保つことにより海の生物の減少を抑えることが出来る。
実況者などゲームが好きな人などが気軽にやることができ、それが海の自然環境を守ることができる

【④イメージ写真・イラスト】


【未来の仕事・アクションの名前】
リサイクルイラストレーター

【マーク】
15 陸の豊かさを守ろう

【①関連するSDGsの目標】
陸の豊かさを守ろう

【②仕事の内容】
残ってしまった野菜や食べられなかった野菜で色を作って絵の具にして絵を描く。
絵の具を売る。
またプラスチックなどごみでパレットを作りごみを減らす。

【③こんな人・ことに役立つ】
食べ物の廃棄を少なくしたりごみを無くすることが出来る
また廃棄に使っているお金や絵の具を売ったお金で木や花を植えて緑を増やす。

【④イメージ写真・イラスト】


<活動①の成果物>

[全体を通して]

1 その他の実践・周りへの波及活動

＜その他の実践その①＞

対 象	中学校 1 年生（149 名）	実践日	2024 年 12 月
実践教科	英語	時間数	2 時間
実践内容	◇ 国際的な問題や地域の問題を一つ選び、英語で紹介するポスターを学習用タブレットで作成する。 ◇ 完成したポスターを廊下に掲示し、他の生徒と学んだことを共有する。		

＜その他の実践その②＞

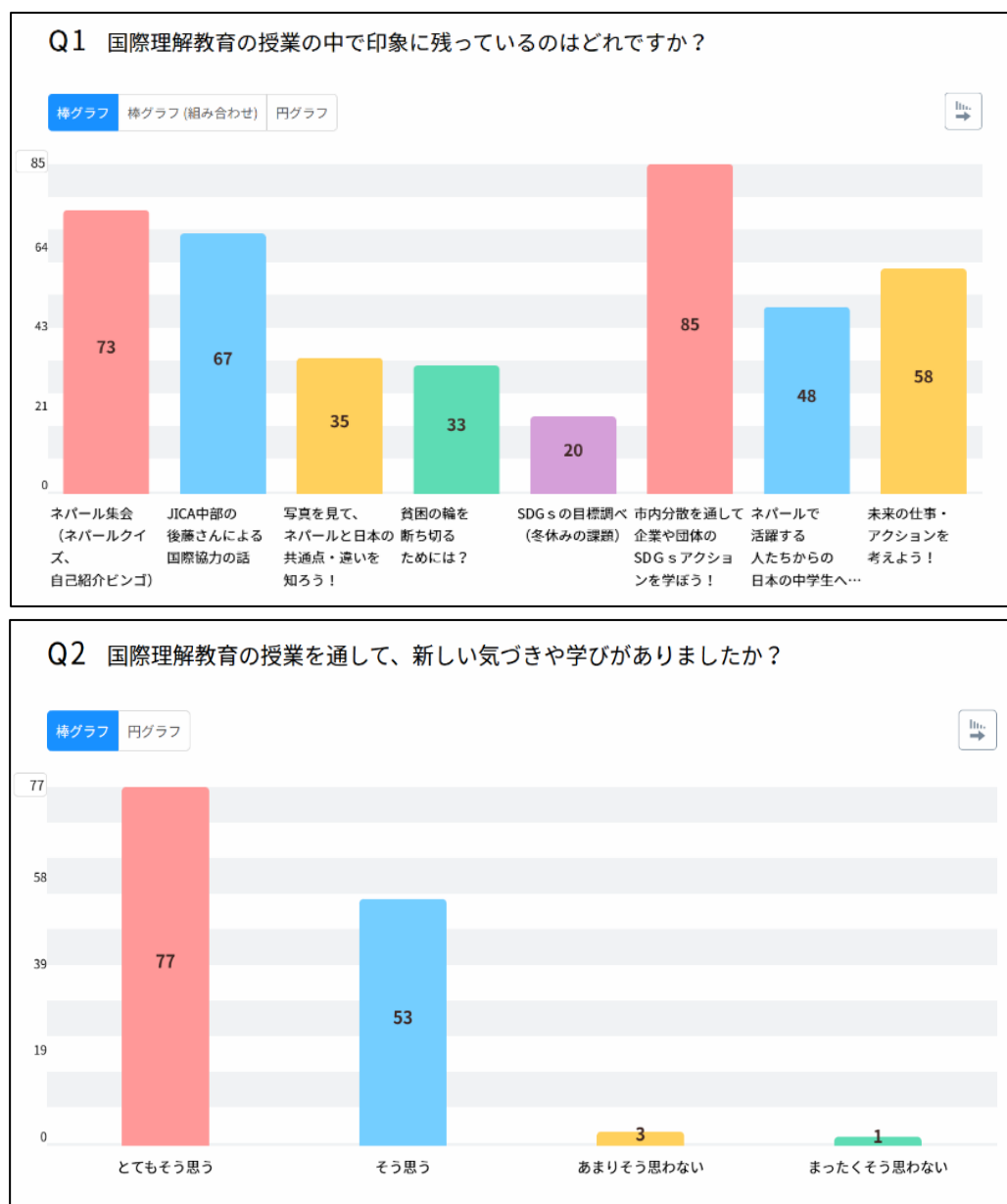
対 象	中学校 1 年生（149 名）	実践日	2025 年 1 月
実践教科	総合的な学習の時間	時間数	1 時間
実践内容	◇ JICA 海外協力隊員や日本の企業で働く方のインタビュー動画から、ネパールと日本のつながりやより良い社会の実現のために努力している人たちについて学ぶ。 ◇ ダイヤモンドランキングの手法を用いて、SDGs の目標を実現するために大切だと自分が思うことの優先順位を付ける。		

＜周りへの波及活動＞

- ◇ 今年度の総合的な学習の時間のテーマを「国際理解教育」に設定し、年間を通して 1 年生の全クラス（5 クラス）で同じ内容の授業を行った。様々な参加型の手法を他クラスの教員に体験してもらう機会を作ることができた。

2 実践の総括

- ◇ 実践の振り返りに「一人ができることは小さくても、自分ができることから取り組んでいき、結果的に SDGs の目標を達成できるようにしたいと思った。」や「自分の国のことじゃないから関係ないではなく、互いに協力することが大切だと思った。」といった記入があった。新たな気づきや学びがあったという生徒やできることから行動に移していきたいという気持ちを高めた生徒が多かった。
- ◇ 国際理解教育は、他者を思いやる気持ちを育むことにつながると感じた。今後も実践を通して、多様な文化や価値観を学び、自分さえ良ければいいではなく、相手の立場に立って考える力を養いたい。
- ◇ 実践を行うことができる時間が限られていたため、急ぎ足で行った活動があった。級友と意見を交換することで考えを共有したり、深掘したりする機会を大切にしたいと感じた。今年度の実践を国際理解教育の第一歩と位置付けし、来年度以降は自らの住む地域や自国のことを考える機会を作りたい。



＜振り返りアンケートの結果＞

3 次の実践者へのエール

- ◇ 生徒達が活発に意見を交換し、新たな学びを得ることを楽しみながら行う姿を見て、改めて参加型授業の可能性を感じました。また、より良い授業を行うためには、私たち教員が学び続けることや新たなことに挑戦し続けることが大切だと実感しました。一方的な知識伝達型ばかりではなく、参加型の手法を用いて、生徒たちが共に考え、共に活動する授業を今後も行いたいと思っています。ぜひ、参加型の手法を様々な場面で取り入れてみてください。きっと生徒たちから「楽しかった。」や「もっと学びたい。」という声が聞こえてくると思います。

4 参考文献・資料

- 1) 上村彰子著／澤井智毅監修 『大人は知らない 今ない仕事図鑑100』 2020、講談社

以上

VI. 研修全体のふりかえり・評価

● 研修受講者アンケート結果から

1. 研修の満足度について

研修受講者 7 人のうち 6 人が、5 段階評価の最上である「とても満足できた」に回答しており、満足度の高い研修であったことがわかる。

【設問 1】

設問 1；教師海外研修は、あなたのあなたの期待または目標達成の支援を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	6	86%
2	満足できた	1	14%
3	ある程度満足できた	0	0%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体	7	100%

2. 開発教育・国際理解教育の実践について

(1) 実践時間及び前年度からの変化

研修受講者の一人平均実践時間は 11.1 時間であった。最短 6 時間から最長 14 時間まで、比較的多くの時間を使った多様な実践が行われた。【設問 2】

実践時間の前年度からの変化では、研修受講者のうち 6 人が「過年度よりも増加した」としている。【設問 3】その理由の主なものは以下のとおりであり、研修に参加してモチベーションが高まったり、開発教育・国際理解教育の手法がわかったりしたことが要因であったといえる。

設問 2；開発教育・国際理解教育の延べ実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	0	0%
2	5～9時間	2	29%
3	10時間以上	5	71%
	合計実践時間数	78.0	時間
	1人当たり平均実践時間	11.1	時間／人

設問 3；過年度に比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	増えた	6	86%
2	変わらない	1	14%
3	減った	0	0%
	全体	7	100%

※実践時間には、実践報告シートの授業時間数のほか「その他の実践」の時間を含む。

<実践時間が増えた理由>

- ◇ 子どもたちと考えたいと思える情報や知識が得られ、実践意欲に繋がったから。
- ◇ 昨年度の研修で学んだことと今年度学んだことが合わさり、自分の引き出しが増えたから。
- ◇ 手法を学んだ分、子どもたちに還元したいという思いが強くなったから。
- ◇ コミュニケーションの重要性をはじめ、学んだことを生徒に伝えたい、学んでもらいたいと強く思ったから。

(2) 実践内容の深まりについて

研修受講者のうち 5 人が「とても深まった」、残り 2 人も「深まった」としている。【設問 4】

その理由の主なものは以下のとおりであり、研修に参加して意欲や関心が高まったり、海外で使える情報が集められたり、開発教育・国際理解教育の手法がわかったりしたことが要因であったといえる。

設問 4；前年度に比べて本年度の実践内容はどうなったと思いますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	5	71%
2	深まった	2	29%
3	ある程度深まった	0	0%
4	あまり深まらなかった＋深まらなかった	0	0%
	全体	7	100%

<実践内容が深まった理由>

- ◇ 発問が研修前より具体的になり、子どもたちが考える内容が深まった。
- ◇ 実際に、見聞きしたことを授業の教材として使用できたことが大きかった。子供たちの食いつきが違った。
- ◇ 今まで取り組んでいなかった分野に挑戦したため。上手くいかない点多々あるが、それが新たな学びや次の実践の意欲となった。
- ◇ 引き出しが増えた分、さまざまなアプローチで探究的な活動を展開できるようになった。
- ◇ より子どもたちの思いを学習活動に結びつけられるようになった。
- ◇ 知識を得るだけではなく、行動へつながるきづきを与えるための授業作りについての理解が非常に深まった。

3. 学習者のより良い変化について

研修の学びを活かして学校で当該教育の授業実践を行った結果、学習者により良い変化があったかとの設問に対し、「とても変化があった」が 4 人、残りの 3 人も「変化があった」であり、研修受講者全員が、学習者のより良い変化を感じ取っていることがわかる。【設問 5】。

設問 5；開発教育・国際理解教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	4	57%
2	変化があった	3	43%
3	ある程度は変化があった	0	0%
4	あまり変化はなかった＋変化はなかった	0	0%
	全体	7	100%

より良い変化の内容として多かったのは、「自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った」が 6 人、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」と「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」が 5 人、「自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にする意識が高まった」が 4 人などとなっており、多様な面でより良い変化があったことがわかる【設問 6】。

設問6；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	6	86%
2	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	5	71%
3	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	5	71%
4	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にする意識が高まった	4	57%
5	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	3	43%
6	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	3	43%
7	自らの生き方や共生について考えるようになった	3	43%
8	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	3	43%
	全体	7	100%

4. 研修内容への評価

(1) 現地研修

<よかったこと（継続してほしいところ）>

◇ホームステイを通して、その国の人々の考えや生活を学ぶことができた。

◇ホームステイ（旅行では気付けない視点が得られる）

◇日本語学校の学生との交流

（彼らの語る夢と特定技能の繋がりが明確であることを目の当たりにした点）

◇防災クラブの子達との交流

◇現地の先生方との意見交流会

◇一般の人はなかなか行けないところに訪問できた。

◇知らなかった課題を目の前で知ることができた。

◇チームを作って教材集めをした事で、教材を集める視点も絞られたし、実践のときにいろいろな教材を使う事ができた。

◇研修参加者の私たちの心と体の健康を気遣った日程となっており、本当にありがたい。

◇毎日の振り返りができるマナビノオト、振り返りミーティングがあったから自分の思いを整理したり、より深く考えたり、多様な視点を得る事ができた。

◇マナビノオトを使ったワークショップ ◇現地でのワークショップ ◇毎日のふりかえり

◇通訳さんが翻訳だけでなく現地の社会情勢に詳しいと、それすらも学びになるのですごよかった。

◇これまでの先輩方のアドバイスがとても参考になったので、引き継ぎは是非とも継続してほしい。

◇ホテルにレストランがあると、気持ち的にも余裕ができてとても良いと感じた。

◇本当に、本当に大満足の内容でした。

◇十分過ぎる研修です...何も提案はありません。感謝しかありません。

<より良くするための提案>

◇特になし

(2) 事前研修、出発前説明会、事後研修①、中間会合など

＜よかったこと（継続してほしいところ）＞

- ◇事前にいろいろな分担ができた事、視点や学んできたいことを整理できたことで、ネパールに行く目的や学びたい事がはっきりした。
- ◇出発前はとにかくできるだけ多くの教材資料を収集しようと思ってしまうが、事前に「何を日本に持ち帰りたいのかを明確にする必要がある」と言ってもらったこと。
- ◇「教材収集」について学ぶ機会、インタビュー内容など明確にして訪問できた。
- ◇気持ちが引き締まってとても良かった。
- ◇とにかく振り返りの時間を沢山とって頂いたことで、自分が感じた、学んだことを丁寧に整理することができた。
- ◇事後研修でプログラムを考えられた事で、自分1人で悩む事なく、仲間の考えを聞きながらつくりあげられたことがよかった。
- ◇十分満足である。

＜より良くするための提案＞

- ◆出発前の研修の時期(事前研修がもう1週間早くなると児童アンケートや子ども達と一緒に学びをえがきやすくなる)
- ◆昨年度の報告書を踏まえた質問の作成を充実させるための分析の時間の確保や、それに沿ったワークショップは絶対にやってほしいと感じた。現地で、質問が昨年度と重複しては継続的に活動する意味が薄れてしまうので。今年の反省でもあるため、来年はそこを生かしてほしい。
- ◆事後研修後のミーティングの在り方、回数の見直し。中間会合や非公式のオンラインミーティングに参加した方が時間的にも物理的にも負担がかさむ形になっていると感じた。背景には、学校現場の現状はここ数年変わり続けており、教員不足からの個々の負担感は否めないため、「個人で考えておく、進めておく」には、以前に比べて限界があることを今回実感したことから、フォーラムやプログラムのことをみんなで考える環境をあえて整える必要性を感じた。
 - ・代案①：11月の中間会合に、PC持参でプログラム作成し、その日にできたところまでを提出する。
 - ・代案②：募集要項の研修の実施日の指定を増やす（オンライン）
 - ・代案③：③11月中旬の研修時期の変更

(3) 全体を通して

- ◇この研修は知識や情報だけではなく、愛や現地の人々の想い、世界とのつながりなどいろいろなことが得られる最高の研修だと思う。勇気を出して挑戦してみるという自分の行動がすでに第一歩を踏み出せていると思うし、そこから実践し続けたいという意欲にもつながった。実践によって子どもたちが少しずつ変わっていく様子を見て、子どもたちに還元することの大切さも学んだ。
- ◇同じ学校の過年度受講者に2年前のフォーラムに誘っていただき、一気に引き込まれた。開発教育ファシリテーターから「ガンジーの言葉であながこの世で見たいと思う変化にあなた自身がなりなさい」という言葉を聞いて、まずは今の自分の望む変化をきちんと言葉にすることが大切だなと思った。迷い悩み続ける日々にもいつもヒントをくれるこの研修。これからも1年に1回のフォーラムに参加して帰って来たいと思う。そしてスタッフの皆さんに会い、初心を取り戻したいと思う。こうやって帰ってこれる場所ができたことが嬉しい。
- ◇この一年をスタートラインにし、様々なことにこれからも挑戦したいと思っている。出発前から報告会まで、様々な面で我々をサポートしていただき感謝。ネパール一期生の皆様から受け取ったバトンを次は二期生の仲間と共に三期生につないでいきたい。
- ◇かけがえのない経験になりました。今後も教師として子どもたちに還元していく。
- ◇せっかくネパールに行かせてもらったので、あと数年はこの活動を主として実践に取り組んでいきたい。選考していただいたことを裏切らないような成果を出せるよう、これからも研鑽に励み子どもや地域に還元していく。

5. 教師海外研修と開発教育指導者研修(実践編)の両方を受講することの効果

本年度は教師海外研修の受講者全員が、開発教育指導者研修（実践編）も受講した。両方の研修を受講することの効果として感じたことは以下のとおり。

- ◇学んできたことを、参加型を用いてより多くの人の考えを知って、より多様な知識を得て実践できる。それが1番だと思う。
- ◇実践編の人たちに報告できる、質問や意見をもらえる、それによって自分自身の学びや実践への思いが深まった。
- ◇やはり何回受けても開発教育指導者研修（実践編）の内容は自分の学びになる。毎年度同じような内容はしない研修内容のおかげだと思う。ネパールで得た教材をこういうのに生かそうと開発教育指導者研修（実践編）で考えることができた。
- ◇研修の機会が増え、教師海外研修参加者と帰国後もつながりを大切にすることができる。

- ◇実践編受講者との関係の構築。（ネパールの学びを受講者に還元しやすい。）
- ◇学びの繋がりが生まれる（資料のやりとり、次に行きたい人、迷っている人がイメージをもてる）
- ◇一番は、海外研修に行っていない受講者に説明（アウトプット）する場があること。特に、実践編の受講者は関心や経験が豊富なので、鋭い質問や疑問が自分の振り返りに役立った。
- ◇実践に落とし込むうえで実践編の受講も必要不可欠だと思う。
- ◇開発教育指導者研修（実践編）があったからこそ、多くの視点と手法をもって、現地にいくことができた。二つを組み合わせなければここまでの学びの量にはなっていない。これ以上の高い質の研修はない。

実践内容の評価

※実践報告書の内容について下記の指標から評価を行った結果をまとめた。

評価は、3人の評価者（開発教育ファシリテーター）が、実践度合いを「全くなし」0点～「特
にあり」5点まで点数化しその平均値で行った。

1 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。

- ① 訪問国を身近に感じられるようになる。
- ② 自分たちとは異なるやり方、考え方、文化をオモシロイ!それもアリ!と思える。
- ③ 自分の当たり前が世界の当たり前ではないことに気付く。
- ④ 自分の中のステレオタイプ／思いこみに気付く。

指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。

- ⑤ 多様な中にも人々の暮らしや感情・希望には多くの同一性があることに気付く。
- ⑥ 人、ものなどを通し、日本と訪問国がつながっていることに気付く。
- ⑦ 訪問国と相互に依存しあい、途上国から様々な恩恵を受けていることに気付く。
- ⑧ 海外で頑張る日本人の想いや活動内容から、生き方・働き方について考える。

指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。

- ⑨ 訪問国には誇りがあると同時に、残念なことがあることに気付く。
- ⑩ 各課題の原因を知り、日本や自分たちとの関わりに気付く。
- ⑪ 各課題の現状を知り、放っておくとその国の人や自分たちにどんな影響があるか考える。
- ⑫ 課題解決のためお互いの国が学び合い、協力し合えることに気付く。
- ⑬ 訪問国の課題から、翻って日本の課題を考える。

2 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。

- ◇ 学習者の年齢・関心の程度に応じて、その意識の流れに沿ったプログラムとなっているか。
- ◇ 学習者が、「知る、気づく」に留まらず、気づきを基に、「自分にできることを考える、実際に行動できるようにするためのスキルを身につける」ことができるようなプログラムとなっているか。

指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。

- ◇ 学習者が内発的に気づいたり、主体性に考えたりできる問いかけや参加型手法を使っているか。
- ◇ 知識伝達のみ・予定調和の答えではなく、学習者が学びあう中で答えを見つけたり、新しい発見ができるようなプログラムとなっているか。

指標⑥ 現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

- ◇ 現地に行ったからこそ得られる素材や情報（教材）を活用できているか。
- ◇ 教材の活用として、単に現地について知ってもらうために見せたりするだけでなく、教材をもとに、「想像する」「読み取る」「対比する」「表現する」などができるような加工や問いかけの工夫があるか。

1. 「学習者の学びの3つの柱」についての実践度

教師海外研修では、3つの学びの柱に沿って、現地での情報収集や実践プログラムづくりを行った。各授業実践に、3つの学びの柱がどれだけ盛り込まれたかについて、受講者の実践報告書の評価を行った。その結果は下表のとおりである。

各柱の実践度を見ると、「柱1：訪問国に肯定的に出会う」と「柱3：共通の課題について共に考え・共に越える」の各実践度は「十分にあり」水準の受講者が5人、その他の受講者も「あり」の水準となっている。「柱2：日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」については、柱1、3よりやや実践度が低くなっているが、全ての受講者で「あり」以上の水準であった。

学びの3つの柱からみた実践内容の評価結果

学びの柱	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	十分にあり 3.5点以上	あり 1.5点以上 3.5点未満	なし 1.5点未満
柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」次のような学びがあるか。	5 71%	2 29%	0 0%
柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」次のような学びがあるか。	3 43%	4 57%	0 0%
柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」次のような学びがあるか。	5 71%	2 29%	0 0%

2. 「学習者主体の参加型、収集教材の活用」についての実践度

本研修では、開発教育・国際理解教育を通して、世界における共通の課題解決に向けた行動につながるプログラムの作成、学習者の主体的な学び合いを支援する参加型手法の活用ができる指導者育成をめざしている。また、海外研修においては、現地で得られる教材を活かして実践をすることも求めている。受講者の実践において、関連する3つの指標について評価した結果は下表のとおりである。

各指標ともに、「十分にあり」水準の受講者が5～7人、その他の受講者も「あり」の水準となっている。

参加型・現地教材活用の実践度からみた実践内容の評価結果

参加型・現地教材の活用	実践度(上段:人数、下段:割合)		
	十分にあり 3.5点以上	あり 1.5点以上 3.5点未満	なし 1.5点未満
プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。	5 71%	2 29%	0 0%
学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。	7 100%	0 0%	0 0%
現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。	7 100%	0 0%	0 0%

2024年度 教師海外研修報告書

発 行 2025年3月

発 行 者 独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA中部）

〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7

Tel：052-533-0220（代表） Fax：052-564-3751

<http://www.jica.go.jp/chubu/>
